



## 平成23年度 神戸大学地域連携活動報告書

神戸大学地域連携推進室

---

**(Citation)**

神戸大学地域連携活動発表会報告書, 2011(平成23年度):1-84

**(Issue Date)**

2012-03

**(Resource Type)**

report

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCOI)**

<https://doi.org/10.24546/81003822>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003822>



**平成 23 年度**  
**神戸大学地域連携活動報告書**

**平成 24 年 3 月**  
**神戸大学地域連携推進室**

はじめに

2011年3月11日、東日本を大地震と大津波が襲い、大きな爪痕を残しました。それに伴い起こった東京電力福島第1発電所の事故と相まって、今なお被災地は、苦しみながら復興への道を歩んでいます。亡くなられた多くの方々に深く哀悼の意を表するとともに、被災された方々に心よりお見舞いを申し上げます。阪神・淡路大震災の経験を持つ神戸大学の地域連携推進室として、地域連携という持ち場から出来る限り被災地に寄り添い、当時の経験を伝えるべく努力してまいりたいと存じます。

神戸大学の地域連携事業は、阪神・淡路大震災の経験と深く結びついています。地域の被災の中で、本学の教職員や学生達は、地域に足を運び、地域の人々とともに、大学が地域にできることを考え続けました。その後、本学発足以来の長い蓄積にその経験が加わり、文部科学省の様々なプログラムの支援を受けながら、新たな事業を立ち上げてきました。平成15年からは、地域連携推進室を設置し、自治体や地域の方々と信頼関係を深め、持続的な努力を重ねてきております。

本書は、平成23年度の地域連携活動を報告するために行われた、神戸大学地域連携活動発表会の報告および、人文学研究科、保健学研究科、農学研究科の各地域連携センターの活動概要をまとめたものです。

2012年1月20日に行われた地域連携活動発表会では、テーマに「拠点をもつ意義」を掲げました。地域に設ける「拠点」は、継続的な地域連携活動において、特に重要な意味を持ちます。本学では、昨年度締結した篠山市との連携協定をもとに、篠山フィールドステーションを設けています。第二部では、「地域連携と拠点」のご講演をもとに、本学のフィールドステーションの活動を中心に、その利点や課題について意見交換を行いました。各センターの事業担当者やフィールドステーションの駐在研究員、篠山市の行政担当者、フロアからの発言も加わり、率直な意見が述べられています。

地域連携推進室は、大学が地域の一員としての責務を果たして行くために、地域と大学をつなぐ要として、支援を進めております。地域連携活動についてのご要望、ご提案、また本書について、ご意見やお気づきの点がありましたら、いつでもお寄せください。今後とも本学の地域連携に対する変わらぬご支援、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

神戸大学地域連携推進室 室長

奥村 弘

# 目 次

## はじめに

## 第Ⅰ章 地域連携活動発表会 3

### プログラム

基調講演 奥村 弘  
「地域連携と拠点」 内平 隆之  
意見交換会～連携の拠点をもつ意義～  
アンケート

## 第Ⅱ章 研究科地域連携センター報告 43

人文学研究科地域連携センター  
保健学研究科地域連携センター  
農学研究科地域連携センター

## 第Ⅲ章 学内公募事業活動報告 59

### 地域連携事業 60

伊藤 真之 人間発達環境学研究科教授  
西村 善博 医学研究科准教授  
賀谷 信幸 システム情報学研究科教授

### 地域連携継続事業 66

河井 克之 都市安全研究センター准教授  
松岡 広路 人間発達環境学研究科教授

### 学生地域アクションプラン 70

藤江 麻希 神戸大学アメリカンフットボール部 Ravens  
山田 恭平 From KOBE  
長井 拓馬 ユース六篠

### 募集要項 76

## 付録 79

地域・だいがく連携通信 Vol.9  
地域連携活動発表会告知チラシ

# 第1章

## 地域連携活動発表会

## 平成 23 年度 神戸大学地域連携活動発表会

- 日 時 平成 24 年 1 月 20 日 (金) 13 : 30 ~ 16 : 30  
○会 場 神戸大学瀧川記念学術交流会館 2 階 大会議室  
○主 催 神戸大学地域連携推進室  
○テーマ 地域との連携の深まり — 拠点をもつ意義

### ○プログラム

開会挨拶	中村 千春 理事 (地域連携担当)		13 : 30 ~ 13 : 35
<b>【第一部】</b>			
1. 基調報告	奥村 弘 地域連携推進室長	(15分)	13 : 35 ~ 13 : 50
2. 事例報告			
1) 平成 23 年度地域連携事業報告		(30分)	13 : 50 ~ 14 : 20
(1) みんなで考えよう安全・安心で快適なまちづくり			13 : 50 ~ 14 : 05
都市安全研究センター	河井 克之 准教授		
(2) ESD ボランティア育成プログラム拡張支援事業			14 : 05 ~ 14 : 20
人間発達環境学研究科	松岡 広路 教授		
2) 平成 23 年度学生地域アクションプラン活動報告		(15分)	14 : 20 ~ 14 : 35
自給自足への道~自分で作った米で被災地支援~			
ユース六篠	寺下 和輝		
3) 質疑応答		(5分)	14 : 35 ~ 14 : 40
—休憩—		(10分)	14 : 40 ~ 14 : 50
<b>【第二部】</b>			
1. 講演「地域連携と拠点」		(30分)	14 : 50 ~ 15 : 20
兵庫県立大学	内平 隆之 講師		
2. 意見交換会 ~連携の拠点をもつ意義~		(65分)	15 : 20 ~ 16 : 25
<司会>	奥村 弘		(準備完了後開始)
<パネリスト>	内平 隆之		
	坂江 渉 (人文学研究科 特命准教授)		
	石岡 由紀 (保健学研究科 博士後期課程)		
	布施 未恵子 (篠山フィールドステーション 地域連携研究員)		
	山田 辰男 (篠山市政策部企画課 篠山に住もう帰ろう室 主査)		
閉会挨拶	奥村 弘 地域連携推進室長		16 : 25 ~ 16 : 30

※会場後方に、人文学/保健学/農学 各研究科地域連携センター活動報告のポスターを掲示しておりますので、ご自由にご覧ください。

# 基調報告

地域連携推進室  
室長 奥村 弘

毎年、この時期に地域連携活動発表会を行っています。今回は、地域との連携の深まり、特に拠点を持つことの意味や意義に中心を置いて、発表会をさせていただこうと思っています。

第一部では今年度の様々な地域連携活動に関しての報告をいただきます。第二部では「地域連携とその拠点の持つ意味」をテーマに、ご講演を兵庫県立大学の内平さんをお願いいたします。内平さんは、本学農学研究科地域連携センターで活動されておりました、私たちの仲間の一人です。その後、内平さんにも加わっていただき、意見交換会を行いたいと思います。よろしくお願いいたします。

本学では、2003年以降に地域連携推進室や各部局ごとにセンターが設置され、今に至っています。この間の成果と課題というものを考えるのに、「拠点」を持つことから考えてみたいと思います。

地域連携推進室は、2008年以来基本理念を5つ掲げ、神戸大学と地域とが連携することの意味を考えてきました。まず第1には、私たち大学自身が学術文化における地域社会の担い手であることをきちんと自覚し、その地域のリーダーとして頑張っていこうということ。第2には、神戸という「場」に即した、国際港湾都市としての神戸市の持っている意味ということで、文化的な価値を高めると共に、世界に発信しうるような地域連携事業をしたいと考えています。また、兵庫県自体は日本の縮図と言われるように多様な地域社会から成り立つ地域です。その中にある、ある意味では多様な地域を持つ大学として、その地域の発展や活性化につながる普遍的な課題を全国にも提言していきたいと考えています。さらに、4番目として、持続的な連携関係というものがないと地域との関係は上手くいかないと考えていますので、私たちは始めた以上は長期的にしっかりした信頼関係を続けていくということを重視したいと考えています。また、地域連携の成果に対して関係しているみなさまと共に、私たち自身の大学の教育や研究の拠点としてその場を活用させていただきたい、以上これらが基本理念です。

現在の地域連携につながる動きは、先ほども理事の方からお話がありましたが、17年前の阪神・淡路大震災に遡ります。震災後、それまで個別の先生方や部局の中でやられていたことを、大学として全体に支えていくということになりました。そして、神戸大学では、3つの領域、「地域文化」、「自然環境」、「少子高齢化」という3分野を基本としながら、様々な分野に展開してきました。また、「部局を中心とした」体制で地域連携を進めています。大学によっては、地域連携推進室のような室を大きく作っておられるところもあります。神戸大学は、室を大きくするというよりはむしろ、地域連携を進めていく部局を中心として実施体制を組んでいく、そこを重視させていこうということが特色であるかと思います。また同時に、私たちの大学は、長い間の兵庫県の歴史の中で、関わりの深い施設のあるところや元々本学のキャンパスがあった地域と絆を継続的に深めていくことを重視しています。また、何とか財政的な基盤を確立したいと考えています。こちらはなかなか上手くいっていません。また現在、自治体の取り組みが財政難もありまして弱っています。学術文化に関する自治体等への人材バンク的な要素を拡大する必要があると思います。最後のところは、そういう地域連携事業に対して、これを担う研究者に対して大学としての評価

をしていきたいと思います。ただ、これは毎回この発表会やシンポジウムで議論しているのですが、なかなか上手くはいきません。しかし、この数年間、特にここ3年位、地域連携というものを、教員や研究員の公募要領に掲げる大学が増えてきました。地域連携をするということで公募している場合と、その専門プラス地域連携というように両方を合わせて公募している場合があります。それだけ日本の地域社会が大変だという現れだだと思います。そういった中で、私たちの大学で地域連携に携わっていた20代の後半から30代にかけての層の方からも、何人か就職していくことが出来るようになりました。神戸大学での地域連携の経験を基に、全国で展開していく方が生まれてきたということです。少しずつこのような役割を果たしていけるようになってきたように思います。

重点領域の部分ですが、3センターを中心とした対応を現在行っています。しかし、2003年から約8年間活動してきましたが、文化、環境、少子高齢化の3領域の問題というのは、決して3つの部局だけでバラバラに対応するのではなく、相互に関連して自治体の方から要望されることが増えてまいりました。3センターが相互に学内で連携し、主要な事業のところが事務局となしながら、ある意味ではたまにはぶつかりながらも、展開をしてきています。そういった形で、学内における拠点の形成がこの2年、3年間位でかなり深まってきました。これが、神戸大学の地域連携の特色かと思います。

神戸大学では、複数部局との事業を基本とした大学協定という考え方を取っています。自治体の方々と色々なことを考えるときに、単独でそれぞれの部局ごとにそれぞれの課題に見合った形で連携しています。大学全体としましては、複数部局が関連しているようなものには、総合的に対応して進めていきたいと考えています。現在、そのようなことが出来る自治体が徐々に生まれて来ており、篠山市がこういう点ではモデルになってきています。もう一つは、本学の六甲台キャンパスのある神戸市灘区の位置付けが非常に重要な意味を持っていると考えています。これについては後でも少し触れたいと思います。その他にも配布資料にありますように、様々な形で動きが出ています。別紙1に神戸大学と自治体との協定の一覧がございますので、後ほどご覧ください。

学内での新領域の開拓も行っています。これは公募事業の展開ということで触れています。学生主体の事業の公募事業も募集しています。学内では学生主体の活動は、ボランティア支援室が主として担当していきまして、そちらに協力をしていただきながら展開しています。さらに、単に教員と学生だけでなく、職員の方の主体の事業もその対象にしています。これまで、病院や図書館の職員さんが応募、採択されています。職員のみなさんの自発的な活動も含めて展開していくところに私たちの活動の特色があると思います。別紙3に、公募型の地域連携事業の一覧が掲載されていますので、ご参照ください。

また、「神戸大学・灘区まちづくりチャレンジ事業」という公募型事業もあります。灘区の予算、学内で公募という形で、灘区の事業を展開しています。これも、私たちが色々な形の連携があるんだなと教えられる事業が出てきています。そういう形で新領域の事業を開拓をしてきました。そういった事業の中から、継続化されたものがあります。その一つが、後で報告いただく人間発達環境学研究科の松岡さんの事業です。新領域も何年かやっていただいて、それで継続化されたものには持続的に支援をしていこうとしています。

先ほどの灘区との連携は、大都市の中の具体的な課題に対応するような形です。小野市との連



携では、人文系のモデル事業になるようなものを展開しています。さらに篠山市とは、今日はそれが中心になりますが、農学研究科がフィールドステーションを置き、それが全領域での総合的支援体制に少しずつ移行していきました。それによって、今までに見えて来なかった新しい連携の可能性も生まれてきました。また、須磨区の事例は、子育て支援の中核的な役割を果たし、これがさらに国際的なインドネシアとの連携などにつながっている例です。その他3センターを中心に、自治体等との共同研究の資金受け入れも継続的な形で行われるようになってきました。教育への反映は、共通教育のESDなどで、地域連携事業と関係のある部局だけでなく全学的なものとして進みつつあります。

今回、日経グローバルの大学地域貢献度ランキング調査の中で、神戸大学は全国489校中総合10位になりました。何位かということもありますが、総合10位になったことの内容が重要であると考えています。たとえば、全学で、講演会だけでも年間150件を超えて行われています。大体2日に1回ずつ位、どこかのセンターや関係のところで講演会をしています。このように部局を中心にさまざまところで、たくさんの掘り起こしをしながら、全体に事業を展開しているところが重要であると考えます。そういう大学全体の力をさらに活かしていくにはどうしたらいいのか、今後も考えていく必要があると思っています。

このように、神戸大学では、部局を中心とした形で、持続的に地域連携活動を進めています。その中で地域連携に適した勤務形態や勤務場所、成果物の販売、受講料等々、今まで国立大学法人に無かったような法規上の問題や規則等の整備などもやらなければならない問題も出て来ます。推進室としてはこういう問題を具体的に一つずつ前へ進めていく必要があります。また、地域連携についての学内の教職員の理解が、大学の中でも強いわけではありません。そういうところも積極的に理解を進めていく必要がありますし、コーディネートする職員や研究員の継続性と専門性をさらに拡大していくにはどうしたら良いか、という課題もあります。そういったことを一つ一つ解決しながら次に進みたいと考えています。本日は、私たち自身にも色々な情報をいただいて、皆様とともに考え、その中から新しい発想を生むことが出来ればと思います。以上、簡単に私の方から今回の発表会の意味と、それから今の神戸大学の地域連携の現状について報告いたしました。

## 神戸大学の地域連携事業の成果と課題 2003-2011

神戸大学地域連携推進室長

奥村 弘

## 神戸大学の地域連携事業の基本理念

### <基本理念>

- ①神戸大学は、学術文化における地域社会の重要な担い手であることを自覚し、この分野における地域社会のリーダーとして、組織的に地域(連携)活動をを進める。
- ②神戸の持つ国際的港湾都市としての文化的な位置を高め、地域から世界へ発信しうる地域連携事業を展開する。
- ③兵庫県の多様な地域社会に対応しながら、そこから地域社会の発展、活性化につながる普遍的な課題を全国に発信する。
- ④県内の自治体や地域団体との持続的な連携の継続を進め、長期的な信頼関係を深める。
- ⑤地域連携の成果を生かし、関係自治体等に本学の教育研究フィールドを整備する。

## 当面の目標

- (1)これまでの自治体等との実績に基づいた三つの中期的な重点領域を設置する。  
本学は、90年代後半以降、意識的に展開され、自治体や地域団体等と信頼関係を構築してきた三つの領域を重点領域としながら、ここでの信頼関係を基礎に、他の分野においても着実な地域連携を展開する。  
①地域の歴史遺産の利活用等による地域文化の育成 ②地域社会の自然環境利用による地域の活性化 ③少子高齢化社会に対応した地域支援
- (2)部局を中心とした事業実施体制を充実させる。
- (3)神戸大学の関連施設所在地との継続的な連携関係の構築する。
- (4)自治体のみならず、銀行や地域の企業とのメセナ的な対応を求め、財政的な基盤を確立する。
- (5)学術文化に関する自治体等の取り組みの困難化に対応する人材バンク的な要素の拡大する。
- (6)地域連携事業に対して、これを担う研究者に対して、大学としての評価を確立する。

## 重点領域の推進

- 人文学(地域文化)、農学(自然環境)、保健学(少子高齢化)の3センターを中心とした対応  
※相互連携、関係部局の事務局 → 学内拠点形成
- 複数部局との事業を基本とした大学協定  
※本学関係施設所在地等との連携強化 → 自治体拠点形成  
加西(食資源)・小野(病院)・篠山(農学)・灘区(本部キャンパス)・須磨区(保健)・南淡路(海事)

## 新領域の開拓

- 公募事業の展開
- 学生主体の事業→ボランティア支援室  
職員主体の事業→積極性を引き出す  
教員主体の事業→新領域開拓と持続性  
※発達・都市安の地域連携事業の継続化  
灘チャレンジ事業(灘区公募型)の活用

## 内外拠点形成型連携の成果

- 灘区 → 行政区との連携 全国初 大都市の課題
- 小野市→国立大学人文系のモデル事業(3つのGP、特別研究) ※GP等
- 篠山市→フィールドステーション、全領域での総合支援体制確立 2名の研究員 拠点自治体の形成
- 須磨区(神戸市)→子育て支援の中核的な役割 インドネシアとの国際的な連携
- 3センターの自治体等との共同研究等の資金受入→長期的な信用の形成と持続的研究の展開
- 教育への反映 共通教育、全学科目(ESD、地域遺産等)
- 日経グローバル 全国8位 国立総合大学2位 の意味

## 現在の課題

- 地域連携を持続的に進める内外拠点強化  
篠山市・灘区型拠点 須磨区・三木市・小野市・加西市等  
3センターへの講師、助教等の配置
- 地域連携を円滑に行うための規則整備  
※勤務形態、勤務場所、成果物の販売、受講料等
- 地域連携についての教職員の理解の拡大と  
室職員・コーディネーターの継続性と専門性

神戸大学と自治体との協定

締結年月日	協定期間	協定先	調印者	目的
H16.12.2 (自動更新)	1年間	神戸市灘区	神戸市灘区長	地域福祉向上のための連携 産業振興のための連携 教育・文化・スポーツの振興及び発展のための連携 人材育成のための連携 まちづくりのための連携
H17.1.26 H20.1.25 (更新)	3年間	小野市	小野市長	文化・教育及び学術の分野で援助、協力 生涯学習等に関する諸課題 文化遺産を活用した地域との連携事業について 共同で研究等に参画
H17.3.23 H20.3.21 (更新)	3年間	兵庫県朝来郡生野町 (現朝来市)	兵庫県朝来郡生野町長	文化・教育及び学術の分野で援助、協力 生涯学習等に関する諸課題 文化遺産を活用した地域との連携事業について 共同で研究等に参画
H17.12.2 H20.12.2 (更新)	3年間	兵庫県 (まちづくり担当部)	まちづくり担当部長	県下の市町や県民が取り組むまちづくり、文化及び学術の分野で連携 地域の歴史的資源の活用、優れた景観の形成等を通じてまちづくりに関する調査・研究
H21.3.10	3年間	兵庫県	兵庫県知事	地域医療の充実と質の向上のため、地域の実情を踏まえた新しい地域医療のあり方を研究し、地域医療を協働で支えるシステムの構築
H21.5.19	3年間	加西市	加西市長	文化・教育及び学術の分野で連携 生涯学習等に関する諸課題 文化遺産を活用した地域との連携事業について 共同で研究等に参画
H22.8.2	3年間	兵庫県	兵庫県知事	農学研究科附属食資源教育研究センターを通じての連携 朝野飛行場跡地と川西航空朝野工場関連施設などの戦争遺産の学術調査(終了)
H22.8.30	3年間	兵庫県 篠山市	篠山市長	地域の課題に迅速かつ適切に対応し、活力のあふ個性豊かな地域社会の形成、発展に寄与 長年にわたり培ってきた信頼関係と連携・協力実績を基盤とし、さらなる地域の活性化と発展に向けて連携・協力を

部局における自治体との協定

締結年月日	協定期間	協定先	協定部局	目的
H15.4.5 (H22.8から大学協定)	1年間	篠山市	農学研究科	「神戸大学大学院農学研究科・篠山市地域連携計画書」の策定とこれに基づく連携 地域課題の解決のための連携 産業振興のための連携 まちづくりのための連携 人材育成のための連携
H19.6.20	1年間	神戸市東灘区	海事科学研究科	・海事に関する教育・文化の推進及び振興 ・まちづくりの推進 ・人材の育成
H19.8.24	1年間	丹波市	人文学研究科	・地域の古文書を主とする歴史文化遺産の調査・研究・保全 ・歴史文化遺産を活用したまちづくりの推進 ・歴史文化遺産を活用しうる人材の育成
H20.1.9	1年間	神戸市須磨区	保健学研究科	・健康づくり、まちづくりの推進に関すること ・子育て支援、障害者支援、高齢者支援の推進に関すること
H20.3.26	5年間	兵庫県病院局	医学研究科 医学部附属病院	医学及び医療における研究、教育及び診療に参画するとともに、高度専門医の養成を図る。
H20.6.11	3年間	財団法人 兵庫県国際交流協会	国際文化学研究科	地域社会の国際交流、多文化共生に貢献することを目的として、以下の活動に関し、協力して参画する。 ・相互協力、ボランティア、講師の相互派遣 ・共同事業活動 ・学生と在日外国人及び地域社会との交流
H21.4.1	3年間	兵庫県企画 県民部	経済学研究科	地域政策統計及び関連する分野において、以下について連携協力 ・経済学研究科で開講する「地域経済統計論」「リカレント経済分析」等の教育 ・シンポジウム、研究会、講演会等の実施 ・学術情報、資料、データ等の交換 ・両者の行なう諸事業への学生及び県民の参加の促進 ・その他、関連する諸活動
H21.6.26	3年間	南あわじ市	国際文化学研究科	「大学の知」と南あわじ市の「地方文化の習」が出会う共同の研究と教育の実践の場を作る。 地域の国際化や地域文化の発展、国内外への地域文化発信などの課題に共同で取り組む。
H21.7.17	3年間	兵庫県立美術館	人間発達環境学研究所 発達科学部	双方の持つ資源を活用し、芸術の振興を図るとともに、地域社会に貢献できる人材を育成する
H21.7.30	3年間	多可町(兵庫県多可郡)	経済学研究科	「まちづくり・むらづくり」事業、地域政策に関する調査、研究及びその成果 普及のための連携協力
H22.4.1	1年間	神戸市企画 調整局	人文学研究科	・震災関連資料の目録作成に関すること。 ・その他震災関連資料の整理・保存に関すること。 ・震災関連資料の活用を検討に関すること。
H22.11.1	1年間	国立療養所 邑久光明園	人間発達環境学研究所	学生らがワークショップを基盤に実施し、ハンセン病問題の教育や啓発に協力し、同園の広場づくりや地域の行事に参加、また大学が開くセミナーに講師を派遣する。

## 教育改革プロジェクト 採択プログラム一覧

(太字：地域連携関係、医学研究科・法科大学院関係は除く)

\*\*\*\*\*

### ◇質の高い大学教育推進プログラム

- 平成 20 年度
- ・ 21 世紀型市民としての法学士育成計画 - 能動的学びにより政策判断能力・プレゼンテーション能力を涵養する教育課程の開発と実施 -
- ・ 食農コア教育による実践型人材の育成 - 食と農の現場と大学とのコミュニケーションの充実を通じて -

### ◇現代的教育ニーズ取組支援プログラム

- 平成 19 年度
- ・ アートマネジメント教育による都市文化再生 - 阪神地域の文化・芸術復興を目指す教育カリキュラムの開発 -
- ・ アクション・リサーチ型 ESD の開発と推進 - 学部連携によるフィールドを共有した環境教育の創出 -
- 平成 17 年度
- ・ 震災教育システムの開発と普及 - 阪神淡路大震災の経験を活かして -
- ・ PEP コース導入による先進的英語教育改革: 総合大学におけるプロフェッショナル・イングリッシュ・プレゼンテーション能力育成プログラムの開発
- 平成 16 年度
- ・ 地域歴史遺産の活用を図る地域リーダーの養成

### ◇新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム

- 平成 20 年度
- ・ 地域に根ざし人に学ぶ共生的人間力 - 震災の記憶の伝承と組織的体制の構築による学生活動支援 -

### ◇先導的 IT スペシャリスト育成推進プログラム

- 平成 18 年度
- ・ 高度なソフトウェア技術者育成と実プロジェクト教材開発を実現する融合連携専攻の形成 (共同プロジェクト)

### ◇産学連携による実践型人材育成事業

- 平成 20 年度
- ・ サービス産業における価値創造・獲得を果たすイノベーション創出のための人材育成プロジェクトの開発

### ◇専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム

- 平成 20 年度
- ・ 産学連携による MBA プログラムの高度化 - 戦略的品質管理リーダー育成から発展する専門職大学院教育の洗練 -

### ◇資質の高い教員養成推進プログラム

- 平成 18 年度
- ・ 地域文化を担う地歴科高校教員の養成 - 我が国の人文科学分野の振興に資する国立大学と公立高校の連携プロジェクト -

### ◇大学院教育改革支援プログラム

- 平成 20 年度
- ・ 古典力と対話力を核とする人文学教育
- ・ アジアにおける双方向型保健学教育の実践
- 平成 19 年度
- ・ 文化情報リテラシーを駆使する専門家の養成
- ・ 正課外活動の充実による大学院教育の実質化
- ・ 経営学研究者の先端的養成プログラム
- ・ 大学連合による計算科学の最先端人材育成

### ◇「魅力ある大学院教育」イニシアティブ

- 平成 17 年度
- ・ 国際水準に挑む次世代政治学研究者養成計画
- ・ 教育組織と手法の Re-bundling (共同研究を軸とする経済学の先端教育)
- ・ 経営学研究者養成の先端的教育システム
- ・ 国際交流と地域連携を結合した人文学教育
- ・ 国際政策学研究者養成に向けた大学院教育
- ・ 生命医科学リサーチリーダー育成プログラム

### ◇戦略的産学連携支援事業

- 平成 20 年度
- ・ アクティブ・ラーニング型学生派遣・受入プログラムの構築を通じた広域的な大学間連携
- ・ 大学教育充実のための戦略的産学連携支援プログラム

### ◇大学教育の国際化加速プログラム (国際共同・連携支援)

- 平成 20 年度
- ・ アジア農業教育の国際プラットフォーム形成 (共同プロジェクト)
- 平成 19 年度
- ・ 三極連携による複学位共同教育プログラム (アジア研究の専門的人材養成における日・欧米・亜の国際協力)
- ・ 大学院教育の国際展開と国際的人材育成
- 平成 18 年度
- ・ 国際海事セキュリティ管理の高度教育推進
- 平成 17 年度
- ・ アジア農業戦略に資する国際連携教育の推進 - 国際的指導者を育成する革新的な学部連携教育プログラムの開発 -

## 公募型地域連携事業一覧

## 1. 地域連携事業 採択事業（教職員対象 公募事業）

	部局名等	支援事業名
平成	医学部附属病院総合診療部	地域と連携した卒前・卒後医学教育の新たな取り組み
19年	医学部附属病院	地域住民の後発医薬品・保健薬局利用支援と現役薬剤師の職能向上支援事業
	薬剤部	ESD ボランティアプログラム推進のための組織化支援事業
	人間発達環境学研究所ヒューマン・コミュニケーション創成研究センター	地域に根ざす都市安全オープンセンター
	都市安全研究センター	ESD に資するボランティア育成事業の推進による連携ネットワークの構築
20年	人間発達環境学研究所ヒューマン・コミュニケーション創成研究センター	まちづくりに新発想をもたらす小地域統計分析の試み
	経済経営研究所	RCE(国連大学 ESD 推進地域拠点)の活性化に資する ESD コア実践の推進
21年	人間発達環境学研究所ヒューマン・コミュニケーション創成研究センター	地方自治の支えとなる小地域統計分析の試み
	経済経営研究所	神戸大学 RCUSS 発 “みんなで考えよう 安全・安心で快適なまちづくり
	都市安全研究センター	震災関係資料合同展示会及び講演会
	附属図書館	社会的起業を通じた地域と大学の協働
	学生ボランティア支援室	兵庫県多可郡多可町における「まちづくり」連携事業
22年	経済学研究所	南あわじ市「論鶴羽古道プロジェクト」への支援
	人間発達環境学研究所	みんなで考えよう 安全・安心で快適なまちづくり
	都市安全研究センター	兵庫県喘息ゼロ作戦
	医学研究所	南あわじ市「国生みの里プロジェクト」への支援
23年	人間発達環境学研究所	兵庫県喘息ゼロ作戦
	医学研究所	神戸市と連携した神戸空港宇宙往還機導入計画
	システム情報学研究所	

## 2. 学生アクションプラン 採択事業（学生対象 公募事業）

	団体名等	支援活動名
20年	児童文化研究会	兵庫県北部における、子ども達を対象とした巡回交流事業
	フットサル部	フットサルを通じた地域活性化プロジェクト
21年	SESCO	社会起業支援サミット in 兵庫
	中越・KOBÉ 足湯隊	「足湯ボランティア」によってつながる自然災害被災地
22年	PEPUP(平和と自立のためのパートナーシップ)	Pair Life in こうべ
	アメリカンフットボール部	発達障がい児の早期療育としてのフラッグフットボール教室
	父親の育児を応援する会	お父さんの育児講習会～子どもの食事づくりと病気の時の対処～
23年	アメリカンフットボール部	発達障がい児の早期療育としてのフラッグフットボール教室
	From KOBÉ	From KOBÉ
	ユース六條	自給自足への道～自分で作った米で被災地支援～

## 3. 灘チャレンジ 採択事業（灘区 公募事業）

	団体名等	支援事業名
17年	文学部地域連携センター（教職員）	篠原地区の昔と今～古文書と古写真～
	総合人間科学研究科（教職員）	知的障害者の生涯にわたる地域生活支援に向けた場づくり（教職員）
18年	文学部地域連携センター（教職員）	水道筋地域のむかし
	灘地域活動センター（学生）	灘区内の復興公営住宅住民と周辺地域住民でのコミュニケーション形成支援事業（教職員）
19年	医学部保健学科（教職員）	健康づくり隊の自主活動支援事業
20年	自然科学系先端融合研究環（教職員）	耐震診断を通じた灘区民の防災・耐震意識啓蒙のための活動
21年	ポーポキ・ピース・プロジェクト（教職員）	「ポーポキと一緒に平和を探そう！ポーポキ・ピース・チャレンジ」
	灘地域活動センター（学生）	災害復興住宅住民と周辺地域住宅と周辺地域住民でのコミュニケーション形成支援事業
22年	保健学研究科地域連携センター（教職員）	発達障害をもつ幼児とその家族を中心とした子育て支援ネットワークづくり事業
	アートマネジメント研究会（学生）	0歳からの親子コンサート
	まちプロジェクト実行委員会（学生）	まちプロジェクト・まちTゆうえんち'10-
	灘地域活動センター（学生）	災害復興住宅住民と周辺地域住宅と周辺地域住民でのコミュニケーション形成支援事業
	文学部研究科地域連携センター（教職員）	「摩耶道のおおる村の歴史」関係資料調査および講演会開催事業
23年	アートマネジメント研究会（学生）	音楽物語「ぞうのババール」～みんなであうたう こども の歌コンサート～
	まちプロジェクト実行委員会（学生）	まちプロジェクト・まちTゆうえんち'11-
	ボランティア団体 かたつむりんぐ（学生）	東日本大震災 長期支援イベント えーる

## 講演 「地域連携と拠点」

兵庫県立大学環境人間学部  
専任講師 内平 隆之

こんにちは。見知った顔が多いので、「久々に帰ってきたな」という感じがあります。僕は昨年10月まで農学研究科地域連携センターで働いていました。一応キャリアとして過ごしてきたメインの仕事として、地域連携を、4年半ほど研究員としてやりました。めでたく「県立大学の新しい地域連携センターが出来るからちょっと来ない？」ということ、応募したらたまたま受かって移ることになったわけです。僕自体、4年半の間に「単純に地域貢献をし続けても僕らの未来は無いな」ということを考えていたので、どちらかと言うと地域連携を研究としてもやるし、実践としてもやっていく、両者を合わせるといふことになりかなりこだわって実践活動を進めて来た背景があります。

ちょうど5年前、今日と同じ地域連携活動発表会の場で奥村先生にいじわるな質問をされました、先生は覚えていらっしゃるでしょうけど。その時の質問というのは、僕が地域連携センターの研究員として入って1年たったかどうかという頃でした。「上の人に期待することは何かありますか？大学に期待することは何かありますか？」というような質問をされたのです。そこで何と答えたのかについてのお話を最後の方でしようと思っています。要はそのような関係の中で、今日の講演題目が広いのですが、基本的には地域連携の中で拠点づくりがなぜ重要なのかということについてお話ししたいと思います。色々調査に回りました中で得てきたことを簡単にまとめさせていただくとともに、議論の土台づくりもさせていただきたいと思っています。よろしくお願ひいたします。

いずれにしても地域連携がやっていくところは、「地域の中で、持続的発展をどのような形で作っていくのか」ということだと思えます。その中でも、課題の本質と言いますか、「何に取り組むべきなのか」、「そこから新しい価値や知識を作ることができるのか」、さらに「新しい方向性を導き、本当に変えることができるのか」、この辺りのところに、きちんと大学が貢献できるかということが問われるのではないかと考えています。

僕のキャリアは、それにかぶるような形になっています。元々僕は2007年3月に神戸大学自然科学研究科の建築のコースを卒業しています。博士課程に6年、長いこといたのですが、「早く出てけ、早く出てけ」と言われながらずっといました。そこでは、いわゆる震災後、色々なまちづくりが展開してきたなかで、実際にまちに入って、学生の時代から計画をつくったり、一緒に活動をつくったり、ものをつくったり、公園をつくったりということをやってきました。その経験や対話能力を見た農学研究科の中塚先生というちょっと悪い人に、「一緒にやらない？」と言われ、農学研究科地域連携センターに引っこ抜かれたという経緯があります。もし詳しい話をお知りになりたい場合は、いくつか論文がありますので、ご覧ください。

まず、長期的に何かやっていく際にどういう枠組みで考えるのがいいのか、という研究をやりました。ある成果について市民と学生と教員がどれくらい意識ギャップを持っているのか、という研究もしましたし、それから教育活動として入っていくときにどういった

社会制度にリンクしていくのがいいのか、という研究もしました。あるいは僕はお金が欲しかったので、自分を雇うお金のためにコープ教育というものも研究しました。その他色々いくつかあって、最終的に、去年書いていたのが、地域連携のサテライトの研究ということでした。まとめの研究をしてきたその中からいくつかを今回は紹介したいと思っています。

結局のところ、「人間をはずして持続的発展はない」、ということです。大学というのは色々な研究のデパートメントです。システムとしてどういう形の環境をつくっていくべきなのか、というのは生態学においても、社会学においても、経済学にもあると思うのですが、実際に地域に落とし込むときに、そういったことと関わっていくようになりたいと思えるかどうか、というような部分に関しては、やはりまだまだキチッと解明された部分がないと思っています。要するに、新しい文化をつくったり、新しい空間をつくったりしながらでないと、実際の地域社会というのは変わっていかない。そういった変革の学問をつくっていききたいなということを、僕自身は博士論文からやってきたわけです。

ここで、地域の地域連携がどういった状態になっているのか、というのを簡単に整理しておきます。教育、研究に続く第3の役割としてまず社会貢献を求められる。地域の中でも、農村地域のように若者がいない地域では、環境的・社会的・経済的課題は、上手く大学と絡みながらでないと解決していけないのではないかと、つまり、都市的地域よりも農村的地域の方が期待が大きいだらうと思われまます。さらに、農村での活況な教育研究活動ということを考えると、研究の方法論自体も、アクションリサーチやフィールドワークメソッドなど、質的に社会を変えていくことに

よって研究として認めるというようなことが出て来てました。そういった意味からも、地域と大学がどういった関係をつくるのが望ましいのかということを考える必要があるようになってきています。

結局、社会貢献とは何なのか。原点に帰ろうということ、寺田寅彦さんの「科学者がなしうるすべては可能性の提示および、暗示である」という言葉を紹介します。どうも最近の研究というのは実証、実証ということになっています。でも本当は、色々な社会に可能性とか、「こうしたらいいんじゃないか」という選択肢を増やしていくことを、大学が試みるべきではないかと強く感じています。だから、社会貢献ではなくて、あくまで地域連携の深化の中で、実際社会はすぐに使えるものを求めますが、新しい可能性を見つけ出すというところに大学の強みを持っていきたいと考えています。その際に、龍谷大学の河村先生がおっしゃっていますが、「出来るだけ連携のテーマは、中長期的で重要度が高いもの」です。短期的で重要度が高いものは、すぐ地域ですることができてしまいます。そういったところに学生や先生方を投入するよりは、「出来るだけ先のものに対して取り組んでいってもらった方がいい」ということです。その際に、可能性の実践といいますが、「こんな可能性があるんだけども本当に大丈夫かな」と確かめる際に、地域の積極的な協力が必要になってくると考えます。

これまでの研究の中で、地域連携の課題と言われていることはいくつかあります。僕のところで大きくまとめているのは、まず「信頼性の課題」。大学と地域がどのような信頼関係を構築すべきか、要するに全く会ったこともないような人たちが突然「研究させてください」とやってくる、というというのは普通あり得ません。でも結構平気で大学の先生方



はそういったことをします。そのような連携ばかりしていくとドンドン疲れてきたり、農村社会などで本当は踏み込んではいけないようなところに行ってトラブルを巻き起こしたり、どのような人に頼んだらいいのか分からなくなったりします。そういったところに信頼性の問題があると思っています。もう一つの課題として、相互作用、双方にメリットがあるようなものなのか、というのがかなり問われると思います。そこに象徴されるのは、連携疲れということです。お互いに関わることによって疲れる。関わるということは誰でも疲れることですが、人間関係が修復不能なくらい疲れてしまうようなことになっているのも課題です。要するに、お互いに最初連携する際に何を求めているのかということについて相互調整が取れていない状態だと、問題が起こるということもあります。3番目が、波及性の課題です。大学の知財というのはやっぱり限られています。限られた知財を有効に投入して社会にちょっとずつ変化を与えるようなことをやっていこうと考えた場合には、どういう仕組みがいいのかということです。

このような現状の地域課題がある中で、拠点づくりによって、課題が解決出来るのではないかと考えられるようになってきました。

地域連携における拠点には、いくつか種類があるようです。大学の機構内か機構外か、都市的地域か農村的地域かによっても話が違ってきます。一般的な地域連携として、個別の研究室がまちの中に入って行って、ある種のゼミを開く、というのはもう70年代くらいからありました。こういう活動があまりにも個別過ぎるので、もう少し横断的なことをしましよと、例えばNPOのようなグループを先生が作っているというケースもあり、また市のシンクタンクとともに外郭団体を

作っていくような流れもあります。そういった中で、国公立大学ですと、運営費の多くが国費や税金から来ている関係上、どの地域でも支えていく必要があるのではないかと、またそれはどのようにやるべきか、ということです。

では、どのような事例があるのかを並べていきます。駐在員に実際に会って、どのようなことをしているのか聞いて来ました。

まず、和歌山大学南紀熊野サテライトです。こちらは、一番早くに地域型のセンターを設置したということ売りになっているセンターです。高等教育がない地域だったからこそ、地域の要請で、こんな立派な施設の中の一部を使って色々な連携活動を行っています。どちらかというと、生涯教育や生涯学習なので、セミナー型です。セミナーを提供し、ここで大学院の経営学修士を取ることもできるという地域連携センターです。そして、こちらは金沢大学能登学舎です。こちらの場合は廃校を利用しています。色々な生物観測の拠点ということで運営されています。ここはかなり駐在員が多いです。駐在員5名、それから指導員をつけながら運営しています。ここにIターン、Uターンした人たちが自分の生き方を探すために、研究をしに来るという拠点になっています。そして、なかなか面白いことを考えているとか、信用できるなど思ったら、仲介して住まいを提供するというようなことも行っています。人材定着という意味では面白い実験をしているところです。

ここで神戸大学の篠山フィールドステーションを挙げますと、元々「ナレッジマネジメント」、知識が創出される中でどういう形で地域の知というものを継承し、コミュニティの再生につなげるのかということからスタートしています。その後、「食農コープ教育」、フィールドに学生が出て行って色々

学ぶ場の拠点として使っていくということをやってきました。

次に、農学エクステンションセンター富良野サテライトです。北の3大学連携、北海道大学と酪農学園大学、帯広畜産大学が一体になっています。北海道の農業振興をもっと頑張っていこうということで、たくさんのサテライトをつくっていこうとしています。ここでは指導員のような人がいて、その人たちが農業の改革など色々行っています。また、食の安全・安心マイスターという形で、大学院教育と社会人教育とをキッチリ連動させる形でのプログラムを構築しています。そうすることで地域の人材も育てるし、大学の人材も育てていく、そのような新しいひとつづくりの拠点というのを目指しているところです。

次いで、島根県立大学・やさか郷づくり事務所です。こちらは村の元の役場で、今は支所です。その1部屋だけを借りる形で島根県立大学と中山間地域研究所が研究拠点を持っています。弥栄という地域は浜田市の中で最も人口が少ない少子高齢化が激しい、もっとも過疎な地域です。脱温暖化や環境共生に優しい社会づくりを、一緒に社会実験をしながら取り組んでいくための拠点として設置されています。

私立大学の例としては、関西大学佐治スタジオがあります。現代GPで採択され、「交流型の定住」という新しい概念で故郷づくりを進めていっています。要するに、学生たちに彼らの心の故郷のような形でむらづくりに参画してもらうということを目指しています。

今までの例は、大体公共施設でした。つまり、空き家を活用する形です。この空き家を改修する技術を周囲の空き家にも援用しながら、色んな人たちが集まれる場所とコミュニティビジネスを開発していく実験を行っています。

こういった拠点が何を地域にもたらしているのかについて、研究的に成果を出していくという流れがあります。半島学とか、新しい学問をつくるんだ、という動きがありますし、実際に地域で活動することによって、本当にそうなるのかというのを試していくことが行われています。これらが大規模資金の獲得と連動しているところも特徴です。ほとんどが大きな補助金を受けています。

人材養成という点に関しては、次のような例があります。例えば、和歌山大学南紀熊野サテライトでは、経営学修士をサテライトで取れるようにしています。知識供給・普及型という意味では役割としては大きいと思います。金沢大学能登学舎では里山マイスターを出しています。これは、生き方探しです。帰ってきたい人たちを全国から募集して、里山マイスターを取るためにこの拠点を活用を促し、自分たちの生き方を見つけて出て行くための取り組みを行っています。そして神戸大学は、どちらかというと学部教育の方です。関西大学もこのラインにあると思います。富良野では、大学院教育と社会人教育と連動した形で一定の質の人材を育てていっています。アカデミズムらしい教育貢献という形の拠点があるからこそ出来ていると言えます。

では、そのような教育を進めていった場合、何か効果があるのか。神戸大学の食農コープ教育の場合だと、現場の課題への応用を意識するようになったり、課題の必要性を提案できたり、現場を見ているからこそという色々な形の効果があります。そして、自分たちが農村地域などの地域に対して「定着してもいいな」という意識が出来てくる、ということは、実験的にもある程度証明されています。シンシナティ大学のコープ教育の場合では、州の方から5年間で2億5千万ドルの補助金を貰いながら地域の人材定着を図るための地

域拠点づくりや、連携教育みたいなものを積極的に進めていっています。そういった意味での、人をどう上手くビルドアップしていくのかという部分でも、拠点地域連携というのは今後ますます役割が大きくなるのではと考えています。

以上、まとめると、地域連携の拠点というのは、実践的教育・研究の場として寄与していくと思います。地域課題の解決への研究貢献であるとか、相互の人材養成を通じた教育貢献、そして外部予算の獲得につながる橋頭堡です。そういった中で、駐在員が非常に重要な役割を持っています。拠点があればいいというわけではなくて、サテライトにいる駐在員という人たちが、地域社会との信用を毎日色々と活動しながら蓄積していっています。結局、そういう人たちがいるからこそ、地域課題解決型研究といった踏み込んだものが出来ますし、人材養成という意味で、より親密な形での情報交換も起こるといえます。駐在員が培った人間関係が、結局実践のコストを随分下げている現象が各ステーションで見られます。さらに、駐在員が非常に頑張っているという話になってくると、「本当に取り組むべき地域課題は何ですか？」という問いに関して、スクリーニングをしてくれている、という役割も忘れてはなりません。というのも、連携要請というのが必ずしも本当に取り組むべき課題なのかどうかというのは、分からないところがあります。こういった要請があるからそれに対して一生懸命応えるというのが、一般的なニーズとシーズのマッチングの連携でした。そのようなことをやり続ければ、疲弊していきます。駐在員が、ある種の実践的な活動をしながら価値ある課題を見つけていくというようなことを行ってくれているからこそ、安定した連携、社会のモデル性の高い連携というのが実現出来ると

思います。詳しいどういう役割をしているのかは、また論文をご覧ください。

以上のことから、拠点を活かした地域連携の展望を述べると、社会実験というのは一つのキーワードになります。今後はもう一歩踏み込んで、実験ではなくて、「社会挑戦」、チャレンジしていくという側面を出していくのが重要ではないかと思っています。そのための基盤的プロセスとしては、新しい教養をつくっていくという意味での知の発信ということも重要ですし、それから地域教育による地域への人材定着の促進ということも、地域連携の枠組みの中で取り組んでいくべきものになってくると思います。こちら側が地域の課題だと思ふものと先方の思ふものとが必ずしも一致しているとは限らないので、一緒に織り込んでいくような課題を設定することも求められるでしょう。

また、駐在員には色々な役割が与えられるのだけれども、「大学のキャリアによっては未来がない」という状態です。キャリアパスというのがキッチリ確立されているかどうかが問われます。そういった意味で、知の普及と人材育成の基盤プロセスというのを、まず地域連携の拠点においてしっかり作り込んでいく必要があると考えています。

さらに、アカデミックな視点では、現場を巡る研究方法を新たに開発することも求められています。一般的に、“何となく”研究している状態になってます。社会実験だったり、アクションリサーチという研究方法自体をどういう形でやっていくのか、ということも重要です。僕はよく地域連携1.0から2.0と言っています。地域連携1.0というのは昔のゼミ室が入って行って、一つの専門性で「この社会はこうなるべきだよ」と言うということです。そういうのは、実は一方向からの答えでしかありません。実際には、本当

に地域の良くなる方向性は、いくつかの専門性を合わせることによって見えてくるものです。そのような意味で、地域連携の拠点というのがなすべき役割は、総合化、つまり2.0化するということです。色々な相互作用の中で色々な専門性を組み合わせて、一つの地域にとっての特殊なモデルをつくっていくという部分にかなり重要な役割がある。要するに、複合専門性、マルチメソッドによって総合的な知を生成し、発信できるようなモデルというのをつくっていくことが求められると考えています。

最後に、変化を生み出す戦略論から組織論へです。これまで、単純に個別の要請に答えってきました。これからは、本当にその地域が挑戦したいときに支える仕組みというのをどこが担うのか、という問題が出てくると思います。変化を支える遊びの部分が社会に無くなっている状況の中で、大学と行政などがどういう新しい枠組みをつくっていくか、ということも問われるだろうと思っています。ニーズとシーズをどれだけマッチングさせても本当にいいものが出来るとは限らない状況の中で、地域課題を掘り下げてキッチリと解決するにはどのような枠組みで取り組んでいけば良いのかを、みんなで作り込んでいくことが重要になってきます。その際には、出来るだけ公の人たちと一緒に取り組んでいくことが重要です。篠山市では、推進委員会や運営会議の中でそれぞれの課題を出し合い、その中で何に取り組むのかを話し合い、予算ともある程度連動性を付けていく実験をしています。そういった大きな組織としての枠を作っていくことが、今後重要になってくると考えています。今後、変化を生み出すために教育の基盤というものを整え、研究の部分も行っていく、最終的には社会が大きく変わっていくような一つの地域連携の実現というの

が求められるのではないかなということで、締めさせていただきます。どうもありがとうございました。

## 地域連携と拠点

兵庫県立大学環境人間学部  
専任講師  
内平 隆之

地域における今日の問題

## 「持続的発展」が 地域の究極の目標!?

1. 課題の本質を見抜く
2. 新しい価値・知識を創造する
3. 新しい方向性に導き変革する

### 自己紹介

2007.3 神戸大学大学院自然科学研究科 博士(工学)取得  
＜住民の手仕事による環境整備の実践方法＞

- 1) 緑と人の関わりに着目した都市環境の再生に関する環境計画的な研究(2007)
- 2) 炭滓煉瓦に関する基礎的研究(2011)
- 3) 炭滓煉瓦を活用した参加型まちづくり手法の検討(2011)

### ＜現在＞

フリーユザー参加型の手仕事WEB百科事典「手仕事パッド」を開発中  
<http://teshigoto-pad.com/>

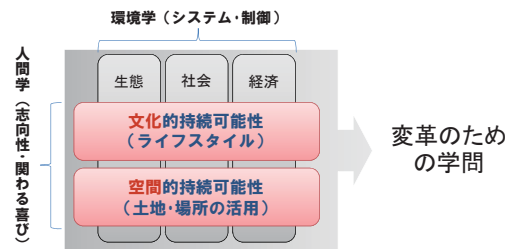
2007.4～2011.9 神戸大学農学部地域連携センター地域連携研究員  
＜地域再生のための場と仕組み＞

- 1) 農学分野における地域連携の枠組みと展望(2008)
- 2) 地域連携活動における意識ギャップと評価手法に関する一考察(2009)
- 3) 我が国における“食農コープ教育”確立の意義と展望(2010)
- 4) 持続可能な地域の実現に向けた環境行動拠点のあり方  
ドイツ・エコステーションの事例分析(2010)
- 5) 地域連携活動における農村地域サテライトの役割と課題(2011)

### ＜現在＞

兵庫県立大学環境人間学部エコヒューマン地域連携センター・専任講師

## 人間をはずして 持続的発展は成立しない



参考 イグナチ・サクセス(1993)『健全な地球のために』  
和辻哲郎(1979)『風土—人間学的考察』

## 地域連携をめぐる背景

- 大学の役割の変化 教育・研究に続く、第3の役割としての社会貢献
- 農村地域の危機的状況 農村地域の環境的・社会的・経済的課題解決に対する大学への期待
- 農村での活況な教育研究活動 フィールドサイエンスの方法論の普及  
特色ある教育の場としての農村をフィールドの活用(GP)

地域と大学の関係をつくるのが望ましいか？

## 科学者がなしうるすべては 可能性の提示および、暗示である (寺田寅彦)

社会貢献ではなく、あくまでも地域連携の深化

1. 実用性を求める企業・地域との意識ギャップ
2. 可能性の探求にこそ大学の強みがある
3. 中期的で重要度が高い課題に取り組むことが有効
4. 可能性の実践には、地域の積極的な協力が不可欠

## 地域連携の3つの課題(既往研究)

①信頼性の課題	②相互作用性の課題	③波及性の課題
<p>大学と地域がどのような信頼関係を構築すべきか</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一過性の連携</li> <li>・農村への理解不足</li> <li>・地域の人間関係に不慣れ</li> </ul>	<p>大学と地域の相互にメリットがある往来プロセスとはどのようなものか</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・相互の連携疲れ</li> <li>・教員評価の限界</li> <li>・研究評価の限界</li> <li>・成果に対する意識差</li> </ul>	<p>大学と地域の連携で生み出された知財をどのように地域に波及させていくか</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・特定の農村に限定</li> <li>・個別専門性の限界</li> <li>・プレイヤーの不在</li> <li>・長期的体制の未整備</li> </ul>

地域連携の拠点づくりにより解決!?

## 地域連携における拠点

地域サテライトの定義 大学大学院の本部から地理的に離れた場所に大学機関により設置された、地域に立地する大学と関連した施設。

	大学機構外	大学機構内
都市地域	<ul style="list-style-type: none"> <li>&lt;まちづくりシンクタンク&gt;</li> <li>&lt;都市農村交流支援NPO&gt;</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>&lt;都市型大学&gt;</li> <li>○地域連携推進室</li> <li>○地域連携センター</li> <li>&lt;まちなかサテライト&gt;※</li> </ul>
農村地域	<ul style="list-style-type: none"> <li>&lt;委員会・まちづくり活動&gt;</li> <li>&lt;地域NPO&gt;</li> <li>&lt;官学連携シンクタンク&gt;</li> <li>・(株)富樫地域総合研究所</li> <li>・島根県中山間地域研究センター</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地方都市型大学</li> <li>○地域連携推進室</li> <li>○地域連携センター</li> <li><b>農村地域サテライト</b></li> <li>○付属農場・演習林</li> </ul>

図 大学研究者の地域での社会貢献の参画の枠組み

## 駐在員がいる地域連携拠点の例

施設規模

大

↓

小

- 和歌山大学南紀熊野サテライト
- 金沢大学能登学舎
- 神戸大学篠山フィールドステーション
- 北の3大学連携・富良野サテライト
- 鳥根県立大学・やさか郷づくり事務所
- 関西大学・佐治スタジオ

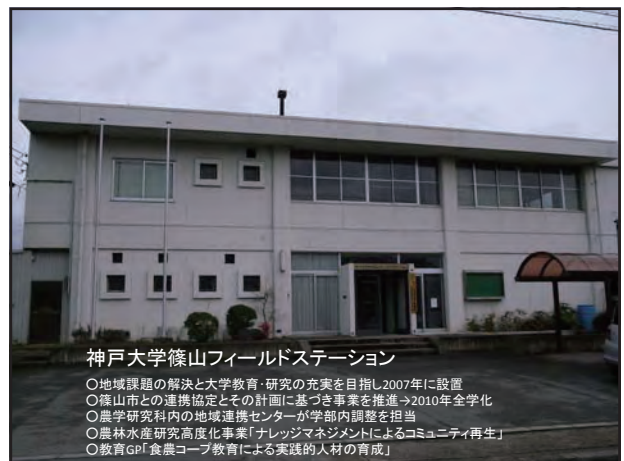
### 和歌山大学南紀熊野サテライト

- 紀南の地域づくりに貢献するために、2005年設立。
- 高等教育機関のない地域からの要請
- 地域シンクタンク「きのくに活性かセンター」と部屋をシェア



### 金沢大学能登学舎

- 生物多様性の調査と里山保全活動の拠点として2006年に設置
- 重層的な推進体制。
- 駐在員を5名、ベテラン指導員3名
- 地域マイスター支援ネット(農業系)
- 里山駐村研究員(民間人材ネットワーク)



### 神戸大学篠山フィールドステーション

- 地域課題の解決と大学教育・研究の充実を目指し2007年に設置
- 篠山市との連携協定とその計画に基づき事業を推進→2010年全学化
- 農学研究科内の地域連携センターが学部内調整を担当
- 農林水産研究高度化事業「ナレッジマネジメントによるコミュニティ再生」
- 教育GPI「食農コブ教育による実践的人材の育成」



**農学エクステンションセンター富良野サテライト**  
 ○戦略的大学連携事業の一環として2009年に設置  
 ○北海道サステイナブル学教育センターと農学研究科の共同で設置  
 ○食の安全・安心マスターの養成:大学院教育と社会人教育を連動



島根県立大学・やさか郷づくり事務所  
 「科学技術振興機構(JST) 社会技術研究開発センター」の  
 2008年に「地域に根ざした脱温暖化・環境共生社会」に採択  
 島根県立中山地域研究センターとの共同研究の拠点



**関西大学佐治スタジオ**  
 ○現代GPの中で「地域活性化への貢献(広域型)」のテーマに採択  
 ○「農山村集落との交流型定住による故郷づくり」を進める  
 ○過疎化し空き家の多く存在する農山村集落において、その空き家リノベーション  
 ○拠点づくりとローカルコミュニティビジネスづくり

### 成果1: 地域課題解決への研究貢献

	研究貢献・社会実験支援
和歌山大学 南紀熊野サテライト	紀伊半島学 生涯学習、交通計画等の計画策定支援
金沢大学能登学舎	環境半島学 生物多様性の調査活動、里山の保全活動の拠点
神戸大学 篠山フィロドステーション	ナレッジマネジメントによるコミュニティ再生 共同研究の実施(丹波赤じやがが開発・生物多様性湿地の創造)
農学エクステンション 富良野サテライト	地産地消の社会実験 直売所の設置、流通チャンネル開拓
島根県立大学 やさか郷づくり事務所	中山間地域に人々が集う 脱温暖化の『郷(さと)』づくり

### 成果2: 人材養成を通じた教育貢献

	学部教育	大学院教育	社会人教育
和歌山大学 南紀熊野サテライト			サテライトで 経営学修士取得可 (185名受講)
金沢大学 能登学舎			里山マスター (84名受講) (26名認定)
神戸大学 篠山フィロドステーション	食農コープ教育 (2010年56名受講)		
富良野サテライト		食の安全安心基礎 学演習(11名)	安全安心マスター (8名受講)

### 現地実習の効果 (神戸大学食農コープの場合)

現場の課題への応用を意識して専門科目を受講している受講生73.3% (非受講者44.4%)	現場の問題を発見し、課題の必要性を提案できる受講生60.0% (非受講者33.3%)
農業・農村の課題解決に貢献する仕事への就職を志望受講生80.0% (非受講者44.4%)	農村地域での就職を選択しに考えている受講生46.7% (非受講者22.2%)

**地域への人材定着**

参考  
シンシナティ大学のコープ教育  
5カ年で2億5千万ドルの州からの補助金

地域連携における拠点とは、

## 実践的教育・研究の場

- 1) 地域課題解決への研究貢献
- 2) 相互の人材養成を通じた教育貢献
- 3) 外部予算の獲得につながる橋頭堡



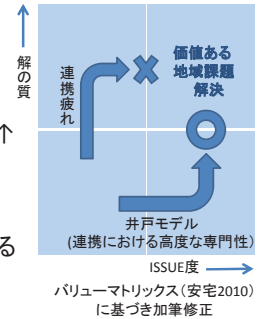
### 駐在員の役割①

拠点での研究者の駐在が信用を高め  
培った人間関係が実践コストを下げる

### 駐在員の役割②

#### 取り組むべきイシューの戦略的選択

- 中長期的で重要度の高い課題に取り組むことが有効とされてきた
- 解の質の向上→連携疲れ↑
- 川モデルから井戸モデル  
※駐在員を中心とするチームの実践が価値ある地域課題を発見する。



## 拠点を活かした地域連携の展望 社会実験から、社会挑戦へ

### 1) 基盤的プロセスの形成

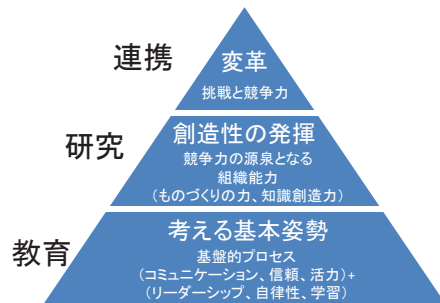
- ・ 新しい教養としての地域
- ・ 地域教育による地域への人材定着の促進
- ・ 計画制御から、漸次構造化
- ・ 縁を結ぶ駐在員のキャリアパスの構築
- ・ 知の普及と人材の育成

### 2) 現場を巡る研究方法の深化

- ・ 社会実験・アクションリサーチ
- ・ 地域連携1.0から2.0へ
- ・ マルチメソッドによる総合知の生成
- ・ THINK GROBAL ACT LOCAL KOBEモデル

### 3) 変化を生み出す戦略論から組織論へ

- ・ 地域の挑戦を支える新しい公共の枠組み
- ・ ニーズとシーズのマッチングの限界
- ・ 地域課題を掘り下げて解決する組織的枠組  
「人は現実のすべてが見えるわけではなく、  
多くの人は見たいと思う現実しか見ない」
- ・ 課題の練り上げし、政策(予算)との連携する



変化を生み出すインフラストラクチャーとしての  
地域連携の実現を目指しましょう

ご静聴ありがとうございました



## 意見交換会 ～連携の拠点をもつ意義～

### <司会>

奥村 弘 神戸大学地域連携推進室長

### <パネリスト>

内平 隆之 兵庫県立大学環境人間学部専任講師

坂江 渉 神戸大学大学院人文学研究科特命准教授

石岡 由紀 神戸大学大学院保健学研究科博士後期課程

布施 未恵子 神戸大学篠山フィールドステーション地域連携研究員

山田 辰男 篠山市政策部企画課篠山に住もう帰ろう室主査



### 奥村弘・神戸大学地域連携推進室長

奥村 私の方で司会をさせていただき、進めたいと思います。まず、内平講師のご講演に関して質問やもう少し深く聞いてみたいことがありますら、最初に出していただいて、続いてみなさんと議論していきたいと思います。何かご質問はございますか。

### 伊藤一幸・神戸大学大学院農学研究科教授

伊藤 地域連携という言葉と産官学連携という言葉があります。地域貢献、地域連携というのは、何かボランティアをやれば良いというような形ではなく、さっきおっしゃっていたように「知の集積」という非常に重要な側面を持っています。ところが、なかなか論文にならないという問題もある。「知を集積している」のに論文にならないというのはどこに問題があるのか、ここが非常に重要なポイントだと考えます。お金になるのは先ほどの実証の方ですよ。実証の方は「民」からお金を集めて何とかなるところがあつて、その部分と「学」なのに論文にならないというところをもう少し深くお話いただけたらと思います。

### 内平隆之・兵庫県立大学環境人間学部専任講師

内平 地域連携でお金の問題というのはすごくあります。要は、営利目的の企業と、生活ベースでやっているような非営利的な市民社会とは、連携事業に対する利害関係者が大きく違います。企業であれば誰が儲けるのかという構造ははっきりしていますが、地域社会の場合は本質的に誰が儲けるのか分からない状態です。かつお金が払えるとは思えないような部分が出てきます。そうすると、地域連携が受け持っているのは、どちらかというところ「官学連携」になるのではないかと僕は整理

しています。もちろんNPOとか非営利、公益的な団体であるというようなことが分かるような状態であった場合でも、産学連携のような話であっても、地域連携的な方で受け取るべきだと思っていますけれども。もし、営利活動の団体であれば、「営利の産学連携の方に行ってください」と今まで僕は言ってきました。でも、地域連携はお金をもらってはいけないのか、とかと言われるとやはりそういうことでありません。開発費は、税金の公平性を考えたときには、持っていない人たちにもキチッと配分される必要があります。そうすると、公益的な部分に関しては、何らかの公的な部分からお金をもらってきて実施せざるを得ない、つまり、官学連携や財団などとの連携という形にならざるを得ないかと思っています。

また、いわゆる知の集積であるべき地域連携が論文になるのか、ならないのかというところですが、中塚先生のようにノウハウを持っている人は別として、僕は



内平隆之 専任講師

タイムスパンがいくつかあるという仮説を立てています。例えば、文学研究科の活動は、半世紀後に「こういうことをしておけばよかった」と思うような話です。そのような話は、何本も論文が出て来ては困るのです。農業などであれば、1年実験してみて、一つの作付けだったら1年、社会実験だったら3年位はかかる。3年の社会実験を通した中でどれくらい知の集積が起こり、その中で何本の論文が書けるのか、という形になってくる。要は時間性が違うので、最終的には長い目で見たら、論文になっている可能性は高いのではないかと思うのです。僕自身6年間の大学

の博士課程在学中で1本しか査読付きの論文がなかったのですが、社会実験を利用して、論文を量産出来るようにはなってきています。社会と関わる知の集積のあり方というようなことの論文をたくさん書こうと思うと、それ位の時間的スパンは要るのかなと、僕らの分野に関しては思います。ただ、それが理学研究科や農学研究科の先生方が地域連携の知の集積のような形で容易に論文が出せるかどうかは、また別の問題だとは思っています。出来るだけそういうことを認めていくような風潮が出来たら嬉しいと考えています。以上です。

**奥村** はい、今のはかなり重要な問題です。これについては、また発表会という形で室としても考えていかないといけないと思います。つまり、どういう形で大学の中で評価されるのか、というのが無いと、それこそ連携疲れで次の世代はついて来ないような状態になってしまいます。ですので、今後も考えていきたいと思っています。もう一つ位、ご質問がありませんか。

**勝間恒平・神戸市灘区まちづくり推進部まちづくり課事業推進担当係長**

**勝間** 灘区役所まちづくり課の勝間です。よろしくお願ひいたします。先ほどのお話の中で、これからの新しい地域連携というところで、新しく公共と大学が何か新しいことを考えていったらいいんじゃないか、というようなお話があったのですが、それについてもう少し具体的なお考えがあればお聞かせ願ひたいと思います。

**内平** 先日、島根県立大学にお話を聞きに行きました。フォーラムなどの中で、普段は行政内でも顔合わせしないようなセクターの人

たちを集めて、あるテーマについて一緒に議論する状態を作っているそうです。要は、定常的に協議会で協議される地域連携の活動に関しても、こういう活動をやっていくべきではないかというような、いわゆる研究会や意思決定をするプラットフォームを、今までのようにまちづくり課さんが直接来て受けるのではなく、企画とかも入った形で、一緒に考えていく。それで予算化する方向があるのか、ないのかというのを検討していくというやり方が一つかなと思っています。

それから、もう一つは、人自体を回してしまうという話です。島根県立大学での話ですが、県の職員さんが地域連携センターに来るとか、県の職員さんがまちづくりの講習でゼミに入ってきて勉強する。そういうダイナミックに人が回りながら具体的に何を解決していった、どういうことをやっていくのか、という大きな仕組みも今後出来ていくというのも重要なかなと思っています。それが仕組みの話です。

3つ目は、基金です。まちづくり基金みたいな形で基金を両者で設定して、大学でもない、地域でもない、間のところの基金を設定して、それをどういう形で使っていくのかということについて一緒に研究や調査を行い、実践を進めるという形もやり方の一つとしてあるかと考えています。

**奥村** はい、ありがとうございます。それでは、連携の拠点を持つ意義ということで、議論を始めたいと思います。この間、篠山フィールドステーションの話題も少し挙がってきています。もう一度、その篠山フィールドステーションの展開と出来ている意義、課題を考えながら、拠点の意味を考えていきたいと思っています。最初に布施さんから、フィールドステーションについてご紹介いただきました

と思います。同時に簡単な自己紹介もそれぞれのところでもよろしくお願いいたします。

### 布施未恵子・神戸大学篠山フィールドステーション地域連携研究員

布施 篠山フィールドステーション駐在研究員の布施未恵子です。篠山フィールドステーションに赴任してからちょうど2年が経ち間もなく3年目に入るところです。今回、篠山に神戸大学の拠点があるということで、篠山を拠点とした地域連携活動を紹介する時間をいただきましたので、意見交換を進める前に少しお時間をいただけたらと思います。

まず、「何故、篠山市か？」というところからです。元々、篠山市には神戸大学農学部の前身である兵庫農科大学がありました。失われつつあった歴史的な関係とか、人のネットワークという大切な資源を改めて紡ぎ直して、相互の発展につながる新たな関係を築くことを目的に地域連携協定を結び、活動を実施してきたという背景があります。近年の篠山市と神戸大学との歩みですが、2006年にまず、農学研究科と篠山市で包括協定を結びました。そのときは農学部篠山フィールドステーションという名前でした。2010年になり、神戸大学全学を対象とした協定になり、神戸大学の全学の窓口となる篠山フィールドステーションという名前に変わり、農学研究科以外の研究科の活動の拠点にもなるような施設となりました。

篠山フィールドステーションは、3つのミッションを掲げています。まず過去と現在をつなぐ架け橋となること、現場起点の課題解決を通じた教育研究を進めていくこと、そして、日本の、篠山市にとどまらず世界レベルの地域の知の拠点として活動を進めていくという3つです。連携の組織図をみながら推進体制を簡単に説明します。全学協定になり

ましたので、今日も来てくださっていますが、篠山市企画課と神戸大学の地域連携推進室が総合的な調整をします。その補佐的な役割として、篠山フィールドステーションがあります。それ以外に、テーマ毎に各部署と各地域連携センターが連携をし、それぞれ部会という形で研究や連携事業を進めています。市民の方、県民局、丹波の森協会、企業の方やNPOとも連携しながら、篠山市と神戸大学とで連携事業を進めています。冒頭で奥村先生から地域連携における財政基盤のご指摘がありましたが、現在は篠山市の方から予算を計上していただき、篠山市と神戸大学の連携事業を進めています。

地域連携事業は主に3つの柱で進めています。1つ目は、地域共同研究です。行政や市民のニーズと神戸大学のシーズに基づいて、篠山市全体を“生きた”現場として、共同での調査研究を進めています。内平さんの方から論文、業績のお話がありましたが、先生方に地域に入っていただく上で、先生方の業績にもなるようなテーマ選びを大切にしています。そして、駐在研究員も同様に業績となる論文が書けるような体制を作ることを大事にします。2つ目が、地域交流／学習活動です。地域共同研究はテーマが小さかったり、の先生が個別に地域が結びついてやっていく場合が多いのですが、地域のみなさんからはもっと大学生や先生と交流したいというニーズがありますので、地域交流活動も合わせて行っています。3つ目は、地域のニーズを拾い上げるための窓口として、相談・情報発信を行っています。1つ目の地域共同研究ですが、2010年に全学の窓口になったことをきっかけに、保健学研究科では発達障害児の早期支援プログラムの開発、人文学研究科では、日置地区の古文書調査を進めており、これまでに25件の共同研究が行われてきました。

篠山市では「農都創造」というまちづくり計画がありますので、それに合わせて知の創造を支える研究を今年は7つ行っています。

駐在研究員の論文業績について先ほど話をしましたが、篠山フィールドステーションの研究員の研究例を紹介します。今年1月半ばまでいた研究員は元々アフリカの焼畑の研究していました。篠山の地域で、自分の研究と篠山の文化にあった共同研究を発掘する形で論文文化できそうな



布施未恵子  
地域連携研究員

もので且つ地域にとっても価値のあるものというテーマを選びました。それが「はんや(灰屋)」という篠山の伝統的な建物で有機的な堆肥をつくるという農業技術です。これは大学の実習と絡めて、学生らと共に進めてきました。また、私は、元々、ニホンザルの研究をしていました。地域連携の業績になり、且つ自身の専門分野でもあるニホンザルの獣害対策をテーマに選び、篠山市のニーズに合った研究を進めています。

次に、地域交流／学習活動を簡単に紹介させていただきます。内平さんが紹介された食農コープ教育プログラムの推進、ボランティア活動、オープンセミナー、講師・アドバイザー等派遣などがあります。食農コープ教育プログラムは、ステップアップする形で1年生から4年生になるまで、篠山をフィールドにして行う実習です。今、篠山市で行っている実習は3つあります。平成19年に試験的に開講し、その後毎年地域を変えて篠山市の色々な場所で実施している「実践農学入門」です。1年生を中心に農村を学ぶ基礎的な授業を行っています。3年生を対象とする「実践農学」は、1年生の時に実践農学で経験する農業を広く浅く知るところからス

テップアップし、地元の方に提案をするというものです。最初は30名ほどでしたが、少しずつ履修者が増え、今では68名+αの学生が篠山の現地実習を履修しています。全学対象の授業となり、昨年度から少しずつ他学部の履修も増えました。今年は発達科学部、経済学部、理学部の学生が農学部の主催する現地実習を履修しています。

地域交流活動の中で、先ほど文学研究科による古文書調査を紹介しましたが、それをきっかけに、篠山の古文書を使った学生合宿が今年初めて篠山市で行われました。また、最近の丹波新聞の記事ですが、農学研究科と食資源研究センターで開発した赤じゃがを商品化するという取り組みが、経済学研究科と共同して始まっています。また、今度は六甲に篠山の若手農家の方が交流しに来るという交流もありました。これまでのセミナーでは、農学部の先生方にテーマを選んでいただき話をしていただいていたのですが、これも全学の窓口になったので、今年初めて古文書合宿に合わせて文学研究科の先生に江戸時代の話をしていただきました。その他、学生の活動がドンドン活発になっています。そういったことをテーマにもセミナーを行っています。内平さんが県立大学に異動されたこともあって、篠山市の近くの丹波市で同じような連携活動を進める他の大学とも連携し、面白い連携活動を進めていこうとしています。

最後に、市民の方の情報を集める相談・情報発信を紹介します。具体的にはオフィスアワーという時間を設け市民からの相談を随時受け付けています。また、今年からは篠山市の市民プラザでの出張窓口もおこなっています。また、情報発信として篠山市の方々に神戸大学の活動を知ってもらおうと、篠山市の広報に毎月記事を掲載せさせてもらっています。また、これは明日ですが、地域の方々

に1年間の連携活動の発表をする地域連携フォーラムを実施する予定となっています。簡単にご紹介しましたが、今はまさに篠山市において篠山フィールドステーションを窓口とした全学的な地域連携活動が広がっている段階ではないかと思います。今までは農学研究科単体で、先生が個人的に篠山に入られて研究することはありましたが、今では研究科が横断して横断型のフィールドになっていると思います。今日、いらっしゃる先生や他の先生方にも、篠山をフィールドに、研究や卒論のテーマを見つけていただけたらと思います。そのときは、窓口はいくらでもしますので、お声をかけてください。

先ほど丹波地域を対象に活動する大学との連携を紹介しました。これから始まることですが、日本、海外の先進事例となるような学習ネットワークを構築したいと、オープンセミナーを母体に Tanba Rural Network の設立を考えているところです。また、先ほど、寺下くんが学生アクションプランの事業（ユース六篠）」について報告してくれました。篠山を中心にボランティア活動をしていこうという学生がたくさんいますので、その活動がもっと広がるような支援をしていこうと考えています。学生は篠山にいないで他の場所に行くかもしれません。でもそのときには篠山で学んだことや篠山の経験が活かされると思うので、篠山印の付いた学生が色々なところに飛んで、新しい効果が生まれればいいな思っています。

そういった展望もある一方で、内平さんからも色々指摘がありましたが、課題もあります。まず、先生や私が共同研究を進める上では、それを支える地域の方の人材が必要不可欠です。共同研究という学問的なことに興味をもつ地域の方を育て、一緒に共同研究を進めていくことが必要だと思います。また、

篠山フィールドステーションで地域連携活動を支えてきた研究員が異動してしまうことがあります。ネットワークが切れてしまうことや、今までの経験が無くなってしまうことで、少しずつ地域連携活動が進んでいたものがまたゼロに戻ってしまうという問題もあります。毎年、「来年はどうか」と言いながら駐在研究員をやらせていただけていますが、少なくとも2、3年、5年、何十年とは言いませんが、複数年雇用していただければ、研究も進めやすかったり、地域の方の信頼をまず得ることが出来ます。来年ここにいるのか分からないのに、来年の話は出来ません。出来るだけそういう形で駐在員のことを考えていただき、拠点を展開していただけたらと思います。また、ドンドン学生が入って来ることは嬉しいことですが、そのときには必ず移動手段が問題になります。出来るだけ駐在員が手伝ったり、地元の方の理解でお手伝いもいただいたりしています。しかし、丹波の関西大学の方では毎月1回、丹波へ行こうというバスがあり、毎月たくさんの学生を送り出しています。篠山へ行こうバスではないですが、先生や学生が、定期的に入って、地域が賑わっていくようなことが進んでいければと思います。簡単ですが紹介を終わります。ありがとうございました。

**奥村** ありがとうございました。先ほど写真の中で、前の駐在員さんの近藤さんが写っていました。先日開催された農学研究科での報告会の際に、最初の頃はなかなか市民の人が来てくれなかったけれども、今は逆に相談日や時間を決めないといけないという状況で、ここまでやってこられたのだということが報告されました。かなり長期にわたって努力され、ここまで来ているということがよく分かるお話でした。

次に、保健学研究科の石岡さんから、保健学研究科地域連携センターの取り組みについてご紹介していただければと思います。

#### 石岡由紀・神戸大学大学院保健学研究科博士後期課程

石岡 保健学研究科地域連携センターの石岡です。よろしくお願いいたします。私どものセンターでは、篠山市の保健師さんと幼稚園の先生、保育士さん、保護者を巻き込んだ形で、発達障害の子どもさんに対する支援のシステム作りをしていこうとしています。昨年度から、まずは私どもで作りましたチェックリストなどを基に、篠山バージョンを作るべく、保健師さん、幼稚園の先生、保育士さんにご協力をいただき、より答えやすい形、保護者に負担をかけない形のチェックリストにするところから始めました。今年度はさらに実態調査をさせていただきました。篠山市の全面的なご協力をいただき、4歳児、5歳児の全件調査が可能となりました。この全件調査というのは難しい調査ですが、ご協力によって、担任をされている先生と保護者、両者からその子どもさんを見る調査が可能になりました。それを踏まえて、現在、先生方が気になっているお子さんなどの様子を実際に私どもが見せていただいて、そのお子さんの発達の様子を、これから保育者の方々、保護者の方々と一緒に考えていこうとしています。また3月には保育士さん、幼稚園の先生、保護者の方を対象とした講演会、勉強会も進めていく予定です。今後継続的な事業として、篠山発の発達障害児に対する支援のシステムづくりを作ろうとしているところです。



石岡由紀  
博士後期課程

篠山の方に私どもが行かせていただくときには、フィールドステーションを使わせていただいています。フィールドステーションでは、研修会や打合せ会などを定期的にやらせていただいています。

奥村 ありがとうございます。では、引き続き人文学研究科の坂江准教授から紹介させていただきます。

#### 坂江渉・神戸大学大学院人文学研究科特命准教授

坂江 人文学研究科の地域連携センターの坂江です。配布資料にありますように、人文学地域連携センターは歴史文化、特に古文書を中心とした地域歴史遺産をまちづくりに活用するということを目指してかなり幅広い活動をしています。今年10年目でございます。連携する先は、今年はずいぶん淡路島も含めて連携するようになっています。

財源にも触れておきますと、主たる財源は大学からの支援金です。二つ目には文科省等、国からのいわゆる競争的資金。それから連携先の自治体から個別の事業に対して経費をいただいています。寄付金というの若干含まれています。現在、スタッフは10名位。うち非常勤の研究員が6名。色々な兼ね合いを持ちながら連携をしています。

メインの活動は、歴史文化を地域づくりに活かそうということを大学が支援するという活動です。これを県内の自治体と個別に色々な事業を行っています。一番数が多いのが、神戸市内。今日も灘区の方が来られています。灘区との協定に基づいて今年も灘区チャレンジに、それこそチャレンジしています。協定を結んでいる小野市との間でコンサートの活動とか色々なことを今年度も行いました。朝来市との継続の事業や丹波市との事業

もあります。その他にも20から30位展開しているところですよ。

自治体との連携をしている中で、5年位前から個別事業も大事だが、将来歴史文化を継承するための担い手の育成が重要だと気が付きました。研究を重ね、学内で地域歴史遺産の活用をはかる人材育成講座を始めました。具体的には地域歴史遺産活用研究という授業で、色々な学部から50人位の学生が参加し、座学で開講しています。それ以外に、研修、セミナーを行っています。地域歴史遺産保全活用演習、これは外に出て、フィールドワークも含め、古文書の実践的な研究をするための基礎的能力と培うというセミナーです。さらに、地域歴史遺産活用企画演習も学外に出て行っています。

今日のお話の篠山フィールドステーションとの関わりは、先ほど布施さんもおっしゃったのですが、去年9月が初めてです。地域歴史遺産保全活用演習の合宿で学生が25名、教員も一緒に2泊3日現地でお世話になりました。

なぜ篠山になったのか。  
篠山市の日置地区の旧庄屋さんのお宅で、古文書が発見されました。それこそ東日本大震災の日に現場に行きました。約5千点ほどの古文書でした。これを何とか大学の方で活用、或いは研究してほしいというお話があり、「それじゃ、やりましょう」ということになりました。スタッフが研究分析をやり、同時に、その研究の成果に基づきながら、これを学生にも扱ってもらおうというセミナーを篠山フィールドステーションでやろうということになりました。9月5日から7日に2泊3日で伺いました。

同時に、先ほどおっしゃった市民向けの



坂江 渉 特命准教授

企画もしてほしいと言われ、これは若干躊躇もしたのですが、発見された古文書の研究成果を市民に紹介するということになりました。農学研究科にゆかりのある農作物のお茶に関する資料があることが分かったので、センターの教員の一人が「江戸時代の丹波茶」、江戸時代のお茶の流通とか、ネットワークの問題も含めて「日置地区中西家文書の世界」と題するセミナーを行いました。これは大体20人位の方が来られました。夕方から8時位まで2時間位、学生も討論に参加しました。3日目には、学生たちが読み上げた色々な古文書の成果を各班ごとに発表し、同時に、全体的意義をどのように考えたかというのを学生が討論しました。そのとき、布施さんが、我々の古文書の世界にも関わらず司会もされて、「すごい人だな」と感動しました。今まで、こういう古文書活用講座をやっていたのですが、初めて神戸市内から出たということです。篠山の現地の古文書を使ったと点が非常に新鮮さを呼んだようです。

さらには市民セミナーを開催したという点が、地域というものを感じたという感想を寄せていました。市民セミナーの先生と市民とのやりとり、質疑応答があり、そのとき、地域というフィールドを身近に感じながら、市民との交流を深めながら古文書を扱うということで地域歴史遺産という意味を深く考えることが出来た、というような感想が出ています。私自身も非常に新鮮でした。現場のものを現地で読み解き、市民にもその一部を発表するというやり方は、今まで無かった新しいやり方だと新鮮に思いました。これからもし出来れば積極的に続けていきたいと思っています。取りあえずこの位にします。

奥村 ありがとうございます。それではこれを受け入れていただいています篠山市の山



田さんから、一言あればお願いいたします。

### 山田辰男・篠山市政策部企画課篠山に住もう帰ろう室主査

山田 篠山市政策部企画課篠山に住もう帰ろう室の山田です。本日、篠山市から、政策部長上田、篠山に住もう帰ろう室室長竹見と私の3人が来させていただいています。篠山に住もう帰ろう室の職務が定住促進が職務であり、官学連携と関係は無いのですが、説明させていただきます。先ほどの布施さんの補足ではないのですが、簡単にフィールドステーションの紹介をさせていただきます。平成18年に締結された篠山市と神戸大学の連携協力協定に基づいて、フィールドステーションが開設されました。教員や学生のみなさんの情報収集、研究活動を行う拠点として大学と市および地域をつなぐ活動をこれまで展開していただいています。

これまでの主な取り組みとして、篠山市まちづくり協議会があります。地域課題の解決に向けて取り組む小学校区内の組織ですが、この設立や運営支援に携わっていただいた経緯があります。多分これには中塚先生がよく関わっていただいたのではないかと考えています。この他農業分野を中心とした調査・研究を共同で行っていただきました。それが先ほど布施さんが紹介された、地域共同研究につながっています。

平成22年には地域連携協定が締結され、これまでの地域づくりや農業研究のほか、発達障害児対策などの分野でも共同研究が行われるようになりました。また、フィールドステーションに駐在をしていただいている布施さんをはじめ、研究員の方には市内での調査や実習、インターンシップを行っている学生や教員のみなさんへの支援を行っていただいています。その他、篠山市や農業体験実習の

受入先である地域のみなさんとの連絡窓口、様々な情報発信の窓口としての役割も担っていただいています。概要としては以上です。

奥村 フィールドステーションの状況が大体お分かりいただけたと思います。ここからは、いくつか論点を考えながら進めていきたいと思えます。一つは、篠山でこれが出来たことの意味です。色々な要素が合わさって、先ほどの内平さんの話でいえば「総合的な知」という方向へ全体が向かう形で篠山は動いているかと思えます。その意味や、何故それが可能だったのかについて、具体的な話がいくつかあるのではないかと思いますので、そういったことを一つのポイントとして、議論が出来ればと思えます。もう一つは、先ほど内平さんから出ましたが、一種の教育研究の中での位置づけとして、拠点をどう考えていくのかというポイントです。その点も含めて、出席されている方からもご意見を伺ってみたいと思えます。そして最後に今後の課題の問題になりますが、まずはその二つの点について、フロアの方からご意見がございましたら少し出していただいて、パネラーの方にも答えていただくという形にしたいと思えます。これまでたくさん名前が出た方にやはりお聞きしたいですね。篠山のことは中塚さんと上田さんということで、お二人にご発言していただけたらと思えます。

### 中塚雅也・神戸大学大学院農学研究科准教授

中塚 篠山で何故上手くいったのか。当然、要因は一つではありません。先ほど発表もあったのですが、まず一番大きいのは地域の人的なつながりがまだ残っていたということだと思います。農科大学のときの思い出等がある人が、地元と直接関係の無い方でも、一般の市民の方でも、そういう愛着を持って接

していただいているのが一つまず大きな要因だと思います。その中で、われわれが市の方と色々な話をさせていただきながら進んできたのですが、それもわれわれだけでは何も出来なかったと思っています。既存の地域、既存のネットワーク、それが一番大きかったのではないかと思います。

**奥村** 上田さん、他の方のお話も含めまして何かご発言をお願いしたいのですが。

### 上田英樹・篠山市政策部部長

**上田** お世話になっています。篠山市政策部の上田です。今日は神戸市さんの他、たくさんの行政の方がご参加くださっているのに、篠山の話ばかりで、本当に御礼を申し上げます。私は二つに絞って、お話をさせていただきます。今、篠山での活動、人文学、保健学、農学の話を中心に、お話をいただきました。私たち、行政の役割は、内平先生のお話にもありましたが、「お金をどのように段取りするんや」ということ。官学連携、地域連携がありますが、「如何に地域と大学を結びつけるんや」と、そこまでが行政の仕事だと思っています。行政が入って、行政のために大学に「こんな研究してくださいよ」と色々言うのではなくて、大学が思っておられること、地域が思っておられることを含めた中で、そこまでは行政が出て行って、あとはお任せしたらいいのではないかと。それは無責任なことではなく、そのように思っています。

農学研究科から始まって今は人文学、保健学研究科とも連携をさせていただいていますが、単なる研究科ごとの研究ではなく、お互いに産官学連携していったら様々なことが出来ると思っています。先ほど日置地区の庄屋で発見された中西家古文書について発表いただきました。中西家というのは、日置のま

ちづくりをどうするのかということを考えて、芦屋プリンのレストランに改装したところで、今は「ささらい」というレストランになっています。蔵をショップに活用し、偶然に蔵の中に眠っていた古文書が出てきたのです。本当に一つ一つのことではなく、全て連携した中で、地域活動とか地域連携が深まっていったなと私は今日この発表を見て思いました。もう一つは、人ということです。先ほど内平先生は駐在員とおっしゃって、またこのレジュメでは布施さんは研究員という肩書、布施さんの発表では調査研究員ということで紹介されました。先ほど河井先生は、イベントをやったときに通りかかったことが一番参加するきっかけとなったと言われました。でも、篠山では人が少ないので、どこで何かやっても通りかかる方は少ないのです。少ないところで何でカバーするかといたら、布施さんのように調査研究員ということで駐在してもらう。駐在しながら、拠点施設の中の駐在は少しにして、あとは地域を飛び回っていただく。そのような活発な活動をされる熱心な調査研究駐在員が一番やはり大きな原動力になっていただいているという思いを持っています。以上です。

**奥村** ありがとうございます。今、行政側が大学と地域を「つなぐ」という問題と、それを継続して「つなぎ続けていく」という話。もう一つは、つなぎの拠点というのか、内平さんが言うように人の問題。まさに、駐在してくれている人の役割ということが出て来たかと思っています。この点で、新たにフィールドステーションに参加していただいた人文学研究科や保健学研究科の方々に何か気づかれたことがありましたら、ご発言ください。

**石岡** 私どもは篠山に行かせていただく機会

が増えたのは増えたのですが、フィールドステーションは打合せで使わせていただだけで、上手く活用しきれていないというのが実感です。ただ、フィールドステーションがあるという安心感は本当にあります。子どもがなかなか出来かねるところ、距離がある分出来かねるところをご協力をお願いすればやっていただけるとの安心感は本当に感じつつ、今、続けてやらせていただいています。

**奥村** ありがとうございます。全く新しい自治体と協定をして何か展開をしていこうとするとき、相手方も地域の人も見えないのは、どうしたらいいのかが分かりにくい。そこに最初から拠点があり、人がいるというのはすごく安心感があるというのはわれわれも理解できる場所です。坂江さん、如何でしょうか。

**坂江** 内平さんが言われたように、結果的に駐在員が信用を高め、培った人間関係が実践コストを下げる、その考え方は重要だと思います。駐在員、布施さんも近藤さんも、一方で、かなり専門的知識を持っておられます。色々な自分の専門に基づいて研究をされていると同時に、幅広い知識を持っておられる。僕は、サルや動物の神話に興味があるのですが、彼女と結構話が合います。ゼネラルな幅広さを持っている、と同時に、専門的知識を持って駐在されている点が大きいような気がしました。それは、結果的に、長い目で見ると、経費、篠山市での活動のコスト削減につながっているのではないかと。人文学研究科では、拠点的な施設がないわけではない。ただ、駐在員がいるという拠点は一つもありません。各自治体の博物館的組織とか、史料館とかそのようなものはあるのですが、われわれからの駐在員というのはいない。そこが先ほどの話

の逆の面もあり、なかなかスムーズに活動が進まないという面があると思います。われわれで言いますところの古文書というものを置く施設と、それを活用するという意味で、古文書を読み込んで、研究する能力がある人が要ります。それがなかなか置けません。播磨地域に一つとか、作りたいと思っはいるのですが、「お金がかかるからやっぱり出来ませんよ」と行政の方はおっしゃいます。篠山の活動を見ていて、長い目で見てほしいと思うし、お金の面でも安くつくと思います。わずか半年前の出会いですが、そのようなことをひしひしと感じました。

**内平** コストともう一つ、圧倒的に時間も圧縮されます。何かをしてもらいたいときに、例えば、駐在員の布施さんなどに言えば、何とでも次の人を紹介してくれる。その人を探すのにどのくらいかかるのかを考えると、つながりの早さというのが、すごい時間とコストの圧縮につながっています。実は中長期だけではなくて、短期的にも効果が上がっていて、重要だと思います。

**坂江** 篠山の古文書セミナーをやることが決まったら、即座に篠山の広報に9月30日に半分ページを使って大々的に宣伝されました。こちらは頼みもしなかったのですが、たくさんの方の市民が興味を持ってこられました。これはとてもイニシアチブを発揮される場所だな、褒めすぎかとも思いますが、率直に感じた点です。

**奥村** それでは、拠点的なところで人の問題と、つないでいくということの重要性の話がいくつか出て来ています。布施さんから、バスの話が出て来ました。室として何回か大学に、「もう一度バスをつくってください」

とお願いしていますが、これがなかなか難しいということになっています。教育や研究をつなげていくということも含めて、ご意見はありませんか。今日の議論は難しいということでしたら、関連したものでも結構ですし、必ずしも篠山でなくてもいいかと思います。

**中塚** 関連してですが、篠山でスタッフの人をお願いしてやっとうまくいきそうなことがあります。篠山の自動車教習学校のバスが、この辺りと言うと六甲アイランドから循環しているような形で、市内を循環しています。そこで、学生が来るときにはそのバスと一緒に乗せてもらえないでしょうか、という話をお願いしに行ってもらいました。それが来年からうまくいくようになりました。コミュニティバスとか、色々地域の中で動いていると思うので、そういう交通網を上手く使っていくというのもあるかと思っています。それにしても、JRで篠山口まで行くことが学生にとってはしんどいことになっています。その辺りは今後の課題かと思っています。

**布施** 今の話とも関係しますが、学生アクションプランの寺下くんの話では、1年目のフィールド演習は、役に立たなかったとまでは言ってませんが、1年間で学ぶことに限界がある。教育研究は、長い視点でなくてはならないと思うので、1年目でやって、2年目、3年目と学生が行き続けられるようなバスや交通網の整備、そしてモチベーションを続けるための駐在員の役割が重要になってきます。実は、学生がお金を払って篠山口まで行くという話、先ほど中塚先生がされていましたが、おじいさんが辛そうなのを早く助けてあげたいということで、1200円払うのが惜しくないという学生が最終的に残っている。それが嫌な学生では無理して来てもらっ

ても負担になる。それは地域の方も同じで、わざわざ来てもらっても、というところもあるんで、そういった形で学生のモチベーションを上げること。さらに、総合的に上げるような拠点、人もそうですけど、ハコとしてもそうですし、地域という大きな母体で行政も含めて支援していただくことが質を高めると思います。

**内平** 篠山が上手くいったというもう一つの要因は、たくさん学生が動いてくれたことでもあります。結局、彼らが篠山市の人たちと付き合うわけなので、その学生たちを上手く慣らしていける仕組みができたことが、もう一つの要因ではあるかと考えています。

**奥村** 大学の方からの話が続きまして。逆に篠山市の市民のみなさんからはどうだったのでしょうか。山田さん、竹見さん如何でしょうか。

**山田** 市役所の立場、市民の立場からということで、私が市民の方から聞いた声も含めてお話しします。先ほど、ユース六篠さんのお話が、紹介されました。農



山田辰男 主査

業体験実習で畑に来ていた学生たちが、実習終了後も篠山にまた足を運んだり、篠山の方を気にかけてたり、というようなことがあって、そこから、ボランティアグループ、篠山ファン倶楽部さんやユース六篠さんがつくられたわけです。これは地域のみなさんの温かさや篠山の自然の豊かさというのが学生たちを魅了したものではないかと考えています。今後もしのように篠山を気にかけてくださる学生たちが一人でも増えて、篠山で働くなり、住んでいただくなりにつながればいいのではな

いかというのが、市民の声を受けて僕たちが期待していることです。

### 竹見聖司・篠山市政策部企画課篠山に住もう 帰ろう室長

竹見 先ほどから篠山のいい例をたくさん挙げていただいて、なお且つ、ちょっと褒めすぎかなという言葉もいただきました。しかし、やはりいいことばかりではなく、課題もあると思います。内平さんから指摘をされていたように、地域としては、結果というものは早く求めたがる。ずっと携わっている私たちは、そういうことは求めるべきではないとは思っているのですが、市民全体になると求める人たちもそこにいる。その辺のことを上田部長から申し上げましたが、私たちが途中で緩衝体として入り、大学というのは必ずしもそういうものではない、というところを伝えていかないといけないと思っています。学生さんの活動の話が出ておりました。学生さんの積極性とか元気な姿を見て、地域の人たちは目に見えない色々な形でエネルギーをいただいていると思います。ただ、いかんせんこういう時期ですので、何か尺度にあった、数値化するところに表れにくいことが私たちが苦勞しているところです。古文書の件につきましても、「すぐに広報に載せていただいて」と喜んでいただきました。こういう活動をしていただいているというPRを、今年は布施さんと相談をしながらやってきました。結果を報告するのではなくて、出来るだけ前にPRをしていこうと、頑張っているような状況です。

奥村 だいぶ時間がたってきました。先ほども課題が少し述べられたかと思います。そこで最後に、課題やもしくは今後、来年はこんなことを考えているとか、そういうことを含

めてでも結構ですので、お聞かせ願いたいと思います。篠山のこともありますし、拠点をもつことのあり方でも結構です。学外の拠点だけでなく、推進室としては学内の拠点も大事です。先ほどの安心感というの、部局のレベルで、長期的にきちんと対応していただけるというもの。何か問題が起こったときは対応していただけるだろうし、色々な先生方がおられますので、幅広い対応の可能性がある。それが各地域連携センターだったり、今日前半でご報告をされた恒常的な活動を行われている2つのところだったり、出来るようになりました。それが地域の方に積極的に言える状態が生まれてきつつあると思っています。それも含めて、課題や今後の展望などがありましたら、坂江さんからお話してください。

坂江 これからのことと言いますと、実は篠山市との関係で言いますと市民セミナーをやったときに、篠山市中央図書館の関係者の方がたまたま、というかかなり興味を持って来られてまして、われわれの活動を知られて、是非ともフィールドステーションのみならず図書館に色々残っている古文書とか史料を活用し、最終的には新しい篠山の歴史を書けるような形でやって欲しい、というようなことを言われまして、来年度以降、そういう活動もしていこう、というような方向性が進みつつあります。篠山に関してはそういうことがあります。あと、われわれ自身のことで言いますと、兵庫県は非常に広くて実は五つの国が昔あったということなんですけれども、丹波だけではなく、播磨、摂津、淡路もあるし、但馬もあるんですけれども、われわれのところは割と播磨と関係するものが多いんですね。だから、播磨地域に新たな拠点的施設を作りたいなということで、一つの候補として姫路市の今度合併した香寺町の歴史文化遺産を巡

る拠点的施設が若干ありまして、それを基軸に播磨地域にも、と考えています。ちょっとそれはなかなか順調には進んでいないので、今後粘り強く市の方とも交渉をしていきたいと思っています。また、特に農学研究科に関して言いますと、加西市に農場もありますし、加西市と同じような形で拠点的施設が出来ればな、ということも密かに考えております。以上です。

**奥村** どうもありがとうございました。では保健学研究科の石岡さん、お願いします。

**石岡** 今の私たちの課題となりますと、地元にいращやる方のニーズに合った研究になっていたのか、活動になっていたのか、ということが一番大きな課題かなという風に思うんですね。そう申しますのも、まず私たちがやらせていただいたのは、実態調査というようなところだったんですけども、実際に幼稚園の先生や保育士さんにしてみたら、それは実態を知るというよりも「じゃあ、困っている子どもにどう関わるのか」という実践的なところというのを知りたいというのが多分ニーズだと思うので、その辺りのニーズに今後は応えていけるような形で関わっていきなという風に思っています。その一つとして、今年になってからも一度、篠山に行かせていただいて、様子を見せていただき、そちらの先生たちとどう関わっていくのか、というお話をさせていただいたんですけども、そういったところで、地元の方のニーズに応じたものを研究と共にお返しできればという。お世話になった方々に、その協力に対して、「こういう結果が返ってきたよ」とお伝えすることでご理解いただけるような、そんな関係づくりをこれから続けていければいいなと思っています。

**奥村** ありがとうございます。それでは布施さん、お願いします。

**布施** たくさん褒めていただいたので、来年度の1年間は相当ハードルが上がってしまったという気がしています。今日、色々と評価していただいた経緯につきましましては、多分私一人で出来たことではなくて、恐らく今まで駐在研究員として、篠山に詰めてこられた方々とか、元々それを始められた中塚先生とかの貯金があるので、そのお陰で今、上手くいっているということがあります。ですので、私の今後の課題としては、この私がどれだけ貯金を積み上げていけるのかというところが課題だと思っています。先ほど、安心感という話がありましたが、逆に私は、六甲に帰れば神戸大学があるという安心感というものがありまして、困ったことがあれば大学のどなたかに相談すれば必ず答えがある、そういった形で逆に安心感をいただいて進めていますので、農学研究科の地域連携センターをはじめ、人文学とか保健学の方とかとつながれたことはすごく今、安心感となっています。また、他の研究科ともつながって連携を進められれば、もっと色々な地域の声を拾い上げて研究を進めたり、連携事業も進めたりできるのではないかなと思います。今日、灘区や他の行政の方もいращやるということだったので、篠山市の事例が上手くいっているというお話が今日、あったかと思いません。やはり、他の市域で上手くいっているという事例は、私たちがもっと頑張らないといかんというモチベーションにもすごくつながります。先日、島根県立大学に視察に行った時も、行政の方が出向して一緒に地域連携事業を進めておられました。そういったこともありまして、私の希望としては、篠山市の方からもフィールドステーションに一人出向し

ていただくような形で、行政と市民とみなさんで篠山フィールドステーションを盛り上げていくというような形で、私一人だったり、駐在員だったりプレイヤーになるのではなくて、みなさんと社会挑戦をしていくということが大事なのかなと思っています。上田部長が、「布施さん、飛び回って元気だ」とおっしゃっていましたが、私自身はそれが理由で、市民の方から「ちょっと、今日宴会」と言われても断わらないといけないこともありまして、まだまだ距離がある、拾いきれていないニーズがあるんじゃないかなと思っていますので、もっと色々な方にとって垣根の低いフィールドステーションになりますように頑張っていきたいなと思っています。以上です。

**奥村** 余りやり過ぎて疲れないようにしてください。最後に内平さんから一言お願いするのですが、その前に他の自治体の方にご意見をいただきたいと思っています。順不同になりますが、加西市の前田さん、今の話でご意見がありましたらお話いただけたらと思います。

#### **前田晃・加西市経営戦略室課長**

**前田** 篠山市さんの取り組みが参考になりました。加西市も人口がここ数年毎年500人単位で減ってきています。今までは例えば産業団地であるとか、定住促進のための住宅地であるとか、割とハードや物理的なものに目を奪われがちでした。行政も本来はもう少し長中期的、10年から30年という課題に投資、傾注していきたいのですが、最近の風潮がどうしても結果が出ることのみ、市民も議会も目を奪われがちです。逆にわれわれはもっと長期にわたって住民生活、それから地域がいつまでも持続できるような工夫に目を向ける必要がある。おっしゃっているような知の創造、日本人が持っている重要なものは実は

地域の中に埋もれているような気がします。今日は本当にいい研究発表を聞かせていただきました。来年度以降、先ほど坂江先生もおっしゃっていましたので、市長の方にも働きかけて、頑張っていきたいと思っています。市長は神戸大学の出身者ですので恐らく力を入れてくれると思います。本日はどうもありがとうございました。

**奥村** ありがとうございます。あとお一人、神戸市の企画調整局の柳田さん、お願いいたします。

#### **柳田直明・神戸市企画調整局総合計画課計画調査係長**

**柳田** 神戸市企画調整局の柳田です。よろしく申し上げます。本日のテーマが、地域連携の拠点ということで、今、色々なお知恵を聞かせていただきました。参考になるかなと思いつつ、神戸市の場合はそもそも大学の学舎自体が市内に存在してそこにいらっしゃる中で、十分にそれを行政として活かしているのか、奥村先生からご意見を賜らなければいけないと思っています。神戸市としては、これまで数々、震災の文書の整理や古文書も含め、お世話になっています。そういった個々のつながりでお世話になっている部分については、今後もちろん深めていきたいと同時に、今後は神戸市という行政と大学さんとのつながりをいかにして深めていくか、組織体としてどのように継続していくかということについて、今後またお知恵をお借りしたいと思っています。引き続きご指導ご協力をお願いしたいと思っています。以上です。

**奥村** ありがとうございます。それでは内平さんの方からまとめというか、ご意見を申し上げます。

**内平** 5年前の質問で奥村先生に「上に期待することは何ですか？」みたいなことを、若手だったから聞かれたわけです。結局、地域連携というのは、若者たちが色々活躍しながら、自分たちの地域の中で色々な仕事をしたり、発見したりというキャリアを積んでいって、少しずつ成長するような一つの場になっているのかな、ということは思っています。ただ、その地域の中で、学生たちや僕ら研究者が活躍出来る場所を、上手くキチッと社会が活用できるまでに制度設計されているのかというと、まだ全然そういうところは、ないところもあると思います。とにかくそういった新しい仕組み、たとえば最終的には研究者になれるような人がいれば、地域連携から学部の方にポストが上がるというような、そういう一つのラインが出来ていけば、地域ももっと面白く活性化されていくこともあり得るかなと思います。5年前の奥村先生への答えとして、上に期待すること、もしくは行政の人たちに期待することは、とにかく場とか仕組みというのをドンドン社会の中にビルトインしていくようなこと考えていただければ嬉しいなと思っています。以上です。

**奥村** どうもありがとうございました。もう時間がきておりますが、何かせっかくだからここで一言発言したいという方はいらっしゃいますでしょうか。

#### **中村千春・神戸大学理事 副学長**

**中村** 本当に一言です。篠山との地域連携が非常に上手くいっているというのは、聞いていて、嬉しいです。フィールドステーションの設立のときに私は確か農学部長でした。当時の堀尾理事と一緒に少しはお役に立ったかなと思っていますので、とても嬉しいです。上田部長が、大学と地域をつなぐという意味

を篠山市は担っていっているということをおっしゃった。それが非常に嬉しいです。要は大学がシーズを持っていて、地域にもニーズがあるだけではなくて、地域にもシーズがたくさんあって、それが大学のニーズとマッチする。両方あるのだということを再確認しました。篠山市の上田部長さん、よろしく願います。感謝しております。

**奥村** うまくまとめていただきました。このように神戸大学では現在、地域連携の拠点を持って、動きを始めています。同時に県内の様々な大学と連携の中で、神戸大学は大学と連携しながら地域に関わっていくということも求められています。動きが段々広がって大学の多くの方が地域に関わっていけば、ますます、神戸大学だけでは済まないことがたくさん出てきます。それを大学間で連携しながらどうやって作っていくかも課題と感じています。そういった中で、何か役割を果たしていく必要がある。これも今後、室の方でも考えていかなあかんなと思いました。

ちょうど、先ほどの内平さんの話もありましたが、私もこのところ人口の調査などしておりまして、篠山もそうですけれど、県北部、それから中部ぐらいまで広がっていますが、江戸時代の人口を切り始めています。江戸時代の頃に支えられた人口を支えられなくなっているという、考えてみれば凄まじい事態が今、発生しつつあります。その中で私たちの地域連携もあるのではないかと思います。神戸市、特に灘区でも、人口が平成17年の半分以上入れ替わってしまうという事態が生じています。この中で一体、どうしていくのかということが問われており、ここで大学も踏ん張る必要があるのかなと思っています。またみなさま方の協力で進めていきたいと思っています。来年度も引き続き、こういった形



で議論を続けていきたいと思っていますので、またご参加のほど、よろしくお願いいたします。どうも本日はありがとうございました。



本日は、「神戸大学地域連携活動発表会」にご参加いただきありがとうございました。  
今後の発表会の参考とさせていただきます、下記のアンケートにご協力ください。

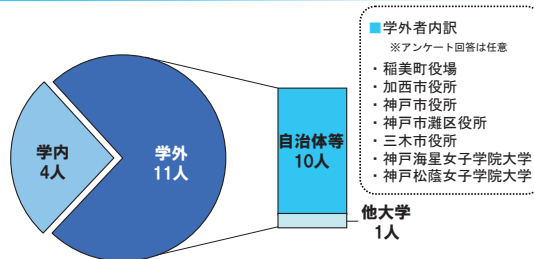
(該当事項には、□に✓を記入願います。)

1. 本日は、どちらからのご参加ですか。(□学内 □学外)  
・学外からのご参加(□他大学 □自治体等 □その他( ))
2. ご参加について( □今年、初めて参加した。 □昨年も参加した。 □毎年参加している。 )
3. 神戸大学地域連携活動発表会の開催をどのようにしてお知りになりましたか。  
□ホームページ □チラシ □ポスター □その他( )
4. 学内に向けて地域連携事業を公募したことはご存知でしたか。(学内関係者)  
□知っていた  
□学内通知 □ホームページ □部局の広報等 □その他( )  
□知らなかった
5. 発表等の内容はいかがでしたか。  
・みんなで考えよう安全・安心で快適なまちづくり  
□興味深かった。 □あまり興味を引かなかった。 □その他  
( )  
・ESDボランティア育成プログラム拡張支援事業  
□興味深かった。 □あまり興味を引かなかった。 □その他  
( )  
・自給自足への道～自分で作った米で被災地支援～  
□興味深かった。 □あまり興味を引かなかった。 □その他  
( )
6. 講演「地域連携と拠点」はいかがでしたか。  
□興味深かった。 □あまり興味を引かなかった。 □その他  
( )
7. 意見交換会はいかがでしたか。  
□参考になった。 □参考にならなかった。 □その他  
( )
8. 日頃、大学の地域連携活動について感じておられる事があれば、ご記入ください。
9. 本日の発表会についてご感想またはご要望があればご記入ください。

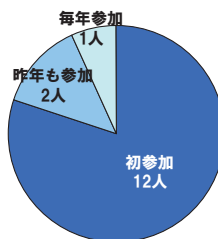
平成23年度地域連携活動発表会  
アンケート集計結果

平成24年1月20日(金)実施  
アンケート回収数：15名分

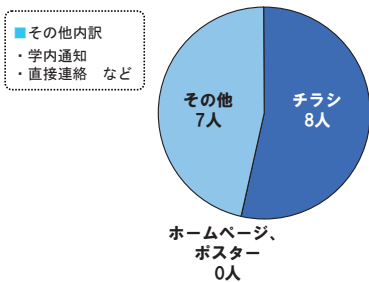
質問1 本日は、どちらからのご参加ですか。(N=15)



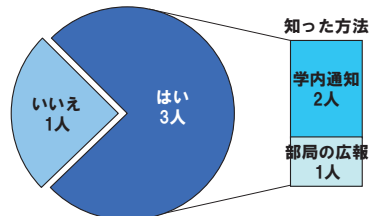
質問2 ご参加の頻度はいかがですか。(N=15)



質問3 発表会の開催をどのようにしてお知りになりましたか。(N=15)

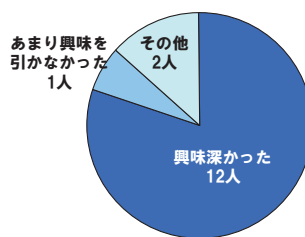


質問4 学内で地域連携事業を公募したことはご存知でしたか。(学内者のみ：N=4)

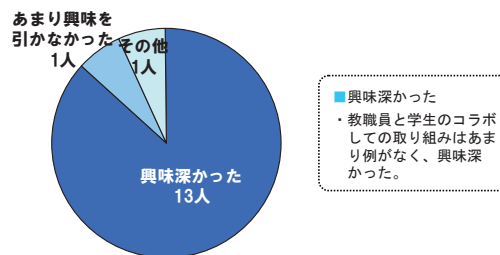


質問5 発表等の内容はいかがでしたか。(N=15)

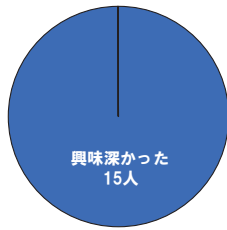
① みんなで考えよう安全・安心で快適なまちづくり



② ESDボランティア育成プログラム拡張支援事業



### ③ 自給自足への道～自分で作った米で被災地支援～



- 興味深かった
- ・学生さんの実践にもとづく発表であり、フォーラムの具体性がアップしたように思う。活動についても学生の元気、積極性などが、地域の人の心に生かされていると思う。
- ・学生自らの取り組みの金銭的な負担を今後どうしていくかを検討していく必要があると考えた。

#### 質問6 講演「地域連携と拠点」はいかがでしたか。

回答は、すべて「興味深かった」であった。

##### ご意見

- ・改めて地域拠点の意義を見させていただきました。
- ・篠山フィールドステーションの活動実績や学内への展開について知ることができて興味深かった。

#### 質問7 意見交換会はいかがでしたか。

回答は、すべて「興味深かった」であった。

##### ご意見

- ・内平氏の報告にあるようにようやく篠山の活動が形あるものになってきたなど、時間を要するものであるが、地域連携に人材を投入することは、地域連携が加速的に展開でき、経費や時間のコストを低減させることができる可能性がある。

#### 質問8 日頃、大学の地域連携活動について感じておられることがあれば、ご記入ください。

- ・行政と大学とのニーズ、シーズの相違（予算面も含め）を解消する難しさ
- ・例えば、発表会翌日開催するとあったフォーラム@篠山など、学内でその情報が伝わっていないなど、学内におけるその情報伝達・宣伝等、など学内外のステークホルダーへの姿勢は作り直していく余地がまだまだあるように感じた。
- ・これから、鋭意取り組みます。

#### 質問9 本日の発表会について感想またはご要望があればご記入ください。

- ・今後、将来的には、学内企画部門(事務や理事等々)にも参加してもらおうようにしてほしい。
- ・今後の地域連携のあり方、進め方について大変参考になりました。ありがとうございました。
- ・感謝です!!
- ・今後、拡大させていく分野であり、人材育成に非常に有用であると思います。
- ・大学と地域がいっしょになって元気になってほしい。
- ・視野が広がりました。持ち帰ってしっかり報告いたします。

## 第II章

# 研究科地域連携センター報告

**平成 23 年度（2011）**  
**人文学研究科地域連携センター活動報告**  
(2012 年 3 月現在)



大学院人文学研究科（文学部）では、平成 14 年（2002）から、「歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業」を開始した。同年 11 月には地域連携研究員制度を創設し（現在 6 名）、翌年 1 月には、構内に「神戸大学文学部地域連携センター」を設置した（平成 19 年 4 月の文学部改組にもとづき、現在は人文学地域連携センターと改称）。

これは阪神・淡路大震災以来の地域貢献活動を踏まえ、大学が県内各地の歴史資料の保全・活用や歴史遺産を活かしたまちづくりを、自治体や地域住民と連携して取り組んでいく事を目的とした事業である。事業を開始させてから 9 年目に入る今年度には、約 40 前後の個別事業を展開した。

このうち今年度の新事業としては、篠山市・高砂市・南あわじ市との連携事業があり、昨年度から始まった明石市・三木市との連携事業が軌道に乗りだした。また平成 24 年度までの 3 ヶ年事業、特別研究プロジェクト「地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備」事業（文部科学省採択）が 2 年目に入った。

以下、センターが今年度おこなった個別事業の一覧である。

**(1) 第 10 回 歴史文化をめぐる地域連携協議会の開催**

■「地域歴史文化の形成と災害資料」をテーマにして、自治体・住民・大学関係者を一堂に会した協議会を開催（1/29 文学部 331 教室にて）。38 機関 67 名参加。

**(2) 地域づくり支援と自治体史の編纂**

■神戸市

○包括協定にもとづく灘区との連携事業 … 平成 23 年度神戸大学・灘区まちづくりチャレンジ事業助成金にもとづく「摩耶道のとおり村の歴史」の関係資料調査および講演会開催事業を実施。

その成果にもとづく講演会とフィールドワーク企画を 3 月 12 日月曜に開催予定／平成 18 年度刊行の冊子『水道筋周辺地域のむかし』等の普及活動。

○神戸市文書館（都市問題研究所）との連携事業 … レファレンス業務の充実化、未整理史料の整理・目録作り／ドイツ人レファートの撮影した戦前期神戸の町並み等を紹介する企画展「近代神戸の風景」を開催（10/4-10/21）。

○神戸を中心とする文献資料所在確認調査 … 神戸市北野の西脇家文書（人文学研究科寄贈）の調査研究をもとにした「北野村古文書さがえり展」（昨年度開催）を踏まえ、神戸北野美術館の展示コーナー「よみがえる北野村」を制作→解説パンフを 48～49 頁に添付。

○住吉学園（住吉財産区）との連携事業 … 横田家文書神社関連資料の基礎的調査。資料館だよりの刊行協力。将来を見越した包括的協議の実施。

- 神戸市東灘区御影石町木村酒造との連携事業… 木村家文書の仮整理・調査事業の終了。
- 神戸元町商店街連合会（みなと元町タウン協議会）との連携… これまでの協力関係をもとにして地元経済団体に招かれ「神戸海港都市」について講演。
- 淡河町での連携事業… 石峯寺関連史料の調査研究
- 包括協定にもとづく小野市との連携事業
- 新たに見つかった写真資料にもとづいた平成 23 年度小野市立好古館企画展「青野原収容所俘虜がみた日本」の共同開催（10/1～10/30）／青野原俘虜収容所再現コンサート「時空をわたる楽の音」の共同開催（10/14 六甲台講堂／10/16 小野市エクラホール）



- 小野市立好古館の平成 23 年度特別展「下東条歴史街道をゆく」の開催協力（聞き取り調査と報告書への論考投稿など）。

■包括協定にもとづく朝来市との連携事業

- 生野町内の古文書調査と活用研究／石川準吉文書の調査研究／あさご古文書初級教室の開催と「資料集」刊行に向けた共同の準備作業

■丹波市での連携事業

- 人文学研究科との「歴史遺産を活用した地域活性化」をめざす協定（平成 19 年 8 月締結）にもとづく丹波市との連携事業… 合併前の旧 6 町を単位にした巡回古文書講座『丹波の歴史文化を探る ―古文書との出会い―』を 6 回開催（古文書相談室の開催で好評を得る）。巡回古文書講座の成果をもとに刊行した『丹波市ブックレット』の普及活動。
- 春日町棚原地区との連携事業… 地区内資料の基礎的調査の続行。これまでの研究成果をもとづき刊行された『棚原ブックレット』の普及活動。

■伊丹市

- 伊丹市立博物館との連携事業… 震災関連資料の収集・分析とそれにもとづく『伊丹市史』の編集協力

■宝塚市

- 宝塚市山本共有財産組合との連携… 昨年度の「山本の歴史」展の開催を踏まえ、同地区の歴史資料の収集と分析活動の実施。

■尼崎市

- 市史編さん関連者を中心にした「宝珠院文書研究会」「市史研究会」の開催。

■三木市

- 玉置家文書の活用に向けた共同調査研究の実施。文化庁の「地域伝統文化総合活性化事業」助成にもとづく「三木市文化遺産活用・活性化事業」の続行（古文書講座等）。

■三田市

- 九鬼家文書目録の整理調査をおこない、詳細目録の刊行をめざす。
- 市史編集室と連携して兵庫県立祥雲館高校「歴史研究入門」の開催協力（講師派遣）

#### ■明石市

○兵庫県立図書館と明石市教育委員会からの依頼にもとづき旧明石藩家老・黒田半平家文書史料群の整理調査活動の続行（目録作成をめざす）／市内の歴史遺産マップ作成に向けた「地域文化財普及活用事業」にオブザーバー参加／文化財審議委員に委嘱をうけたスタッフが文化財行政や指定文化財について審議。

#### ■たつの市

○神戸大学近世地域史研究会…『新宮町史』史料編刊行後、市民と協力して収集・整理した「町史未収近世史料」の調査研究会を継続開催。『観聞記』の研究成果の刊行予定。

○たつの市教育委員会との連携…5月の台風被害によって発見された龍野藩大庄屋「八瀬家住宅」の襖の下張り文書の保全・調査活動を歴史資料ネットワークと協力して実施。

11/5-6に同家で開催された特別公開時に調査成果をパネル展示／今後の連携協力のあり方について検討。

#### ■高砂市

○文化財審議委員に任命されたスタッフが市の文化財行政について審議。

#### ■佐用町との連携

○佐用町教育委員会と佐用郡地域史研究会の取り組む「平成23年度・地域の文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」（文化庁）の一環として開かれる高校生向けの講演会（6月と8月）、および「地域資料の取扱い学習会」への協力（講師派遣等）。

#### ■福崎町との連携事業

○大庄屋三木家史料の資料調査／初心者向けの古文書講座の開催協力／平成23年度・歴史民俗資料館連続講座「地域の歴史文化遺産は郷土のたから」の開催協力／リーフリット作成に向けた柳田国男の書簡分析と播磨国風土記の基礎的調査の実施

#### ■猪名川町との連携事業

○平成23年度リバグレス猪名川歴史講座の開催協力（古代史コース）

#### ■自治体史の編纂事業

○『三田市史』…通史編1（前近代）、2（近現代）の刊行協力（2は3月に刊行予定）。

○『香寺町史村の歴史』…通史編刊行に協力（8/31）／香寺町史完成記念シンポジウム「町史完成とそれを活かしたまちづくり」（10/23）を共同開催／完成した町史を読む会を1月から開始／

### (3) 被災資料と歴史資料の保全・活用事業

#### ■歴史資料ネットワークへの協力・支援

○東日本大震災の歴史資料の救済・保全活動への協力／たつの市の八瀬家住宅で発見された襖の下張り文書の保全・調査（5月の台風被害による）／9月に発生した台風被害の被災地巡見を実施。

○神戸市兵庫区平野地区における古文書調査と古文書教室の開催協力

#### ■養父市の大規模史料群の資料整理への協力

昨年度の明延鉦山関連資料の資料調査活動を踏まえ、今後の方向性（古文書調査等も含め）について打ち合わせ実施（5/18）。

#### ■石川準吉古文書の整理事業

朝来市生野町に関連する石川準吉文書（東京都と神奈川県に所蔵）の仮整理事業の終了。

### (4) 阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会

■(S) 科研グループの主催する「第11回地域歴史資料学研究会」（10/20）に協力して、スタッフが阪神・淡路大震災における「震災資料」と「震災関連行政文書の整理」状況について報告。



#### (5) 地域歴史遺産の活用をはかる人材養成（学生・院生教育）

■現代 GP「地域歴史遺産の活用を図る地域リーダーの養成」事業の成果にもとづいて開講された大学院人文学研究科「共通教育科目」への授業提供。

○地域歴史遺産保全活用基礎論 A、B… 地域歴史遺産の保全・活用のための基礎的講義（リレー形式。前後期とも金曜 1 限に開催）

○地域歴史遺産保全活用演習 … 篠山市日置地区の旧庄屋宅で発見された古文書（約 5000 点）を用い、歴史資料の保全・活用の基礎的能力を得るための学生向け演習を篠山フィールドステーションで実施（9/5～7。25 名の学生・院生参加）。発見された古文書をめぐる研究成果を紹介する市民向けセミナー「江戸時代の丹波茶～日置地区中西家文書の世界～」と史料のミニ展示会も開催（約 20 人の市民参加。学生も討論に参加）

○地域歴史遺産活用企画演習 … 市民とともに地域文献史料の活用を図る専門的知識を得るための実践的演習を 2/23-24 に開催（三木市旧玉置家住宅にて）



■教員養成 GP「地域文化を担う地歴科高校教員の養成」事業を定着させる活動

○「地歴科教育論」の開講（前期）、御影高校と連携した地域をテーマとした課題学習。

#### (6) 平成 23 年度科学研究費助成金・基盤研究（S）「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」の研究支援

■科学研究の基盤研究組織として研究分析を支援。東日本大震災に対応した実践的な調査活動を実施。11 月に被災地フォーラム @ 宮城の開催。3 月に総括研究会の開催予定。

#### (7) 平成 22 年～ 24 年度特別研究「地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備」事業

■「まちづくり歴史遺産活用講座」試行プログラムの実施（4 月尼崎市、7 月三田市、9 月神戸大。3 月小野市で開催予定）／歴史資料目録群データ作成に向けた研究会と基礎的調査の実施／12/11 に「地域歴史文化の育成支援拠点としての国公立大学」と題したフォーラム開催（59 機関（うち大学は 22）70 名参加）

#### (8) 神戸大学附属図書館との連携

■附属図書館所蔵の貴重書庫の文書整理（目録・解題）。目録データベースの公開。

#### (9) 地域連携研究とスタッフによる調査研究

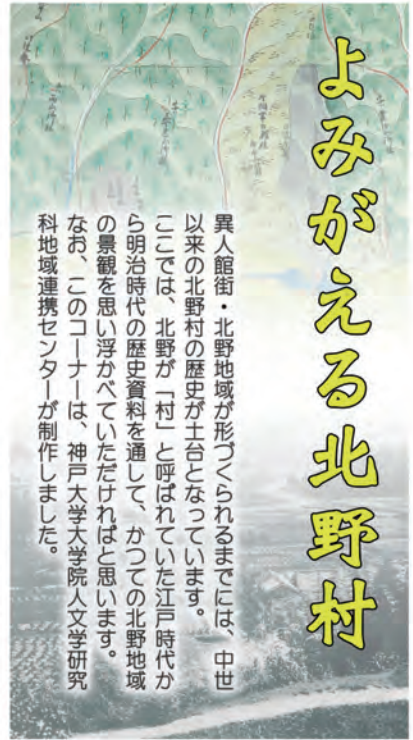
○地域連携センター発行の学術年報『LINK 一地域・大学・文化』3 号の刊行（2010/8 月）。

○センタースタッフによる科研調査研究（6 件あり）のほか個別の講演会等（20 件以上）。



北野村絵図 (読み取り図) 明和9年 (1772)  
西脇家文書 C21-1

北野村の集落は主に山裾の高みに集まり、集落の南側には田や畑がひろがっていた。本図に描かれている家の数は、当時の実際の家数と同じと思われる。村の北には「御林山」と呼ばれる山を背負い、東側には旧生田川の河床がほぼ南北に流れているが、この川筋は北野村の属する摂津国八部郡と隣の兔原郡との境界をなしていた。生田川は、明治4年(1871)に付け替えられ、現在の新幹線新神戸駅付近からほぼ真南に下るかたちに大きく変化した。旧河床は、現在フラワーロードの敷地となり、地下には地下鉄も通って神戸でも有数の交通路となっている。



異人館街・北野地域が形づくられるまでには、中世以来の北野村の歴史が土台となっています。ここでは、北野が「村」と呼ばれていた江戸時代から明治時代の歴史資料を通して、かつての北野地域の景観を思い浮かべていただければと思います。なお、このコーナーは、神戸大学大学院人文科学研究科地域連携センターが制作しました。



山本通孝丁目式丁目絵図 (対照図) 明治9年 (1876)  
西脇家文書 C 3

土地台帳に記載される一筆一筆の土地と実際の所在地とを対照するために、測量に基づいて製作されたものと考えられる。北野村は、北野町と改称されたあと、さらに山本通1丁目および2丁目となった(現在は北部がふたたび北野町)。北野村の領域をリアルに描いた地図としてはもっとも初期のもの一つ。一見してわかるように北野の地は、北西部に集まっていた宅地を除くと、ほぼ全体にわたって東西方向に長辺をもつ短冊型の区画が並んでおり、いずれも田や畑と記載されている。ここから緩傾斜地に棚田がひろがる風景を容易に想像することができます。



生田川筋新堤争論絵図 正徳6年(1716)6月  
西脇家文書C 13

北野村とその東隣の生田村との間で数年来争われてきた、生田川の「新堤」をめぐる争論の過程で作成された絵図。

本図は、争論の裁定者である幕府代官所役人の現地見分に同行案内するにあたり、正徳6年6月時点での係争地の現況を、双方の立ち会いのもと描いたものである。

図中に白く描かれた旧生田川筋の東西両岸には黒線が引かれており、これが従来から存在する堤だが、図の中央付近両岸とも緑の線に変わっており、この部分が今回の争論の係争地だった。また水流を抑制するための装置である「杵蛇籠」が堤にそって両岸に何ヶ所か描かれているが、これも係争対象だった。



郡境山境草山出入裁許絵図(上:表面、下:裏面)

享保11年(1726)10月19日  
西脇家文書C 14

摂津国兔原郡葺屋庄(東側)と同国八部郡福原庄(西側)との間で争われてきた郡の境界と草山の境界争いについて、当時の大坂城代と大坂東西両町奉行が下した裁定を図にあらわしたものの。

郡の境目については、北野村を含む福原庄側の主張がほぼ認められた。一方、中一里山とよばれる六甲山中の草山の境界については、双方の主張の根拠があいまいだったこともあって、結局生田川最上流部の一定領域を両庄の入会(共同利用)と裁定することによって、一応の解決がはかられた(図の上部、黒い線で囲まれた範囲)。

本図は、表に係争地域を精彩な絵図にあらわして裁定の内容を図示するとともに、裏にその裁定の内容が文字で記されている。もちろん測量に基づいたものではないが、川筋や尾根筋の形などは驚くほど実際の地形に似せて描かれており、幕府役人がかなり厳密な現地見分をおこなって、裁定するに至ったことがうかがえる。



外国人への土地貸与契約書 明治3年(1870)~明治27年(1894)  
西脇家文書C20-2(右)、北野村文書(中・左)

神戸が開港されてから多くの外国人が居留地に住むようになった。北野の地は、やや高台に位置し、風光明媚なことから、多くの外国人が土地を借り受け、屋敷を構えるようになった。そのため土地を所有している日本人と外国人との間に、土地貸与の契約書が交わされたが、横書きの外国語と縦書きの日本語とが併記される珍しい形式の文書が作成されたのである。右の明治3年のものは、開港まもない頃のもので、外国人が早くから北野の地に着目していたことが判明する。

# 平成 23 年度

## 神戸大学大学院保健学研究科地域連携センター報告書

保健学研究科地域連携センター代表 高田 哲

### 【概要】

平成 23 年度には、地域連携センター運営委員会を 8 回開催し、新たに内規を制定することによって研究科内の位置づけを明瞭にした。23 年度に実施したプログラムは、①周産期に問題を持つハイリスク児とその家族への支援事業、②医療的ケアを必要とする子ども達への支援と家族・教員の研修事業、③神戸市、篠山市における発達障害児とその家族への支援事業、④兵庫県、神戸市の資源を活用した国際保健促進事業、⑤須磨区地域における子育て支援ネットワーク事業（父親の育児支援のための教育プログラム開発など）、⑥福祉施設を利用する高齢者・障害者への生活支援事業（医療と福祉の連携）、⑦認知障害予防のための健康活動の 7 事業である。日常的な活動のほかに、平成 23 年度には、篠山市と連携して 3 回のセミナー・シンポジウムを開催した。また、須磨区自立支援協議会と共に発達障害をもつ子どもと家族を対象に 8 月に「就学後の集い」、10 月には、神戸市と連携して「あじさいキャンプ」を実施した。平成 24 年 1 月 21 日には、地域連携活動報告会を兵庫県民会館で開催するとともに、2 月には、「認知症の人と家族の生きがい支援シンポジウム」を実施した。これらの活動成果は、ホームページ及びパンフレットを通じて紹介している。

### 1. 周産期に問題を持つハイリスク児とその家族への支援事業

神戸市と連携して、平成 17 年より極低出生体重児（出生体重 1,500g 未満の赤ちゃん）とその家族を対象とした親子教室“YOYO クラブ”を運営してきた。平成 23 年度は、通常クラス（計 30 回）に加え、夏祭り（8 月）、遠足（10 月：2 回）、クリスマス会（12 月：2 回）を実施した。また、保育士、児童デイサービス職員を対象とした研修セミナー「保育現場における気になる子への対応～ライフステージを通して～」を開催し、108 人が参加した。親子教室は、神戸市総合児童センターにて毎週火曜日に開催しており、4 つのクラスを運営している。教室には、神戸大学保健学研究科、甲南女子大学・神戸親和女子大学臨床心理学科の大学院生がボランティアスタッフとして参加している。保健学研究科地域連携センター内に YOYO クラブとしてのホームページを設置しており、毎回の教室風景が報告されている。



親子プログラム（初めての出会い）



遠足（須磨水族園にて）

## 2. 医療的ケアを必要とする子ども達への支援事業

神戸市教育委員会と協力して、肢体不自由養護学校において教職員が経管栄養などの医療的ケアに安全に参加できるシステムづくりを行っている。23年度には、教職員を対象とした5回の研修会に協力するとともに、各校への巡回指導を実施した。また、校外行事の安全性を高めるために、修学旅行、キャンプへの付き添いを兵庫県立こども病院、にこにこハウス療育センターと協力して実施している。



養護学校では胃ろう管理が増加している。



養護学校におけるキャンプでの様子（しあわせの村にて）

## 3. 神戸市、篠山市における発達障害児とその家族への支援事業

### 1) 発達障害児とその家族への支援事業（灘ぽっとらっく、すまいる・ぽっとらっく）

神戸市と協力して、発達支援教室“灘ぽっとらっく”、“すまいるぽっとらっく”の2教室を運営している。これらの教室では、保護者が発達障害について学ぶ講習会プログラムと学生や保育士、保健師、地域のボランティアの託児による子どもプログラムを実施してきた。“灘ぽっとらっく”は、神戸大学子育て支援施設あーちにおいて、“すまいるぽっとらっく”は青陽須磨特別支援学校において実施されており、平成24年3月までに計21回の教室（1回は合同教室）を開催した。12月までに両教室を通じて保護者235名、子ども212名、ボランティア280名が参加した。さらに、TEACCHに基盤を置いた個別支援教室“ほっと”をあーちと神戸市総合児童センターにおいて、計32回開催した。就学後の子どもたちに対しても、“就学後の集い”、“あじさいキャンプ”など多彩なプログラムを提供している。さらに、思春期の子どもたちの居場所づくり事業も23年8月に開始した。



ぽっとらっく（子どもプログラム）



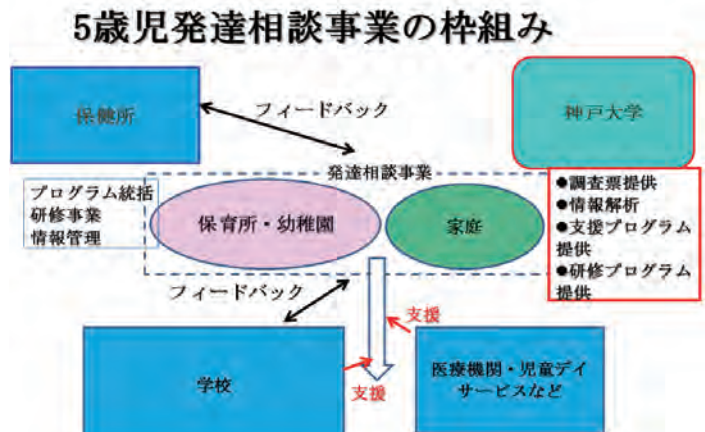
あじさいキャンプ（飯盒炊爨）

## 2) 篠山市における発達障害児とその家族への支援事業

篠山市と協力して5歳児発達相談事業を実施した。この事業では、幼稚園・保育所の教職員と家族が協力して、子どもたちの実態把握と地域に根差した支援体制づくりを目指している。平成23年度には、市内に居住するすべての5歳児（年中）を対象に行動発達に関する質問調査を行った。質問票の作成、解析、職員研修・専門家巡回支援を神戸大学が担当し、篠山市健康福祉部がこれらの結果に基づく子どもと家族への相談事業を実施した。私たちが提案してきた本事業は、兵庫県モデル事業として取り上げられており、平成23年度には、兵庫県下5市町でモデル事業として実施された。平成24年度には、さらに18市町村にまで実施地域が広がる予定である。



篠山におけるシンポジウム風景



篠山市と神戸大学の役割分担

## 4. 兵庫県、神戸市の資源を活用した国際保健促進事業

インドネシアのイスラム国立大学の教員3名及び神戸大学大学院生10名を対象に1ヵ月にわたり、災害看護に関する研修を実施した。本事業はアジア教育経済開発機構からの委託によるもので、JICA兵庫、WHO神戸と協力して、コミュニティを基盤とした防災対策について阪神・淡路大震災の経験を踏まえて研修を行った。また、ジャワ島中部地震被災地において、ガジヤマダ大学と共同で運営している子どもの家（バンツール）では、平成23年12月に神戸市の子どもたちが描いた絵画展を実施した。一方、インドネシアの子どもたちから募集した作品の中から、ガジヤマダ大学スタッフとともに優秀作品18点を選考して表彰した。これらの作品については、神戸市総合児童センターでの展示を予定している。



くつろぐ研修生と大学院生（JICA兵庫にて）



子どもの家における絵画展（インドネシア・バンツール）

## 5. 須磨区地域における子育て支援ネットワーク事業

### (父親の育児支援のための教育プログラム開発など)

神戸市須磨区の北須磨団地自治会の協力を得て、未就学児（0～6歳）の父親を対象とした“お父さんに役立つ育児セミナー”を6回実施した。

参加者募集の広報は2011年の2月頃から行い、保育センター、児童館へのポスター貼用、自治会、医療機関、須磨区子育て係でのおき紙、同区の健診での保健師さんからの配布などによった。第2回のクッキングではお母さんがいなくても、子どもと食事が食べられるという目的のもと、食材をアレンジして、大人と子どものも献立や基本のご飯とお味噌汁、おやつを調理し家族皆で食事をした。親子遠足では、子どもの世話をする、遊ぶことを通じて、育児にかかわることを目標に掲げ、野外（しあわせの村）で体を動かし、リフレッシュしながら家族間で交流し、また、お父さん同士、お母さん同士、子ども同士の交流を深めた。育児技術を楽しく学ぶ場、お父さん方の交流の場となり、地域の活性化に少しでもつながればと考えている。



親子クッキングの様子

## 6. 福祉施設を利用する高齢者・障害者への生活支援事業（医療と福祉の連携）

「医療と福祉の連携による福祉施設を利用する障害者への生活支援事業」は、地域交流事業の後方支援、学生ボランティア活動支援、ケアスタッフの実践力向上のための支援（勉強会）を柱とし、事業を展開している。

### 1) 学生ボランティア活動

昨年度に引き続き、学生ボランティアによる定期訪問（1回／月程度）を実施した。

### 2) 地域交流事業への後方支援

9月23日に開催された神戸聖隷福祉事業団主催の「おいでやすカーニバル」に学生7名、教員2名が参加。学生3名は介護ボランティアとして利用者への園内散策の支援を行った。学生4名は模擬店を出店し、利用者及び地域住民との交流を行った。

### 3) ケアスタッフの実践力向上のための支援

①神戸友生園ケアスタッフを主に対象とし、「発達障害」「高次脳機能障害」等、利用者の障害理解に関する内容をテーマとし、合計5回学習会を開催した。

②神戸聖生園ケアスタッフを主に対象とし、「お薬との付き合い方」をテーマに学習会を開催した。講師は、本学大学院病院薬剤師が担当した。



学生による様々なボランティア活動



学習会：大学院病院薬剤部との連携

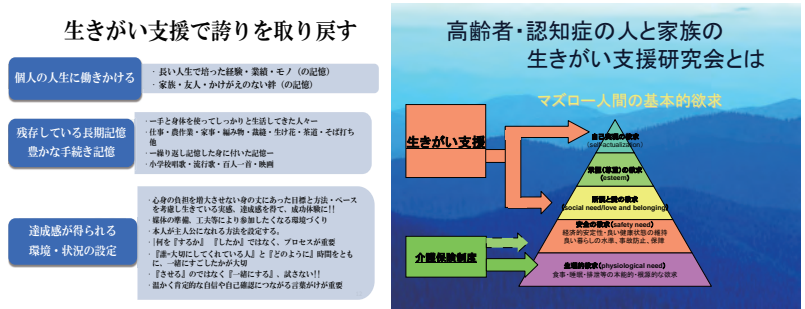
## 7. 認知障害予防のための健康活動

これまで、我が国の認知症有病率は8～10%と言われ、2015年の高齢者人口3500万人中、認知症患者は350万にと推定されていた。しかし、最新の認知症有病率は14～15%と発表され、2015年には認知症患者が500万人を超えるということになる。一方、認知症高齢者の約8割が在宅で生活しており、老老介護に加え、認知症の増加による認知介護の問題も浮上してきている。さらに、高齢者白書によると高齢者を取り巻く環境は単独・夫婦のみといった高齢世帯の増加により社会的孤立に陥りやすい状況にある。いわば高齢者は介護「問題」の対象として社会に依存する残余の存在となっているのである。現在、介護の社会化を目的に介護保険サービスが導入され、食べる・排泄する・移動するといった身体面の基本的欲求は充足されている。

しかし、人としてその人らしく生きるためには高次の欲求（自己実現・所属など）の充足が必要であり、それが満たされていないが現状である。そこで、“高齢者・認知症の人と家族の生きがい支援研究会”は、在宅認知症高齢者と家族を対象に市民および医療福祉専門職者が協働して、「真の社会的存在」として生きられるケアに焦点を当てた生きがい支援活動を行なうこととした。その第一歩として「認知症の人と家族の生きがい支援シンポジウム 認知症再考—共に豊かに生きるために」を2月18日に開催した。本シンポジウムには、250人にのぼる人々が参加した。



2月18日 認知症の人と家族の生きがい支援シンポジウム



## 8. 保健学研究科地域連携センター 23年度事業報告会

平成24年1月21日に、平成23年度地域連携事業報告会を兵庫県民会館において開催した。報告会には、自治体、NPO関係者も参加し、熱心な討議が繰り広げられた。



# 神戸大学大学院農学研究科地域連携センター 2011 年活動報告書

## 神戸大学大学院農学研究科地域連携センター

農学研究科地域連携センターは、住民・行政・NPO等と農学研究科の各研究講座を繋ぎ、その活動をサポートする中間支援の役割を果たすとともに、センター独自のプロジェクトを実施することを目指している。2011年度は、以下の3つの事業を推進した。



### I 地域共同研究

地域共同研究の実施を通じて、地域課題の解決に資する研究を行うことを目指した。今後期待される成果として、新たな地域ブランド農作物の開発、獣害対策や森林管理などの里山整備方法の開発、地域の特産品に合わせた環境保全型栽培方法の普及、地域づくり等の人材養成への貢献などが挙げられる。本年度は10の共同研究を実施し、現場とともに社会実験を進め、他地域へ普及可能な実証的な知の創造を目指した。

#### H23 年度 地域共同研究 ( ) 内は実施地域

- 1) 篠山市農産物の新たなブランドづくりに関する研究 (篠山市)
- 2) 篠山市の共生型獣害対策に関する研究 (篠山市)
- 3) 篠山市におけるナレッジマネジメントシステムの開発と普及に関する研究 (篠山市)
- 4) 水田地帯における生物多様性の創出 (篠山市)
- 5) 新しい特産品づくりに関する研究—”香りヤマナシ”栽培の可能性— (篠山市)
- 6) 山田錦の栽培ナレッジマネジメントプロジェクト (三木市)

#### H23 年度 農学部地域連携センター認定プロジェクト

- 1) 地域文化財樹木の保護と管理に関する研究
- 2) 里山を健康に維持させる管理手法の実証的研究
- 3) 黒豆生産を中心とした農業施策効果の経済波及効果の評価
- 4) 佐用町昆虫館の運営を支える支援事業

## II 地域交流活動

地域社会と農学研究科で知を共有するべく交流活動を推進した。活動内容は大きく3つに分けられる。1. 神戸大学篠山フィールドステーションを拠点とした、食農コープ教育プログラムの実施、シンポジウムの開催や、地域課題に関連したセミナーの開催など、2. 農村ボランティアバンクの支援、3. 農業・農村に関する学びを深める場を学生や市民に提供することである。これらを通じて、農村地域の人材ネットワーク形成を図りながら、地域社会と大学とがともに農村地域の活性化を目指した。



### 1. 篠山フィールドステーションを拠点とした地域交流活動

#### 1.1 食農コープ教育プログラムの推進

- 1) 「実践農学入門」(篠山市畑地区)、「実践農学」(篠山市真南条地区・篠山市城北地区)の実施
- 2) 食農コープインターンシップの実施(徳島県他)

#### 1-2 地域づくり活動と地域人材育成の支援

- 1) 丹波の森若者塾事業の支援
  - ◆ フォトコンテストによる篠山の魅力発信(鳳鳴発～地域との絆 2011～) / 篠山鳳鳴高校・神戸大学篠山フィールドステーション・関西大学佐治スタジオ
  - ◆ 農業を通しての地域・大学・高校の交流 / 篠山東雲高校・神戸大学篠山フィールドステーション
- 2) 「2011年度夏期篠山市古文書合宿」の実施補助
- 3) 各種委員会参加(篠山市自治基本条例検証委員会 / 篠山東雲高校評議委員 / 篠山環境みらい会議アドバイザー / 篠山市創造都市ネットワーク推進準備委員等)
- 4) 学生ボランティア団体の活動支援(ささやまファン倶楽部 / ユース六篠)

#### 1-3 セミナー・講演等

- 1) 篠山フィールドステーションオープンセミナーの実施(各月)。
- 2) 大学地域連携フォーラム in 青垣「大学と連携して地域を考える～まじる・きづく・変わる」にてポスター等を用いた活動報告。
- 3) 講師派遣(篠山市楽農スクール / 丹波の森大学等)

## 2. 農村ボランティアの仕組みづくり

### 1) 農村ボランティアバンク KOBE

本センターと NPO 法人食と農の研究所，NPO 法人有機農業研究会と協働で 2008 年度から農村ボランティアバンクの仕組みづくりを進めている。2011 年度は 78 名の登録があり，合計 301 名が登録されている

(H24 年 1 月末現在)。2011 年度は農家からのボランティア要請 22 件に対して，22 名/日がマッチングできた。登録数は年々増加しているが，マッチング件数は伸び悩んでいるため，農村ボランティアバンクを頻繁に利用するユーザーと農家との



マッチングの推進や，稀にしか利用しないユーザーの利用頻度を上げるための企画（以下の篠山市黒大豆作業ボランティアの実施）をおこない，よりよい仕組みづくりを支援した。

### 2) 篠山市黒大豆作業ボランティアの実施

登録をしているが稀にしか利用しない学生のニーズに，「篠山の農家の要請が少ない」というものがあつたため，一般社団法人ノオトと共同で，10 月の毎週土日に篠山市内で黒大豆枝豆の収穫・販売をする有償ボランティアの募集を企画した。その結果，のべ 17 名が（各週 5～6 名）参加した。

## 3. 農業・農村の学びを深めるための場の提供

### 1) 有機農業と農業ボランティア入門セミナー（2008 年～）

- ◆ 第 6 回：2011 年 7 月 23 日（土），参加者 5 名（学生 1 名、一般 1 名、スタッフ 3 名），  
内容：有機農業に必要な農具の紹介や、ぼかし肥、ロープワークの実演など
- ◆ 第 7 回：2011 年 12 月 3 日（土），参加者 9 名（学生 1 名、一般 5 名、スタッフ 3 名），  
内容：有機栽培のハウスと畑の見学，小麦踏み，鋤を使った畑作業など

### 2) 篠山市若手農家と神戸大生の交流会開催

2011 年 11 月 12 日（土）神戸大学祭「厳夜祭」にて，「篠山市担い手農業者協議会」のみなさんと，神戸大学の学生で食農コープ教育現役履修者及び OB/OG らが交流し，篠山の農業の現実や将来の展望などを議論した。

### 3) 川西市生涯学習センターでの生涯学習短期大学の生涯学習プログラムの実施

### III 相談情報発信

#### 1. 相談業務の概要

地域と農学研究科を繋ぐ窓口として、情報の受発信を行い各種相談に答える。本年度は連携センターと篠山フィールドステーションで合わせて、210件（2012年1月末集計分）の相談が寄せられている。その内訳は以下の通りである。



##### 1-1. 農学研究科地域連携センター

2011年度は80件の相談が寄せられている。これらの相談のうち、33件は学生の相談でインターンシップに関するものなどであった。オクラの栽培や里山管理などの実施に関する相談が、研究化したほか、北播磨のアンテナショップに関する相談や三木市との連携に関する相談は今後の事業展開が期待されている。

##### 1-2. 篠山フィールドステーション

2011年度は130件の相談が寄せられている。これらの相談のうち、丹波地域で活動する4大学の連携の推進や大丹波スイーツフェアへの菓子出店、真南条上営農組合が生産する「丹波の赤じゃが」を使った加工品の開発などを実現させることができた。また、市民から相談のあった水稻の作業内容の違いによる食味値の違いを調査し、それが次年度の研究へつながるという事例もあった。

#### 2. 情報発信

年次報告（ANNUAL REPORT）の発行やHPやtwitterで情報を公開し、農村地域に広く成果還元をおこなった。また、「農村に学ぶはじめの一步」の刊行を通して、これまでの地域連携の成果を教材としても利用可能となった。また、篠山フィールドステーションの拠点の意義に関する意見交換で話題提供を行った。その他、シンポジウムやフォーラム等の講演や話題提供を通して、先駆的な連携研究や連携事業のあり方を社会に示す活動を行った。

#### 2011年度 運営体制

- センター長 : 高田理（食料生産管理学 教授）
- 副センター長 : 伊藤一幸（熱帯有用植物学 教授） 杵本敏男（植物栄養学 教授）
- 運営委員会 : 万年英之（動物遺伝育種学 教授） 石井弘明（森林資源学 准教授） 庄司浩一（生産システム工学 准教授） 伊庭治彦（食料生産管理学 准教授） 宇野雄一（花奔野菜園芸学 准教授） 上田修司（動物資源利用化学 助教）
- マネージャー : 中塚雅也（食料経済学 准教授）
- 地域連携コーディネーター : 松原茂仁
- 地域連携研究員 : 内平隆之（2011年9月末まで） 近藤史（2012年1月まで） 鈴木曜（2012年1月末まで） 藤原ひとみ（2012年1月から） 布施未恵子

## 第三章

# 学内公募事業活動報告

## 南あわじ市における「国生みの里プロジェクト」への支援

人間発達環境学研究科 教授  
発達支援インスティテュート サイエンスショップ副室長  
伊藤 真之

### 1. 活動の背景と趣旨

兵庫県南あわじ市の市民グループ「くましろふれあい広場」は、同市の神代公民館を拠点として、サイエンスカフェの開催、地域の小学校での天体観望会、フィールドワークなど、地域の活性化、地域課題への取組を進めてきた。神戸大学サイエンスショップはこれらの活動に対して、大学のもつ専門性を活かした助言、研究者コミュニティとのインターフェイス、地域行事への学生・教員の参画などの協力を行ってきた。平成 22 年度にはこの活動の成果を受けて、淡路島全体を視野に入れた「環境フォーラム in 淡路島～地域の豊かさを実感するには」が、市民を中心として専門家や自治体の助言も受けて開催された。これを契機として、それまでの取組を発展・展開させる形で「国生みの里プロジェクト」が発足した。このプロジェクトは、南あわじ市の市民が、同地域に伝承される「国生み神話」、諭鶴羽山系や周辺海域の豊かな自然とその恵みなど、自然、歴史・文化的価値を再評価し、それらを活かして地域の持続可能な発展のビジョンを描き実現することを目指す取組であり、市民を中心として、自治体、教育関係者、専門機関など、市内外の幅広い関係者が参加している。

人間発達環境学研究科では、ESD (Education for Sustainable Development : 持続可能な開発のための教育) の地域社会における展開と実践研究、高等教育における教育プログラムの開発と実装に取組んでいる。そこでは、市民自身が地域の課題を認識した上で専門家の支援のもとで持続可能なコミュニティのあり方を考え、その実現に向けた実践に踏み出すことを目指している。本事業は南あわじ市をフィールドとして市民の内発的取組を支援する形で ESD を展開するもので、地域社会における ESD 展開のモデル構築・実践研究としての意味を持つ。さらにこの取組は、神戸大学における ESD プログラムのフィールドの一つとしても位置付けられ、学生が事業参画を通じて地域社会の持続可能な発展のあり方を実践的に学んでゆく。

### 2. 平成 23 年度の活動

平成 23 年度の主な活動について以下にまとめる (平成 24 年 3 月初旬時点)。

#### (1) 歴史資源を活かした地域活性化の取組への協力

平成 24 年は古事記編纂から 1300 年の節にあたりとされ、これを契機として、南あわじ市において「国生み神話」ゆかりの地などの歴史資源を活かした地域活性化の取組が発案され、「歴史のまちづくり実行委員会」が発足し、取組が進められた。その主な活動である地域の歴史資源に関するマップ作成に人間発達環境学研究科サイエンスショップおよび人文学研究科地域連携センターの教員が参加・協力した。これに関連して、6 月に阿万地区、7 月に沼島および榎列地区の視察調査を行ったほか、実行委員会に参加し助言などを行った。

現在、榎列地区の歴史マップ作成作業が最終段階を迎えており、3月には榎列公民館で取り組みを紹介する講演会が開催された。また、阿万地区では、人文学研究科地域連携センター教員による歴史を通じた地域活性化に関する事例紹介を含む懇談会が開催され、50名を超える市民の参加があった。



阿万地区の景観・歴史資源の例



「歴史のまちづくり実行委員会」会合

## (2) 「くましろふれあいシカ祭り」への参加・協力

「くましろふれあい広場」では、地域課題である野生のシカによる農作物食害・森林植生への被害などに関してサイエンスカフェ等を通じて理解を深め、専門家の助言を受け対策に取り組んだ



「くましろふれあいシカ祭り」への学生・教員の参加・協力

社家地区では被害軽減に大きな成果を収めた。シカ対策の一環として、個体数を生態系に適切なレベルに保つためには、駆除が必要であることも認識された。これを受けて、野生生物の慰霊の行事が行われることとなり、地域住民の交流、親睦を兼ねた「くましろふれあいシカ祭り」として、平成23年7月に上田八幡神社で開催された。このイベントには、授業科目「ESD演習Ⅰ」履修者を含む学部学生・大学院生7名と、人間発達環境学研究科の教員2名が参加し一部運営にも協力した。

## (3) サイエンスカフェの開催支援

この他、「くましろふれあい広場」との協議を経て、神代公民館における下記のサイエンスカフェ（サイエンスカフェくましろ）の開催を支援した。

- 「宇宙の話題からー太陽と地球」（平成23年8月）
- 「七代目が語る 二宮金次郎 村おこしの秘訣」（平成23年12月）
- 「放射線のはなし」（平成24年3月）

# 兵庫県喘息死ゼロ作戦 2011

医学研究科内科学講座呼吸器内科学分野  
准教授 西村 善博

## はじめに

2006年度に厚生労働省が「喘息ゼロ作戦」を提案したことを受け、2010年7月に兵庫県全体として質の高い喘息治療を目指し、「兵庫県喘息死ゼロ作戦」が設立された<sup>1)</sup>。兵庫県の喘息死は、本邦の喘息死の状況と類似しており、その特徴は90%近くが60歳以上の高齢者で占められる点と、喘息死亡率には大きな地域間格差が認められることの二点である。地域間ごとでの高齢者人口割合や吸入ステロイド薬の普及率の差が原因として考えられる。各地域に相応しい対策が必要であるとの判断から、2次医療圏ごとに世話人を決め、兵庫県、県医師会、県薬剤師会、県病院薬剤師会と連携した活動を開始した。

## 神戸市薬剤師対象吸入指導研修会

喘息死の減少のためには吸入ステロイド薬の普及が不可欠であるが<sup>2)</sup>、吸入療法の問題点として、内服薬と比較しアドヒアランスの低さが指摘されている。神戸地区では、世話人の一人の深堀隆医師が中心となり、神戸市の区単位で2011年に計5回の薬剤師を対象とした研修会を行った。喘息病態説明と吸入療法の重要性を講義形式で説明するとともに、吸入デバイスの操作を実際に行い吸入指導の統一を図った。

吸入療法研修会実施時に、吸入療法の実態を明らかにする目的で、研修会終了後アンケート調査を行った。合計300名の参加者の内、175名(58.3%)より回答が得られた。ほぼ毎日、吸入薬の応需のある薬局は38%に昇ったが、ほぼ毎日、吸入指導を行っている薬局は10%のみであった。また、薬局内での吸入指導方法を統一している薬局は32%であり、個々の薬剤師によって指導内容が異なることが明らかになった。また、デバイスによる吸入指導経験の有無の差が明らかとなった。

## 吸入指導の病薬連携

アンケート結果を踏まえ、薬剤師を中心とした質の高い吸入指導の均てん化が必要と考えられた。主治医と薬剤師を中心とした吸入指導実施者間での吸入指導依頼箋・吸入評価表を用いた吸入指導の情報交換システムを神戸大学附属病院、神戸市立医療センター中央市民病院、および神戸市立医療センター西市民病院の3病院とその近隣の調剤薬局間で運用を開始した(図1)。

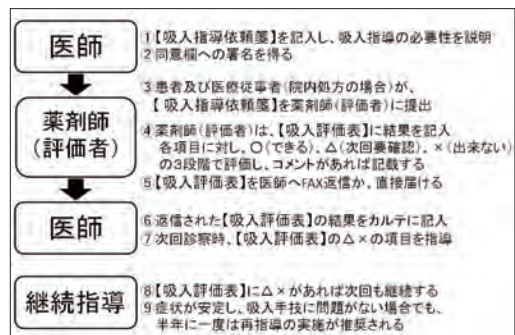


図1. 吸入指導依頼箋・吸入評価表の実施フロー

- ①吸入薬の処方を行った医師は、患者に吸入指導の必要性を説明し、同意を得た後、吸入指導依頼箋(図2)に、吸入薬の種類、吸入回数、重点的な指導内容等を記載する。
- ②患者は処方箋とともに吸入指導依頼箋を吸入指導実施者に手渡す。
- ③吸入指導実施者は吸入評価表に従って、吸入指導を行い、各項目について3段階評価し、評価表(図3)に記載、主治医に返信する。
- ④主治医は吸入評価表を基に、次回診察時に吸入手技で未熟であった項目について重点的に指導を追加する。

図2. 吸入指導依頼箋

図3. 吸入評価表



以上の医薬連携を繰り返すことで、吸入手技の上達をサポートするシステムである。本システムの導入により、喘息のコントロールが改善したかについては今後検討する必要があるが、患者の吸入手技に対する意識向上に寄与しており、また、同一評価表を用いることで、均てん化された吸入指導が可能となった。今後、本システムの適応範囲を兵庫県全体に拡げ、吸入指導の向上、均一化を目指したいと考えている。

## 吸入指導方法の改善

前述のアンケートで、吸入指導の方法について併せて調査したところ、口頭やパンフレット（吸入説明書）による指導が59%を占め、ビデオや薬剤師が実演指導を行っている薬局は30%未満であった。喘息死ゼロ作戦が対象としている高齢者では、口頭や説明書による指導では十分な理解が得られないことは自明である。そこで兵庫県喘息死ゼロ作戦では、本活動のホームページ（図4）（<http://www.med.kobe-u.ac.jp/asthma/index.html>）内にデバイスごとの吸入手技動画を掲載した。動画はiPadなどのタブレット型コンピュータからも閲覧可能であり、薬局の店頭や患者のベッドサイドでの吸入指導に役立つものと考えられる。



図4. 兵庫県喘息死ゼロ作戦ホームページ

## 2次医療圏の活動状況

神戸市地区以外にも、同様の薬剤師向け、あるいは非専門医向けの吸入指導講習会や吸入実態アンケート調査は各地域で実施されている。淡路地区では地域訪問看護ステーション連絡協議会における講習会も開催し、看護師や介護士に対する吸入指導も開始した。

阪神北地区では患者の喘息コントロールの状態把握のため、喘息手帳を作成するプロジェクトが進行中で、喘息死の実態調査にも役立てたいと考えている。

東播磨地区では、明石市立夜間休日応急診療所に患者教育用の資料を作成し、救急受診した喘息患者に配布している。

中播磨地区では、姫路市休日・夜間急病センターで、喘息発作で受診した患者に吸入ステロイド治療の必要性を説明し、吸入ステロイドの処方（1-2日分）を実施している。さらに、今後は救急受診した患者の動向調査を企画しており、救急からかかりつけ医への架け橋となるよう期待している。

## おわりに

兵庫県喘息死ゼロ作戦は、各地区の医師会や薬剤師会の協力により兵庫県全体に拡がりつつある。しかし、究極の目標である「喘息死ゼロ」には、医師や薬剤師、看護師のみならず、すべての医療関係者、介護者、行政機関を含めた包括的な医療体制の確立が必要である。喘息死ゼロに繋がる質の高い喘息診療を目標とした輪が更に広がるよう今後も情報発信を続けていきたい。

## 参考文献

- 1) 西村善博, 小林和幸, 片山覚: 兵庫県喘息死ゼロ作戦. 兵庫県医師会医学雑誌 2011;53(2): 51-56.
- 2) 社団法人日本アレルギー学会 喘息ガイドライン専門部会: 喘息予防・管理ガイドライン 2009. 協和企画, 東京, 2009.

## 連絡先

神戸市中央区楠町 7-5-1

神戸大学医学研究科 内科学講座 呼吸器内科学分野 准教授 西村善博

TEL: 078-382-5846 FAX: 078-382-5859

Email: nishiy@med.kobe-u.ac.jp

# 神戸市と連携した神戸空港宇宙往還機導入計画

システム情報学研究科  
教授 賀谷 信幸

## 事業の概要

ポートアイランド統合研究拠点のプロジェクトとして、神戸宇宙開発研究プロジェクトが採択され、ポートアイランド中心に新しい宇宙科学技術の研究が開始された。日本での宇宙研究は関東が中心で、関西では大きな宇宙企業があるにもかかわらず、非常に研究者の数も限られている。近年、東大阪をはじめ関西でも宇宙の取組みで成果が上がり始めており、企業も巻き込んだ相乗効果で、神戸の地で宇宙研究を発展させることが重要である。海外に開けた神戸で、アメリカ NASA やヨーロッパ ESA など海外の研究者・研究機関と連携し、東京とは異なる形での宇宙研究を展開することが、これからの日本での宇宙開発に大きな刺激になるものと考えられる。またポートアイランド統合研究拠点は、理化学研究所の京速コンピュータ「京」や神戸空港の隣接地であることから、宇宙シミュレーションとの連携や宇宙往還機による無重力実験を推進し、神戸ポートアイランドを真の宇宙研究拠点を目指す。今回の取組は、神戸市と密接な連携を元に、地元企業を巻き込んで宇宙往還機の導入を推進することが目的である。この宇宙往還機の導入が成功した際には、大学での宇宙研究はもとより地元地域産業の活性化に大いに貢献できるものと確信する。

一昨年（平成22年）11月にアメリカのXCOR社と協議して、日本でのSpaceport（宇宙港）の実現に向けて連携することを決めた。この決定を受け、神戸市産業振興局が神戸市側としての体制を整え始めた。そのキックオフとして、6月12日のSpaceportシンポジウムを神戸大学が実施し、6月13日の神戸空港をはじめとする日本各地の空港関係者による検討会を神戸市が開催した。この検討会の結果を踏まえ、今後の日本へのXCOR社Lynx宇宙往還機の導入を進めている。

Spaceportシンポジウムでは、添付のポスターおよびプログラムに示すようにXCOR社の社長と副社長によるLynx宇宙往還機の開発現状、内閣官房宇宙開発戦略本部事務局長京都大学山川教授による日本の宇宙政策をはじめ、日本で往還機を開発しているJAXA/ISAS稲谷教授、超小型衛星プロジェクトの東京大学中須賀教授からのLynx宇宙往還機への要望、民間利用から三菱重工落合氏による無重力環境の利活用方法の提案、またARTEMIS Innovation Management Solutions LLCの社長・John Mankins氏により将来のエネルギー源である宇宙太陽発電衛星の構築のための利用が発表された。シンポジウムの様子を添付の写真に示すように、72名の一般の参加者と神戸大学教員・学生の参加があった。

シンポジウムの次の日に開催された空港関係者による検討会では、宇宙港を検討している北海道と筑波の各空港関係者が参加し、XCOR社と宇宙空港の設置条件や候補空港の条件の吟味を行った。議論の後、神戸空港を視察し、空港における風のデータや空域管制について検討した。

シンポジウム後、以下について神戸市と地元地域企業との連携を推し進めている。

1. 神戸市と協力し、宇宙往還機の導入のための法的な課題の解決を目指す。
  - 国土交通省ならびに航空交通管制と折衝
2. 地元地域企業との連携を図り、宇宙往還機の利活用を検討する。
  - 新素材開発のための無重力環境の利活用
3. 宇宙港関連学会との連携を図り、宇宙往還機の利活用を検討する。
  - 宇宙往還機からの打ち上げによる超小型衛星の活用
4. 神戸大学内の宇宙関連研究と連携し、宇宙往還機を用いたプロジェクトを実施する。
  - 宇宙往還機を用いた宇宙太陽発電衛星の実現

特に、神戸大学ではXCOR社 Lynx 宇宙往還機を大学製超小型衛星の打ち上げに利用するために、Lynx への超小型衛星搭載方法や高度 100 km での分離方法の技術的な開発を進める。



宇宙に観光旅行！

リンクス宇宙船のエクスコア社の社長がアメリカから来日。日本にスペースポートを実現して、宇宙旅行に出発！！



スペースポートアメリカの構想  
スペースポートアメリカ提供

---

スペースポート・シンポジウム



日時：平成23年6月12日(日)午後1時  
場所：神戸大学百年記念館(六甲ホール)  
主催：神戸大学宇宙開発研究プロジェクト

エクスコア社提供

---

**主なプログラム** (通訳あり)

エクスコア社・社長	Jeff Greason
副社長	Andrew Nelson
アティミス社・社長	John Mankins
内閣官庁宇宙開発戦略本部事務局長	山川宏
東京大学・教授	中須賀真一
JAXA・教授	稲谷芳文

申込先：神戸大学・賀谷 (参加費：無料)  
kaya@kobe-u.ac.jpまでメールで

## スペースポート・シンポジウム

平成23年6月12日(日) 13:00-17:20  
神戸大学百年記念館 六甲ホール  
神戸大学宇宙開発研究プロジェクト主催

### プログラム

- |       |   |  |
|-------|---|--|
| 13:00 | 日本の宇宙政策の現状<br>内閣官庁宇宙開発戦略本部事務局長・京都大学教授 山川宏   |  |
| 13:30 | Spaceport Operational Requirements and Necessary Regulatory Framework<br>エクスコア社・社長 Jeff Greason |  |
| 14:20 | Suborbital Launch Markets and the XCOR Lynx Spacecraft<br>エクスコア社・副社長 Andrew Nelson<br>(10分間 休憩) |  |
| 15:20 | 日本の宇宙船の開発<br>宇宙科学研究所・教授 稲谷芳文  |  |
| 15:50 | 超小型衛星からリンクス宇宙船への期待<br>東京大学・教授 中須賀真一   |  |
| 16:20 | μG実験手段としてのガバオーディオ列ライトへの期待<br>三菱重工株式会社・主席チーム統括 落合俊昌  |  |
| 16:50 | 宇宙太陽発電衛星実現のためのリンクス宇宙船への期待<br>アティミス・イノベーション社・社長 John Mankins                                     |  |

## 神戸大学都市安全研究センター発

# “みんなで考えよう 安全・安心で快適なまちづくり”

自然科学系先端融合研究環 都市安全研究センター  
准教授 河井 克之

平成23年度の都市安全研究センターのオープンセンター 神戸大学都市安全研究センター発 “みんなで考えよう 安全・安心で快適なまちづくり” を、10月29日（土）11:00～17:00に神戸市役所との共催で神戸ハーバーランドにあるスペースシアターにて開催した。来訪者は約330名であった。今年で11回目を迎えるが、ここ数年は同じハーバーランドでもデュオドームで開催してきたため、会場設置も慣れず、人が集まるか懸念されたが、過去最高の参加者数であった。

まず、都市安全研究センター長の田中泰雄先生から開催の挨拶がありオープンセンターの趣旨や都市安全研究センターについて説明がなされた。

引き続き、神戸市都市計画総局による耐震に関する児童画の表彰式が行われた。当日は入賞作品も展示されており、受賞された三人の中学生が出席し表彰状が授与された。

その後、ステージ上では神戸市消防局のボランティアグループ「チームTEC安2」による“救命のリレー、第1走者はあなたです～AEDと心肺蘇生法を体験しよう～”と題したミニ講習会が行われた。泰地英雄代表の丁寧な説明、みなさんの軽妙な寸劇風の実演は、会場の笑いを誘いながら、観客を納得させるものだった。

また、午後からは神戸市都市計画総局耐震化促進室主査の重松裕幸氏による“地震から家族を守るために-すまいの耐震化-”と題するミニ講演会ならびに都市安全研究センター教授の飯塚敦先生による“東日本大震災、津波による地盤汚染調査”と題するミニ教室を開催した。



図-1 オープンセンターの様子



図-2 挨拶中の田中先生



図-3 児童画表彰式



図-4 心肺蘇生法実演



図-5 講演中の重松氏



図-6 講演中の飯塚先生

並行して、フロアでは13ブースで様々な実演・体験コーナーが設けられ、神戸市・神戸市すまいの安心支援センターや消防局の皆さん、教員、学生によるデモや解説が行われた。

来訪者にはアンケート調査を行ったが、ほとんどの来訪者は、付近にお住まいの方で偶然通りがかった方たちであった。しかしながら、立ち止り、興味を持って話を聞いていく方が多くみられた。

体験型イベントでは子供からお年寄りまで多くの方が興味を持って参加し、ミニ教室では観客からの熱心な質問があるなど、都市安全研究センターの存在や地域社会に根ざした研究機関を目指す姿勢、また神戸市役所が精力的に行なっている耐震化キャンペーンなど安全安心に係わる様々な活動について少なからず理解していただけたのではないかと思う次第である。



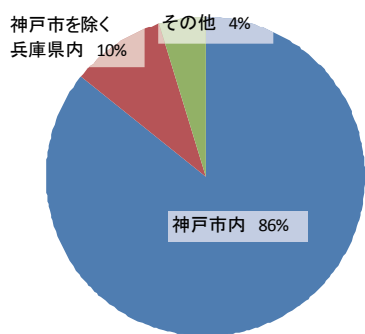
図-7 パネル展示①



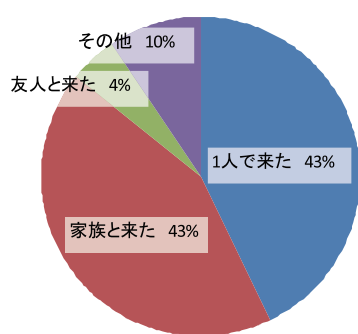
図-8 パネル展示②



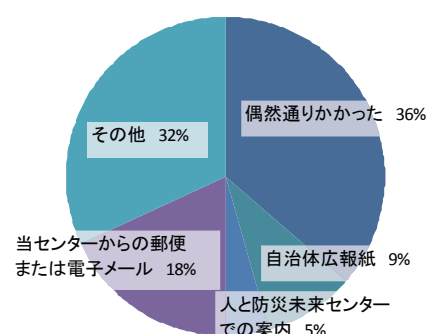
図-9 パネル展示③



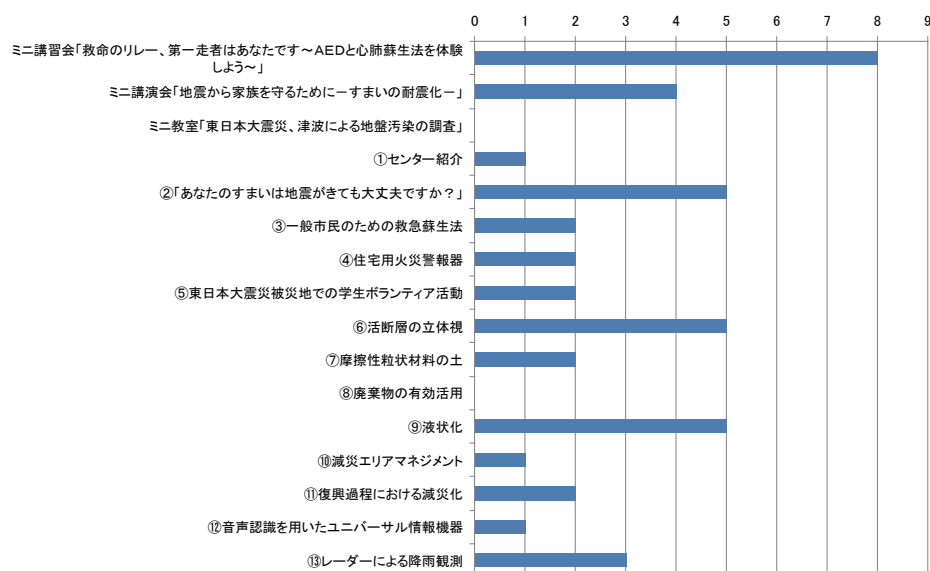
(a) どちらにお住まいですか



(b) どなたと一緒に来ましたか



(c) 何を見て知りましたか



(d) オープンセンターに来て印象に残ったもの

図-10 アンケート結果

# ESD ボランティア育成プログラム拡張支援事業

## 2011年度 ESD ボランティア育成プログラム推進ネット「ぼらぼん」

人間発達環境学研究所 ヒューマン・コミュニティ創成研究センター  
ボランティア社会・学習支援部門 教授 松岡広路・助教 高尾千秋

### 2011年度の「ぼらぼん」

事業開始から5年目を迎えた。2007年の事業開始時に入学した学生が多数卒業し、メンバー構成としては変化した。本学教員3名、他大学教員3名、本学大学生42名、本学院生3名、他大学生20名、高校生1名、社会人16名の88名である。卒業後も継続活動する社会人が増えた。

本年度は、東日本大震災への対応など、活動や運営にも変化が生じた。年間の事業企画を検討する合宿研修が3月の震災直後であり、ここから震災への対応が議論され、支援活動が組み込まれていった。

### 邑久光明園との繋がり

ハンセン病療養所邑久光明園でのワークキャンプ（以下「WC」と略す）を6月・8月・11月に計画通り3回実施した。園の将来構想と連携した「集いの広場づくり」を進めるために、WCを年間3回の実施として2年目となった。8月のWCでは、連携している山陽女子の中学部から教員・生徒が参加した。また地元高校からも3名の参加があった。11月のWCでは、初めて園の職員3名がボランティアとして参加していただいた。

ワークの内容について、当初は我々の計画を自治会長と調整し実施してきたが、今年度は事前の下見打合せの段階から園・自治会からの要望



↑夏祭りに来園した子ども達に通路壁に貼る絵を書いてもらっている。

が出るようになった。また、ワークキャンプとは別日程で行われる夏祭りにおいても、来園する子ども向けのプログラムの運営を担った。そして、各回のWCでは自治会の役員や園長・事務部長との会食等懇談の機会が設けられるようになった。「ぼらぼん」に対する園・自治会の期待が現れてきている。

入居者との触れ合いも着実に広がってきている。男子の浴場では昨年来入居者の方と話をする機会を得ているが、8月には女子浴場でも入居者の方と接する機会を得た。「ぼらぼん」が来ていることを園内放送など自治会から周知していただいていることもあるが、園内で入居者の方々との出会いでは、「ご苦労さま」等と声をかけていただいたり、下見で訪問した際も顔を覚えていてくれて話が出来たなど、会話の機会が着実に増えてきている。8月WCでは、「便利屋」（入居者個々のニーズによる活動）の活動を提案したところ数件の希望が出され、作業を行った。

交流の場すっきり 邑久光明園 関西の学生らが草刈りや竹林間伐

国立ハンセン病療養所・邑久光明園（瀬戸内市邑久町光明）で18日、関西の学生ら約300人が8回目のワークキャンプを行い、交流の場となる「集いの広場」の予定地で、草刈りなどのボランティア作業をした。

参加者は火葬場跡のび塚山近くで、昨年12月に整地した後、生い茂った草を刈ったり竹林を間伐、海岸の清掃もした。今回は9月6日～12日に予定する夏のワークキャンプのスタッフ育成も兼ねた。

「集いの広場」予定地で竹林の間伐などに取り組む学生ら

「関係と連携協定を結ぶ神戸大大学院人間発達環境学研究所（神戸市）が取り組む「ESDボランティアぼらぼん」の一環、4月に発表された関係の将来構想に「交流場所の充実」が盛り込まれている。

←山陽新聞 WebNews より  
[http://www.sanyo.oni.co.jp/news\\_s/news/d/2011](http://www.sanyo.oni.co.jp/news_s/news/d/2011)

邑久光明園ワークキャンプ  
山陽女子中学生が初参加  
大学生に交じり草刈り

作業に汗を流す山陽女子中の生徒や大学生ら

↑山陽新聞掲載記事



↑便利屋として居室庭の草刈り作業を行った。



6月17日～19日(2泊3日)恒例の海岸清掃 8月6日～12日(6泊7日)終了日自治会にて 11月25日～27日(2泊3日)広場の古い小屋の撤去

園の将来構想は、地元瀬戸内市が事務局を担っている「ハンセン病療養所の将来構想をすすめる会・岡山」によって平成23年3月に取りまとめられた。「ぼらばん」の提案企画がその1年前であったことから、現在新たな企画案の検討を進めている。

### 東日本大震災支援とワークキャンプ方式

「東日本大震災にどう向き合うか？」3月11日以降、ボランティア活動への対応が錯そうする中で、「ぼらばん」活動そのものも足踏み状態になってしまった。

4月に入り発達科学部のOGからの要請を受け、支援物品を集める活動から支援活動がスタートした。

被災地でのボランティア活動では、自己完結するボランティアが求められていた。邑久光明園でのWCの経験を生かし、ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの企画をベースしたに5月連休の被災地支援ボランティア活動(大船渡市支援WC)では、中心メンバーとして参画することになった。現地のライフラインが十分復旧できていない時期として、また、現地のボランティアセンターが十分に機能していない段階では、ボランティアの活動拠点(宿泊場所など)の確保や避難所での炊き出しや被災者のニーズに応える活動など、ワークキャンプ方式でのボランティア活動は有効な手法であった。邑久光明園での宿泊を伴った集団でのボランティアの経験から、組織運営や自主的に活動できる「ぼらばん」メンバーのスキルが1週間の支援活動の成果につながった。

5月のWC実施後も支援活動は継続し広がりを見せた。支援活動は、組織にとらわれず、すべての人が関わる必要性から、その後の活動の主体は、「震災に寄りそう集い」と呼ばれるプラットフォームに移ることになったが、「ぼらばん」のメンバーも中心的に活動し継続されている。

### まとめ

東日本大震災により、改めてボランティアを検討する1年間であった。「ぼらばん」で中心的に活動するメンバーでは、邑久光明園での活動と共に震災ボランティア活動へも参画している。活動に対する負荷が高いほど、ボランティアとしての意欲が高まるように感じ取られた。

災害の復旧段階、復興段階やそれぞれの時期や現場によりボランティアに求められる活動も様々である。ボランティアも個々の意識や思いもそれぞれである。しかし、与えられた活動をこなすボランティアでなく、現場に即して自ら動けるボランティアが求められている。トップダウンでなされる復興計画ではなく、被災者に寄りそった、ボトムアップでの復興が望まれるところであるが、そのためにもより多くのボランティアとボランティア活動が求められることになる。



## 発達障がい児の早期療育としての

## フラッグフットボール教室

神戸大学アメリカンフットボール部 Ravens マネージャー  
国際文化学部 2 回生 藤江麻希

- 日時 2011年5月21日（土曜日）
- 場所 王子スタジアム
- 時間 午前9時～午前11時半
- 参加者 Ravens 現役部員・OB、新庄フットボールクラブの子供達・指導者、  
み・らいず（発達障害者の支援をしている NPO 法人）の発達障害児・指導者

### ■企画概要

フラッグフットボールはアメフトとは違ってタックルする代わりに腰につけたフラッグを取る競技で、直接人間同士が体に触れることがないため、発達障害児にとって比較的安易にチャレンジできるスポーツである。また、あいまいな事を理解するのが苦手としていても役割分担がはっきりしているため、混乱することは少なく分かりやすいスポーツでもある。そこで、Ravens の現役部員が指導者となり、地域の子供達、障害児達にスポーツで汗を流し、自信と感動を与えることができたかと企画。

### ■プログラム

- ・開会宣言
- ・フラッグのつけ方指導
- ・実技①～⑦

#### ① ストレッチを中心とした準備運動

#### ② しっぽ取りゲーム

赤と青のフラッグをつけている者同士でチームを作り、自分と違う色のフラッグを取り、取ったフラッグ数を競うゲーム。チーム戦。

#### ③ ランゲーム

ディフェンスが Ravens の選手、オフェンスが子供たちで、ボールを運ぶゲーム。オフェンスがゴールするまでにディフェンスにフラッグを取られたら負け。





- ④ C（センター）とQB（クォーターバック）によるスナップ練習  
 子供たちはCとQBを交代で体験。「セットダウンハット」の掛け声で練習。  
 （写真の手前の子がC役、後ろの子がQB役）  
 また、全員を2チームに分けて、ボールを後ろの人にどんどん渡していく  
 スナップリレーも行った。



- ⑤ キャッチボールの練習  
 ボールの持ち方から  
 投げ方まで Ravens 部員が  
 指導。



- ⑥ ハンドオフ  
 「アイーン」のポーズで走りながら、  
 ボールを受け取る練習

- ⑦ ジャンケン宝運びゲーム  
 子供達を2手に分けて、ボールを持っている子同士がジャンケン  
 をする。負けたら自分のチームにボールを持って帰り、次の人に渡し、  
 次の人は先ほどジャンケンに勝った者とジャンケンをする。  
 相手の陣地まで入ることが出来たら勝ち。



#### 【参加していただいた保護者様と子供達の感想】

- ・「親子共々、存分に楽しませていただきました。」
- ・「広い競技場で走り回れて、とても気持ち良かった。」
- ・「神戸大学 Ravens のお兄さんと一緒に出来たのがすごく楽しかった。」（一部のみ）

#### 【感想】

フラッグフットをしたことがあるという子も、その日初めてするという子もスポーツが苦手な子も、少し体に障害があるという子も、大人も子供も、本当に簡単なスポーツで、子供にわかりやすいゲーム化を図ることで、誰でも気軽に楽しむことができた。子供達は体を動かすという楽しさや、仲間とふれあう喜びをこの教室で存分に味わってもらえたと感じる。今後、ますますこのような機会を増やし、地域の子供達とふれあえる機会を増やせたらと考えている所存である。

## From KOBE

From KOBE 代表  
工学部4回生 山田 恭平



### ○ From KOBE とは？

From KOBE とは、神戸大学建築学科有志で結成された学生ボランティア団体です。現地ボランティア参加といった即効性のある行動をとること、そして長期的な支援を視野に入れた上で、阪神淡路大震災の記憶を今一度私たちの世代でくみとり、その経験を東北に届けること目標としています。

### ○ 主な活動内容

#### ・ 現地ボランティア (2011/4/29 ~ 5/5)

GW の長期休暇を利用し、石巻市・気仙沼市でボランティア活動に参加しました。石巻市では知り合いの伝を頼りに、東京の多数の大学が参加しているボランティア団体“Last One Mile project” に混じわり、当時救援の遅れていた雄勝半島鮎川で、瓦礫の撤去やまだ使える家具などの搬出を行いました。地元の方々から津波の体験談を直接聞き、言葉を失ったことを記憶しています。また研究室の准教授の知人が被災されていたため、気仙沼市ではその方の工場で、まだ使用できる機材の搬出などを行いました。まだ使えない道路があったり、水をろくに飲めない状況の中での活動は、心身ともに疲弊しましたが、この経験を神戸に帰ってできるだけ多くの人に伝えようと決心しました。



#### ・ 学生フォーラム (2011 年度前期)

東北でのボランティア活動を経験した私たちは、「神戸から」「神戸で」何が出来るのかを話し合い、「学生フォーラム～今、神戸にできること～」と題した自主公演会を開きました。その内容は、阪神淡路大震災を学習し直し、実践的な場での多岐に渡る予備知識を高めるため、阪神淡路大震災で活躍された、そして今回の震災に対しても積極的に取り組まれている様々な学部の教授をゲストレクチャーとして招き、今後の活動のヒントを得ようと言うものです。ここで汲み取ったものを具体的な活動としてとどけられるよう、学生が考え提案していけるような環境を準備しました。2011 年度前期中に全4回開講し、教授・学生・一般参加の方々から多くの意見が飛び交う催しとなりました。

## ・学生フォーラム詳細

5/11 第一回学生フォーラム  
ゲスト：田中 保三（まちコミ）

第一回はボランティア活動と現地の状況についての知識を深めるため、現地ボランティアに参加した学生による報告会と、阪神淡路大震災時から活躍されている、長田区「まちコミ」顧問の田中さんの講演を実施しました。田中さんの熱い言葉に、多くの学生が感銘した会となりました。



6/1 第二回学生フォーラム  
ゲスト：奥村 弘（文学部）

第二回目に教鞭を振って下さった奥村教授から、「記憶の継承」をすることが災害に対する地域の力を高めるという視点で話をいただき、阪神淡路大震災当時の大学と地域の関わりの現実を聞くことができました。現在薄れている阪神淡路大震災の記憶を継承していくことが、「今、神戸にできること」の一つであると改めて実感しました。



6/16 第三回フォーラム  
ゲスト：松岡 広路（発達科学部）

第三回は発達科学部の松岡先生に、ご自身の専門であるESD（持続可能な開発のための教育）と震災を絡めた講義をしていただきました。また松岡先生自身も今回の震災に対しボランティアバスを出して積極的に支援活動を行っていて、最後の座談会では、今後どのような活動が効果的かといった議論をすることができました。



7/13 第四回フォーラム  
ゲスト：塩崎 賢明（工学部）

最終回となる第四回は、私たち建築学科の教授にして、今回の震災で大船渡市の復興計画策定委員会の委員長をされている塩崎先生から、阪神淡路大震災と今回の震災を様々な点で照らし合わせていただきました。阪神淡路大震災から16年たった神戸の街が抱える問題点を今一度確認し、今後の展望をうかがえる会となりました。



## ○その後の発展

From KOBE での現地ボランティア・学生フォーラム・その他イベントを通し、早くに多くの情報と繋がりを得ることができ、それを神戸大学建築学科槻橋研究室として様々な形で昇華していきました。

### ・記憶の街 WS

震災以前の街の様子を 1/500 の模型を用いて再現し、住民の方々と模型を囲みながら失われゆく街の「記憶」の保存、そして次の街を考えるきっかけづくりを生み出すワークショップを、2011年夏に気仙沼市各地で開きました。



### ・Time line mapping project

全国からクリエイターが神戸に集まり、東北の震災に対し CRIATIVE な視点でどのように支援できるのかを、阪神淡路大震災の記録を時間軸にまとめることによりヒントを得るといったプロジェクトです。私たちは建築部門で活動に参加しました。



# 自給自足への道～自分で作った米で被災地支援～

ユース六篠 代表  
農学部2回生 長井 拓馬

## 活動目的

農業農村フィールド演習の演習地域である篠山市福住地区に継続的に通うことにより、地域課題の解決を試みる

地域課題とは

- ①「過疎化による耕作放棄地の増加」と②「高齢化による担い手不足」

## 活動計画

学生が定期的に通い、問題点①の耕作放棄地を利用・維持管理する

→その土地で収穫されたものを大地震による被害を受けた東北への支援へと使用する。

## 計画の変更・実際の活動内容

変更点は活動開始時期が遅かったため、自分たちで管理する放棄地を準備することができなかったことです。

そのため、もう一つの問題点である②の「高齢化による担い手不足」に着目し、農村ボランティアを行うこととしました。

対象：農業を仕事としてやっている人たちのみならず、自給的に行って言う方々も対象としました。

作業内容：農作業 / 地域イベントへの参加

最初は前年度にお世話になっていた農家さんのところへ行く形を取りながら、徐々に他の方の所へと広げて行くこととしました。また作業内容も農体験のイベントなどでできる「田植え」や「稲刈り」のようなものだけでなく、「草刈り」「肥料散布」などの日常やらなくてはならない仕事も手伝わせて頂くこととしました。また、自給的に農業をやっておられる方々の大半は機械化を行っておらず、また年を召された方も多いため、そのような方の所へも行けるようにと考えていました。

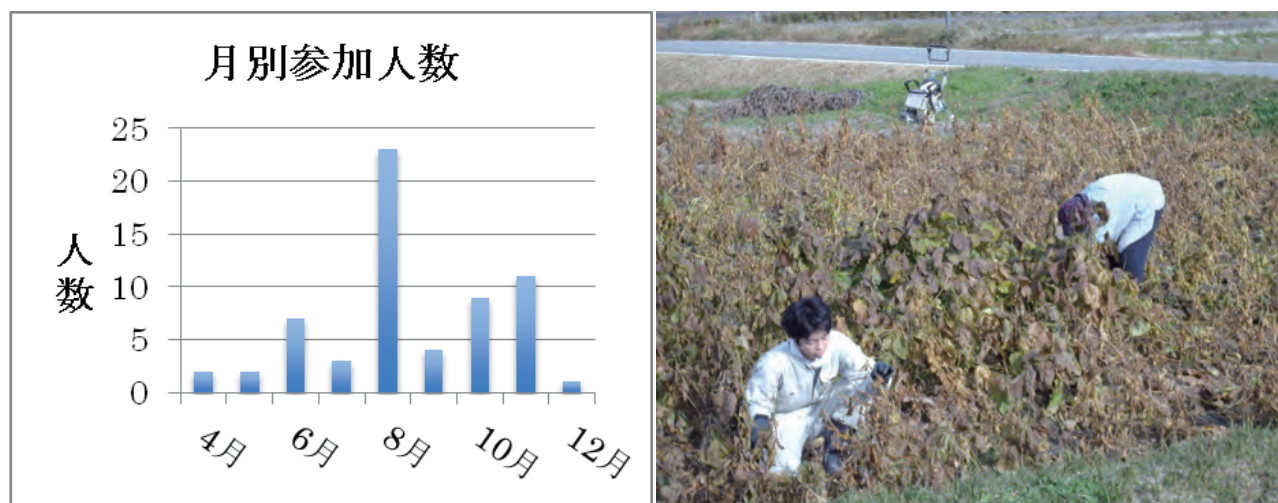
## 活動実績

### ①農業ボランティア

月別の参加人数は下記のグラフのようになりました。(のべ62人)

「黒豆の植え付け」(6月)や長期休暇(8月)、「米・黒豆の収穫」(10・11月)は

活動できたが「テスト前」(7月)や「作業日程があわない」(12月)などの理由で活動できないこともありました。頻度としては月に1回～週に1回など様々でした。



## ②地域イベントへの参加

「福住夏祭り」や「藤之木集落餅つき」などに参加させていただきました。

## 活動実績②：東北支援

1回目：篠山市社会福祉協議会第8次ボランティアバスで宮城県南三陸町へ米を約100kgとどけました。

2回目：12月に正月用の黒大豆を南三陸町漁業協同組合へ約10kg送らせてもらいました。

①では昨年度の実習でお世話になった集落の他の人からも声をかけて頂いたこと、②では黒豆をぜひ欲しいと言ってくれた東北の方に送ることができたことが良かったのではないかと考えています。

## 課題

①活動地域と駅が遠い ②参加学生の人数にムラが出る ③農作業の需要と学生の来る時とが合わない ④自分たちのしていることが本当に役に立っているのかわからない ⑤主に行けたのは知り合いの農家さんが多い⇒もっと広く活動するにはどうすれば良いか などが挙げられると思います。

これらを踏まえて改善できるようにこれからも活動をして行きたいと考えております。

## 平成23年度 学内公募事業募集要項

### 平成23年度「地域連携事業」募集要項

#### 1. 目的

各部局等において計画されている地域連携事業に要する経費の一部を支援することにより、本学の地域連携事業の一層の推進・発展を図ることを目的とします。

#### 2. 対象テーマ

地域活性化について、自治体・地域団体等と連携した活動

#### 3. 対象取組事業

部局の支援のもとに下記の①～④のいずれかに該当する事業を対象とし、④に該当すると考えられる事業については審査の際に考慮を加えます。

- ① 協定締結に基づく、もしくは協定締結につながる取組事業
  - ② 自治体等や地域団体と協同で行う萌芽的事业
  - ③ 複数部局による取組事業
  - ④ 東北関東大震災被災者への復興支援を目的として、県内自治体又はNPO等諸団体と協力して行う事業
- 注) ただし、人文学研究科、保健学研究科及び農学研究科の各地域連携センターとの共同事業及び補助金又は競争的資金等と重複利用する地域連携事業は除きます。  
昨年度までの採択例については研究推進課までお問い合わせ下さい。

#### 4. 支援額及び採択件数（予定）

支援額 1事業につき 30万～80万円  
採択件数 3～7件

#### 5. 対象

全部局及び各センター（地域連携センター及び同センター設置部局を除きます。）

#### 6. 公募期間及び結果通知

受付期間：平成23年4月4日（月）～4月28日（木）  
結果通知：平成23年5月中旬

#### 7. 提出書類

- ① 平成23年度「地域連携推進事業」申請書
  - ② 所要経費内訳書
- ※地域連携推進室ホームページより様式をダウンロードできます。

#### 8. 対象事業経費

謝金、旅費、印刷費、会議費（会場使用料、機材使用料等）、消耗品  
※光熱水費、備品費、飲食費等の経費は対象外です。

#### 9. 事業報告（採択者に義務が生じます。）

実施報告 平成23年度地域連携活動発表会（12月頃開催予定）  
※発表概要を地域連携活動報告書に掲載しますので、発表会の後、2月中旬までに作成願います。  
報告書類 実施報告書 1部  
実施経費経理報告書 1部（所定の様式により4月初旬提出）

#### 提出及び問い合わせ先

地域連携推進室 078-803-5977 担当：佐々木  
研究推進課 研究・地域交流企画係 078-803-5029・2915 担当：小泉・山野  
ホームページ： <http://www.office.kobe-u.ac.jp/crsu-chiiki/>  
e-mail： [ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp](mailto:ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp)

#### 《選考》

地域連携担当理事及び地域連携推進室長を含め8名程度で構成する審査委員会で、次の方針に基づいて選考します。

#### 審査方針

- ① 計画内容や実施方法が、活動の目的に沿って具体的活明確に設定されているか。
- ② 地域社会において活性化を図ろうとする分野が明確化され、かつ実現性の確保に適切な配慮がなされているか。
- ③ 自治体や地域住民、NPO等と協働で実施する組織的な連携を図る取組となっているか。
- ④ 地域連携の取組が大学の教育・研究に結びつく取組となっているか。
- ⑤ 経費の使用目的が妥当なものとなっているか。

## 平成 23 年度 「学生地域アクションプラン」 公募要項

### 1. 趣旨

地域を元気にする学生のような活動は、地域に歓迎され、また、期待されています。神戸大学地域連携推進室では、地域に根ざした、地域を活性化しようとする学生の活動を支援するため、「学生地域アクションプラン」を公募します。

### 2. 募集対象

学生の力を活かし、地域社会と連携して地域を活性化しようとするための活動。

ただし、特定の政治、宗教、営利等の活動を目的としないこと。

また、以上を踏まえた上で、東北地方太平洋沖地震被災者への復興支援に資すると考えられる事業については、審査の際に考慮を加えます。

### 3. 応募資格

神戸大学の学生が主体となって組織され、活動を支援する教員と共に地域活性化のための取組みを行う団体。

※ 事業責任者（申請者）は、教員とします。

### 4. 支援額及び採択件数（予定）

申請上限額は 25 万円とし、2～5 件の採択を予定しています。

### 5. 支援対象経費

① 謝金：講演会等の講師に支払う謝金等

② 旅費：講演会等の講師に支払う交通費及び宿泊費等

③ 印刷費：ポスター、チラシ、報告書の製本・印刷費等

④ 会議費：学外施設の会場使用料等

⑤ 消耗品費：文房具、製作用資材等

※ 予算配分は、申請教員に対して行いますので、同教員により執行していただきます。

### 6. 公募受付期間

平成 23 年 4 月 4 日（月）～4 月 28 日（木）

### 7. 結果通知及び事業費配分予定

平成 23 年 5 月

※ 採択、非採択に関わらず、すべての申請教員及び代表学生に結果を書面で通知します。

### 8. 提出書類

① 平成 23 年度「学生地域アクションプラン」申請書

② 団体概要（会則、構成員名簿等）

③ 活動企画書

④ 収支予算書

※ 地域連携推進室 Web ページから様式をダウンロードして下さい。

※ 書類作成にあたって不明な点があれば、別記問合せ先までご連絡ください。

### 9. 提出先

研究推進課 研究・地域交流企画係（六甲台キャンパス本部事務局棟 2 階の南東側）

### 10. 事業報告（採択者に義務が生じます）

実施報告 平成 23 年度地域連携活動発表会（12 月頃開催予定）

※ 発表概要を、地域連携推進室で発行する地域連携活動報告書（平成 24 年 3 月発行予定）に掲載しますので、発表会の後、2 月中旬までに作成願います。

報告書類 実施報告書 1 部

実施経費経理報告書 1 部（所定の様式により 4 月初旬提出）

### 問い合わせ先

地域連携推進室 Tel：078-803-5977 研究員・佐々木

研究推進課 研究・地域交流企画係 Tel：078-803-5029・2915 小泉・山野

e-mail：ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp

Web ページ URL：http://www.office.kobe-u.ac.jp/crsu-chiiki/

### 《選考について》

地域連携担当理事及び地域連携推進室長を含め、8 名程度で構成する選定委員会で、次の方針に基づき選考します。

なお、学生の自主的な活動であることを重視するため、申請者である教員名を伏せて選考します。

### 審査方針

① 計画内容や実施方法が、活動の目的に沿って具体的かつ明確に設定されているか。

② 地域社会において活性化を図ろうとする分野が明確化され、実現性があるものとなっているか。

③ 自治体や地域住民、NPO 等と協働で実施する組織的な連携を図る取り組みとなっているか。

④ 活動が、申請する団体等の構成員の地域貢献に対する意識の向上につながっているか。

⑤ 経費の使用目的が妥当なものとなっているか。

※ 申請書の電話番号等の情報は、申請団体との連絡を目的としており、これ以外には使用しません。

# 付 録





## 地域・だいがく連携通信

### —神戸大学地域連携ニュース—

神戸大学地域連携推進室  
〒657-8501  
神戸市灘区六甲台町1-1  
TEL: 078-803-5427  
FAX: 078-803-5389  
E-mail: ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp

## 篠山市・神戸大学 大学協定締結記念シンポジウムを開催



2011年7月3日、篠山市・神戸大学 大学協定記念シンポジウムが、篠山市丹南健康福祉センターで開催されました。昨年8月30日に締結された「連携協力に関する協定」を記念するものです。篠山市、神戸大学関係者だけでなく、一般市民も参加し、合わせて86名の参加者がありました。

篠山市とは、農学研究科の前身である兵庫県立農科大学が、1949年から1967年まで所在した縁の深い地域です。2007年4月には、農学研究科との間で地域連携協定を締結し、篠山フィールドステーションを拠点に、連携研究、現地実習、公開講座、フォーラムなどを開いてきました。

シンポジウムのテーマは、「篠山の「知」の創造をめざして」。連携協定を機に、神戸大学と一緒に、酒井隆明市長の提唱する「篠山の時代」を支える「知」を模索していこうと開かれました。

シンポジウムでは、農学研究科の取り組みに加え、昨年からはまった高田哲保健学研究科地域連携センター長から、「篠山市・神戸大学が連携して行う発達障害相談事業」についての報告がありました。篠山市のような規模の市では、大都市と異なり、全数調査が可能であり、就学後も支援が可能という利点があります。この事業は、今年度から兵庫県の5歳児発達相談モデル事業に選定されています。



第2部の意見交換会では、地元みたちの里まちづくり協議会や県立篠山東雲高等学校から、また神戸大学農学部生や保健学研究科院生から、それぞれの立場で、篠山で一緒に活動した体験や、さらにこれから期待することが語られました。フロアからは、特に保健学研究科の調査をめぐって質問があり、活発な意見交換がおこなわれました。

## シンポジウム「大学生が地域とともにできること」

### 学生ボランティア支援室

神戸大学瀧川記念学術交流会館で7月31日、第2回「大学生が地域とともにできること」学生支援GP終了後を考える連続シンポジウムが開かれました。第1部では、1階ホールで神戸大学と関係の深い地域との連携を進めている13団体のブース展示がおこなわれました。

第2部では、岩崎信彦名誉教授の講演とともに、神戸大学と学生の取組紹介として、「灘チャレンジ実行委員会」「中越・KOBЕ足湯隊」「学生流むらづくりプロジェクト 木の家」「まちプロジェクト実行委員会」から活動について報告がありました。続いて、藤室玲治・学生ボランティア支援室研究委員をコーディネートにより、地域や行政、大学の立場から「地域が期待する、大学と大学生の役割」をテーマにパネルディスカッションがおこなわれました。

地域活動に参加する学生は、実際に活動してみて、地域と学生といった二分法で考えるのではなく、地域の人たちは「一緒に」活動する仲間であるに関わり方に変化していった体験や、大学側に「地域と一緒に中・長期的に入っていける大人の存在」を望む、あるいは「そういう人を紹介してほしい」との意見が出されました。



#### 【参加団体】

中越・KOBЕ足湯隊  
灘百選の会  
灘チャレンジ実行委員会  
神戸大学総合ボランティアセンター障害者セクション  
神戸大学学生震災救援隊  
まちプロジェクト実行委員会  
アメリカンフットボール部 RAVENS  
PEPUP ～平和と自立のためのパートナーシップ～  
学生流むらづくりプロジェクト「木の家」  
都市×農村交流サークル「ささやまファン倶楽部」  
神戸大学大学院農学研究科地域連携センター  
神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター  
神戸大学都市安全研究センター

## 遠野ボランティアバスが走る 学生ボランティア支援室

学生ボランティア支援室では、東日本大震災発災直後からの「何かできないか」「現地で貢献できる活動はないか」との学生の声にこたえ、「遠野まごころネット」（岩手県遠野市）と連携し、学生のボランティア活動を支援するため、ボランティアバスを走らせています。

第1次は4月30日～5月6日。参加者は30人、そのうち学生は23人でした。3月末に、同室運営委員の村井雅清氏（「被災地NGO協働センター」）がアドバイスして、遠野市に「遠野まごころネット」が発足し、4月初めには宿泊施設も完成したことから、現地での活動が可能となったのです。続いて6月28日～7月5日、8月16日～23日にも、遠野を拠点に、陸前高田市、大槌町でボランティア活動がおこなわれました。

神大生の被災地ボランティアの特徴は、被災者の方々への「足湯」です。「足湯」とは、タライなどにお湯をはり、被災者の方に足をお湯につけてもらい、学生ボランティアが手をマッサージするものです。阪神・淡路大震災で、寒い避難所の中でホッとしてもらうため、始まったもので、その後、中越地震や佐用町水害などの被災地でもおこなわれています。中越・KOBЕ足湯隊の被災地での活動は、2009年度学生地域アクションプランに採択されました。「足湯」を通じて、被災された方と1対1で、心身ともに近いところで向き合おう。何気ない「つづやき」を通して、その方の心情に寄り添っていこう。阪神・淡路大震災以来の経験も引き継いで、遠野へボランティアバスは走りました。なお、今年度は、後1～2回ボランティアバスを派遣する予定です。



## 市民向けの「まちづくり地域歴史遺産活用講座」をめざして

### 人文学研究科

人文学研究科では、今年1月に兵庫県教育委員会と交わした覚書に基づき、市民を対象とした「まちづくり地域歴史遺産活用講座」の試行プログラムを県民局単位で実施しています。

地域に残る歴史遺産を次代に引き継いでいくためには、市民自身が地域の歴史文化を支える担い手になることが必要です。人文学研究科では、地域の歴史の見方や資史料の扱い方など、基礎的な知識や技術を学ぶ市民向け講座を開催し、市民の方々が、地域の歴史文化遺産の保存に関心を持ち、まちづくりに活かしていただこうとしています。そのため、試行プログラムを実施し、年齢性別を問わずさまざまな方々に講座を受けていただき、市民講座にふさわしいものを模索しています。

プログラムの中には、「災害から地域史料を守る」ワークショップも含まれています。実際に史料が水に濡れた時にどのようにすれば良いか、市民自身が家庭にある身近なもので、救急処置をとることができるよう講習もおこなわれています。

プログラムは、第1回目は昨年12月に姫路市香寺町、第2回は今年2月に朝来市生野町、第3回は4月に尼崎市、第4回は7月に三田市、9月には第5回目として神戸大学内で開かれる予定になっています。



### 【公開シンポジウム】

#### 東日本大震災からの復興に向けて —神戸にできること

阪神・淡路大震災の被災経験のある神戸大学は6月に、全学を挙げて「東日本大震災からの復興に向けた神戸大学からの提言（第一次）」をまとめ、五百旗頭真・東日本大震災復興構想会議議長に提出しました。8月3日（水）には、神戸国際会議場において、この提言を基に公開シンポジウム「東日本大震災からの復興に向けて—神戸にできること」を開催しました。

はじめに、福田秀樹・本学学長より本学の提言が報告されました。基調講演は、五百旗頭真・本学名誉教授から阪神・淡路大震災の復旧復興の経験を活かした東日本大震災復興構想会議での審議について、その後のパネルディスカッションでは、田中泰雄・神戸大学都市安全研究センター長のコーディネートにより、井上明久・東北大学総長から東北大学の被害状況と復旧復興ビジョン、室崎益輝・関西学院大学総合政策学部教授からは「自治組織、産業技術、科学技術」の3つ復興の必要性（および学生の被災地への派遣）について発言がありました。会場の参加者からも多くの質問が出され、阪神・淡路大震災を経験した被災地ならではの関心の高さがうかがわれました。



## 2011 年度学内公募事業を採択

地域連携推進室では、学内の新しい地域連携の芽を育てるため、各部局等で計画されている事業の支援をおこなっています。また、学生による地域社会を活性化しようとするための活動を支援しています。今年度は、特に東日本大震災への支援活動を応援しています。

### 地域連携事業 採択事業（教職員対象）

部局名	申請事業名
人間発達環境学研究所	南あわじ市における「国生みの里プロジェクト」への支援
医学研究所	兵庫県喘息死ゼロ作戦
システム情報学研究所	神戸市と連携した神戸空港宇宙往還機導入計画

### 学生アクションプラン 採択事業（学生対象）

団体等名	申請活動名
神戸大学アメリカンフットボール部	発達障がい児の早期療育としてのフラッグフットボール教室
From KOBE	From KOBE
ユース六篠	自給自足への道～自分で作った米で被災地支援

\* From KOBE は、「今、神戸にできること」をテーマに、震災を考える学生フォーラム。

## 活動報告（2011年4月～8月）

4月	04日	地域連携事業（教職員向）、学生アクションプラン（学生向）の公募開始（～28日）
	19日	「青野原俘虜がみた世界」展第2回学内実行委員会
	28日	灘区長、新任挨拶に来訪、学長と懇談
5月	07日	神戸市企画調整部長（大学連携支援室長）来訪
	10日	神戸大学・灘区まちづくりチャレンジ助成事業企画審査会にオブザーバー参加
	19日	篠山市・神戸大学、大学協定締結記念シンポジウム実行委員会（神戸大学）
	21日	『学生支援 GP 終了後を考える連続支援シンポジウム』第1回に参加
	31日	「青野原俘虜がみた世界」展第3回学内実行委員会
6月	02日	三木市、地域連携事業について相談のため来訪
	07日	加西市教育委員会と食資源教育研究センター訪問
7月	01日	地域連携推進室事務担当部署が連携推進課産学官連携グループに変更
	03日	篠山市、大学協定締結記念シンポジウム開催（篠山市丹南健康福祉センター）
	29日	「青野原俘虜がみた世界」展第4回学内実行委員会
	31日	『学生支援 GP 終了後を考える連続支援シンポジウム』第2回
8月	03日	公開シンポジウム「東日本大震災からの復興に向けて一神戸にできること」
	08日	「青野原俘虜がみた世界」展、交響楽団有志への説明会
	12日	神戸市企画調整部訪問

### 【お知らせ】

- ・2011年3月末に、『平成22年度神戸大学地域連携活動報告書』を発行しました。報告書は神戸大学学術成果リポジトリ Kernel で公開しておりますので、ご覧下さい。なお、報告書は在庫があります。ご希望の方は下記までご連絡ください。
- ・7月1日より、地域連携推進室の事務業務の担当部署が、研究推進部連携推進課産学官連携グループに変更になりました。今後、地域連携に関するお問い合わせ等がございましたら、下記へご連絡ください。

記

研究推進部 連携推進課 産学官連携グループ 電話：078-803-5427 FAX：078-803-5389

MAIL：ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp

### 編集後記

東日本大震災からまもなく半年をむかえます。岩手県内のすべての避難所が閉鎖され、一歩ずつ復興へとむかっています。神戸大学は、阪神・淡路大震災を経験した大学として、これからも被災地のみなさんに寄り添っていきたくと考えています。

# 平成23年度

# 神戸大学地域連携活動発表会

平成24年

1月20日(金)

13:30~16:30

瀧川記念学術交流会館2階大会議室

(神戸市バス36系統

神大文・理・農学部前バス停車 南へ徒歩5分)

神戸大学における地域連携事業を広く学内外に紹介し、更なる活性化を図るため、「地域連携活動発表会」を開催します。今年度は、「地域との連携の深まり—拠点をもつ意義」をテーマに、事例報告や講演、意見交換会が行われます。多くのみなさまにお越しいただき、地域連携活動への理解を深めていただきたいと思います。

プ

開会挨拶 中村 千春 理事(地域連携担当)

ロ

第一部

基調報告 奥村 弘 地域連携推進室長

事例報告

1. 平成23年度地域連携事業報告
2. 平成23年度学生地域アクションプラン活動報告

グ

ラ

ム

第二部

講演「地域連携と拠点」

兵庫県立大学 内平 隆之 講師

意見交換会 ~連携の拠点をもつ意義~

奥村 弘(※司会)

内平 隆之

坂江 渉(人文学研究科特命准教授)

石岡 由紀(保健学研究科博士後期課程)

布施 未恵子(篠山フィールドステーション地域連携研究員)

山田 辰男(篠山市政策部企画課 篠山に住もう帰ろう室主査)

入場無料  
当日参加可

閉会挨拶 奥村 弘 地域連携推進室長

【お問い合わせ先】

研究推進部 連携推進課 産学官連携グループ

Tel: 078-803-5427 Fax: 078-803-5389

E-mail: ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp

神戸大学地域連携推進室

<http://www.office.kobe-u.ac.jp/crsu-chiiki/>

---

平成 23 年度 神戸大学地域連携活動発表会報告書  
平成 24 年 3 月発行

発 行 神戸大学 地域連携推進室  
連絡先 〒 657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1  
Tel:078-803-5427 Fax:078-803-5389  
Email:ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp

印 刷 田中印刷出版(株)

---